
猫パニック！！

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫パニツク！！

【Nコード】

N8654L

【作者名】

白夜

【あらすじ】

猫神の神子^{みこ}と出会った少年…神威^{かむい}は神子の力で女の子に！由宇^{ゆう}と名を変えて生活しはじめた彼女は辛い未来を知っても明るく生きることを決意する。

プロローグ 雨の中で…（前書き）

白夜です。少々修正をしました。

プロローグ 雨の中で…

その日は酷い雨が降っていた。季節は梅雨、一日中降る雨は人々を憂鬱にさせる。

その空を窓から一日中眺める少年がいた。

彼の名は「天野神威」（あまのかむい）18歳。

綺麗でさらさらとした黒髪は肩よりも少し高い位置にあり、整った顔立ち、いわゆる美男子といってもいい。

「
」

神威はただ黙って窓から空を見ていた。

「はあ 何か面白い事でも起きないかな
」

ふと声がした方を振り返る。そこにいるのは神威と同じく綺麗な黒髪をポニーテールに結び寝転びながら漫画を読んでいる妹、

「天野由香」（あまのゆか、）

16歳
がいた。

「ねえ お兄ちゃん、暇だよ
」

と由香は足をバタバタさせる。

「そうだな
」

とため息をつきながら神威は空を再び見上げた。

彼ら兄妹は神威が8歳、由香が6歳の時両親を事故でなくし、二人暮らしだった。しかし、近所の人達に支えられて今まで生活してきた。

「（そういえば夕飯の材料がなかったな）」

神威は立ち上がって妹に買い出しに行く事を告げ、家を出た。雨は止む気配がない。

家から15分の所にある商店街につくと、神威はふと小物を扱う店の前にあった鏡を見た。普通に見れば美男子と呼ばれそうな顔立ちだが一つおかしい部分があった。

それは、目の色だった。左目はまるで燃えるような真紅の瞳であり、右目は透き通るような蒼い瞳だった。

妹の由香は髪と同じ黒い目だったが、神威は生れつきこうだった。

「うおっ！！やべえ！！ボーツとしてた！！」

いつの間にか20分位鏡を見ていた。慌てて先を急ごうとした時、不意に視界の端に白い何かが見えた。

「ん？今何か？」

そう思つて下を見下ろすと、

「みゃ〜」

一匹の猫がいた。白い綺麗な毛並みで思わず見とれていた神威だったが、ふと気がついた。

「尻尾が二本ある！！」

そう、この猫には尻尾が二本あった。さらに、

「 目が 」

神威は驚いた。なんとその猫の目は神威と同じ、左目が真紅の瞳で右目が蒼い瞳をしていたのだ。

ブローグ 雨の中で…（後書き）

どうも、白夜です。少しおかしい部分を訂正しました。読みやすくなっていたらいいと思います。

第1話 朝目覚めると（前書き）

はい！というわけでいよいよ話が面白くなってきましたよ！
簡単に登場人物のプロフィールを載せておきましょう！（ネタバレ注意）

あまのかむい
天野神威 18歳 高校三年生

身長 175？ 性転換後 155？

黒髪で顔立ちは良い。左目が真紅、右目が蒼。性転換後は髪が白髪で腰の辺りまである。

趣味はゲームをすること。

特技はピアノを弾くこと。

誕生日は4月5日

あまのゆか
天野由香 16歳 高校一年生 身長 155？

整った顔立ちで背中まである黒髪をポニーテールにしている。しっかりとした性格、目は髪と同じ黒色。

趣味は読書

特技は作曲、模写

誕生日は5月10日

こんな感じですかね？ではこれからよろしく願います。

第1話 朝目覚めると

不思議だった。その猫は神威から離れようとはせず、ずっとついて来る。

「うゝん（首輪も何もしてないから野良なんだろうか）」

と考えていると、急に猫が肩に飛び乗ってきた。

「うわっ！！！」

と思わず小さく叫んでしまった、するとゴロゴロと喉を鳴らしながら神威の頬を舐めたした。

「うわっ！ ちょっと あははは、くすぐったい」

このまま放っておいて帰るのも可哀相なので、神威はこの猫をつれて帰ることにした。

「あつ、お兄ちゃんお帰りなさい！！ ん？どうしたの？その猫」

由香が不思議そうに肩の猫を見た。

「ああ、買ひ物の途中で擦り寄ってきた。何だか不思議な猫だろ？」

由香は猫の尻尾と目を見ると、

「 本当だ お兄ちゃんと同じ目をしてるね」

と由香が言ったところで神威は、

「さあ、飯にしようぜ」

と廊下を進んでリビングに入るとそのままキッチンに向かい、夕食の準備に取り掛かる。

夕食と風呂を済ませて暇潰しにゲームをするとすでに夜中の1時を過ぎていた。

「寝るか」

神威はベットに入ると目を閉じた。すると腹の上に何かが乗ってきた。

「ん？なんだ、お前か」

猫は神威の上に乗ったまま体を丸めた。可愛いな、と思っているとそのまま眠ってしまった。

夜中、不意に猫は体を起こした。そして少年を見る。しばらくすると何かを決心したかのように少年の顔の横までくると、そのまま少年の唇に自分の口を重ねた。

翌日、日曜日で目覚ましもかけずにいたのになぜか神威は目が覚めてしまった。

「うーん」

眠たいながらも時計を見ると、午前7時、まだまだ眠れるな、と思い再び顔を枕に埋めようとして違和感に気がついた。

「ん？何で髪が白いんだ？」

視界に入った前髪が白いことに気がついた。それになぜか身体がとても軽い

体を起こすと背中から白い髪がさらさらと体の前に流れてきた。

「え？何でこんなに長く？」そこで言葉が詰まった。

（私ってこんなに声高かったかな？）さらに周りの景色がいつもより大きく見える。

不思議に思い洗面所まで行くと、目を覚ますために顔を洗ってから思いきって鏡を見た。

「誰？」

鏡の中には腰まで届く白髪で顔立ちがよくそれなりにスタイルのい

い美少女がいた。さらに、左目は真紅、右目は蒼い瞳をしていて、なぜか頭に三角のネコミミがついていた。よく見てみると尻尾もある。

「
神威は右手をあげる、すると鏡の中の少女も手をあげる。」

「
神威は呆然としていた。（え？何で？何があつたの？何で私が女に？え？え？どうしよう？）
そこでまたも気がついた。

「え？私？」

自分の一人称が私になっていたのだ。しかし、不思議と違和感がない

「と、とにかく由香に相談しなきゃ」

神威は由香の部屋へ向かった。

「うん」

由香はいつものように起きると軽く伸びをして部屋のカーテンを開けると朝日の眩しさに目を細めた。（いい天気だなあ）と思いながら顔を洗うために部屋のドアに手をかけると

神威は由香の部屋の前にきていた。

（困ったな、なんて言えいいんだろう）と試行錯誤していると、突然ドアが開いた。

「ひゃあー！！」

あまりに突然だったため変な声を上げてしまった。（え？えええええ？待つて待つて！まだ心の準備が　）

「
」

二人はしばらく無言でお互いを見ていた。（き、気まずい）沈黙を破ったのは由香だった。

「えっと？どちら様ですか？」

と少しオドオドしながら聞いてきた。

「え ええっと その 私は か、神威です」と正直に答えた。

「え？え？ええええ！？」

由香の驚きの声が家の中に轟いた。

第1話 朝目覚めると（後書き）

間違えて前書きに女性としての神威の情報を載せてしまいました（汗）

今後気をつけます。では次回をお楽しみに！

第2話 変わった日常 (前書き)

さあ、ついに話が動き出します!!
神威はどうなるのか? お楽しみに!!

第2話 変わった日常

「つまり、朝起きたら体が女になっていて、さらにそれにほとんど違和感を覚えない位に意識も女になっている と?」

由香はそう言ってテーブルの向かい側に座る兄、(姉?)を見つめた。

「うん、自分でも何が起きたのかわからないんだよねえ。昨日の夜までは何もなかったのに」

昨日の夜のことを思い出してみても変わったところはないし 私は何もしてない あれ?

「ねえ、由香?」

と何やら考えている妹に声をかけると、

「え?何?お姉ちゃん?」

顔が少し引き攣る。

「お、お姉ちゃん」ねえ」

「だって今は女じゃない」

「そうだけど」

何だかむず痒い。

「それよりも、この白髪と猫みたいな耳からたぶん昨日の猫が関係してるんじゃないかと思うんだけど」

不利になる話題はすぐに切り替えて本題に入る。

「そうかもね、でもあの猫どこにいったのかな?ねえ、それよりもその耳って本物?ちよつと触らせてよ」

と由香は私の耳を触ってきた。

「え? ちよつと ひゃあ!! 待って!! うん」

耳を触られると背筋がぞくぞくとして気持ちいいのか悪いのかわからないような感じがした。

「わぁ 本物だぁ 凄い」

由香は気がつかないようだ。しばらくしてやっと離してくれた。

「はあ はあ」

私はまだ朝方なのに疲れてしまった。

「まずは服をどうにかしないとね。身長は同じ位だから私の貸すよ

」

と笑顔で私を部屋に連れ込んだ（ちなみにかなり強引に）

「」

「あの」

先程とは反対に落ち込んでいる由香がいた。服を貸してあげるからと今着ていた寝巻を無理矢理脱がせた時に由香は私の胸をみて固まってしまったのだ。自分で気がついたがCカップはあるだろう。由香はAカップだったのでショックを受けているようだった。

「あの、由香？」

「」

ああ、これはもうしばらくは固まったままだろう。私は仕方なくまた寝巻を着てリビングに戻った。

「うーん」

と考えを巡らせる。昨日連れ帰った猫、あの猫は白い毛並みだった自分は今白髪で猫耳がついているから間違はなくあの猫が関係している。何とかしてみつけなければ。私は家の中を隅々まで探してみることにした。台所、風呂、客室と隅々まで探したが見つからず、私は部屋に戻ってベットに腰掛けた。

「これからどうしようかなあ」

思わず呟いた。

「ふむふむ、悩み事なら相談のるわよ？」

何処からか声が聞こえた。

「それがさあ 朝起きたら ってえ？誰！？」

思わず立ち上がり周りを見渡すが誰もいない。

「ここよ!!」

足元から声がしたので視線を下げると、そこにはあの猫がこちらを見上げて微笑んでいた。

第2話 変わった日常（後書き）

書き上げてから中途半端な終わりがただなあと反省しています（汗）
実は友達にこの小説を紹介した時にも言ったのですが、どんどん感想や御意見お待ちしております！！まだまだ修業が足りないため、
あたたかい目で見守っていただけたら嬉しいです！！
それではまた次回をお楽しみに！

第3話 変わった日常 2（前書き）

こんにちは！今回の話で大体の説明が終わります。わかりにくいかもしれないし、誤字脱字があるかもしれないのでご了承ください。
では本文をどうぞ！

第3話 変わった日常 2

「あ！」

私は思わず声を出して驚いた。昨日拾った猫がいきなり喋り出したのだから。

「し、喋ってる！？」

私は驚きながらもなんとか冷静になろうと深呼吸をすると、

「君は一体何者？」

と問い掛けた。

「私は猫神の神子^{みこ}っていうの。よろしくね」

「猫神？」

“神”という単語に私は興味がわいて思わず聞き返した。

「そう、私はあなた達が日頃から神様^{かみさま}つてよんでいる存在だよ。まあ私はまだ見習いだけだね」

「その見習いとはいえ神様が私に何の用があるの？」

私は素直に一番聞きたかったことを口に出した。

「うん、実は一人前の神様になるには人間の世界でパートナーを見つけてしばらく一緒に生活しなきゃいけないのよ。ここまではいいかしら？」

「うん」

と私は頷く。神様の世界でも色々あるようだ。

「簡単に聞こえるけどパートナーを見つけることが一番難しいのよ。まず自分の体と同じ特徴を持つ人を探さないといけないの。私とあなたは目の色ね。大体の見習いはこの時点で脱落するの。」

確かに世界中の人間の中からたった一人を見つけるのは至難の技だろう。

「でも貴方は私を見つけたわけね」

私がそう言つと、

「そうそう 後はあなたとしばらく一緒に生活するだけよ」

私が誰かの役に立てることは嬉しいが

「じゃあなぜ私を女にしたの？」

一番の疑問を聞いてみた。

「私はこのとうり見た目が目立つからあまり外をぶらつけないのよ。だから普段はあなたと一体化してるの。一応わたしも見習いとはいえ神様だからどうしても私の特徴が表に出るのよ」

「なるほど」

しかしこれでは学校にも行けないし、どうしたものか

「そうそう、ちなみに私と契約している間は頭の中で私と会話できるからわからないことがあるならいつでも聞いて」

そう言くと神子は“ぽんっ”という音と同時に消えた。

「え？あれ？ちよつと！！待って！！」

「なに？どうかしたの？」

「うわっ！！」

突然頭の中に声が聞こえたため驚いた。

「だから言ったでしょ？普段はあなたと一体化してるって」

「ご、ごめん。なんかなくて　あの、もうひとつ質問があるんだけど？」

「なに？」

「この耳と尻尾はどうにかならないかな？なんか恥ずかしくて」

こんな格好では外を歩けない。間違いなく注目的になってしまう。

「ああ、なるほどね。　実はあなたは私と一体化してるから簡単な

“力”が使えるの」

「力？」

「そう、簡単に言えば魔法みたなものね。それを使えば耳と尻尾くらいは隠せるわ。さすがに姿を変えるのは無理でしょうけど」

驚いた。まさか自分が魔法を実際に使える日がくとは思ってもいなかったからだ。その後は力の使い方を一通り教えてもらった。

「なかなかいい感じね　じゃあ最後に注意を言うわね。この力を発動中は眠らないこと！！」

『え？何で？』

『この力は神威本人の意識で発動しているから意識がなくなれば消えちゃうの。だから学校なんかでうつかり眠らないようにね気を失うのもだめよ』

意外な弱点だった。学校では神威はいたって真面目なので居眠りはないが昼休みなどはよく教室で昼寝をするのだ。それができないとなると、午後からの授業でうつかり寝てしまいかねない。そうなれば安全な場所を探して休まなければならない。

『あとふたつ。力の使い方だ注意があるわ。この力はその日のうちしか効果を発揮しないの。だから何か物を作ったり変化させても次の日には元に戻るから気をつけてね。あと、使いすぎはだめよ。体に負担がかかるからね。たぶん凄い眠気に襲われるから最悪他の人の前で正体がばれるかもしれないわ』

『わかった』

その後由香には事情を説明して三日後の水曜日から転校生として学校に通うことにした。

第3話 変わった日常 2（後書き）

次回から学校生活が始まります。新しいキャラクターを出すかもしれないので楽しみに〜

第4話 長い一日1（前書き）

こんにちは（。）。／ついに学校生活がスタート！！新しいキャラクターも出てきてやっとならなくなってきた感じですね！！さて、本文を読んでいただいたらわかるのですが少々改行のミスがあります。気がついた時には手遅れでした（汗）次からは気をつけます！

第4話 長い一日1

神威は高校の職員室のソファに座って考えを巡らせていた。神威は今女子の制服を着ている。薄い水色のラインが涼しさを際立たせるセーラー服である。髪は妹の由香のお気に入りポニーテールである。

「はあ」

神威は今日何度目なのか分からないため息をついた。

「あら、まだ慣れないのかしら？」

神子^{みこ}がまるで慰めるように話しかけた。

「だって」

無理もない。いくら意識も女性らしくなったとはいえ元は男子なのだ。女子の制服を着るのにも多少なりとも抵抗があった。

「私これから大丈夫なのかな」

何か嫌な予感がするのを神威は無理矢理追い出すように頭をふるふると左右に振った。

「由宇^{ゆう}さん 行きますよ」

と担任の田中由美^{たなかゆみ}が声をかけてきた。

「はい」

神威は学校では天野由宇^{あまのゆう}という名前で、神威の親戚ということで過ごすことになった。両親は仕事で海外に行くことになり神威は手伝いとして一緒について行くことになった。その間妹と一緒に由宇が残ることになった。という設定である。

（うつかり眠らないように注意しなきゃ）

由宇は現在神子からもらった力（神力というらしい）を使って耳と尻尾を隠している。この力は眠ったり気絶したりすると効果が切れてしまうのだ。廊下を歩きながらこれからの生活にどこか不安になる由宇であった。

神威がいつものように登校してこないことを不安に思う二人がいた。一人は女子で名前は空野葵そらのあおい高校入学後からずっと神威と同じクラスで仲がよかった。もうひとりはやまだりくは山田陸神威と帰る方向が同じだったため話しかけてみたのがきっかけで仲よくなったのだ。

「ねえ、陸。神威最近どうしたのかな　もう二日も学校来てないよ？」

葵は陸に不安そうな顔を向けた。

「ああ、そうだな。何かあったのかもな　今日の放課後様子を見にいつてみるよ」

「あ、じゃあ私も行く！！」

二人で放課後の予定を組んでいると担任の田中が入って来た。

「はい、席について！！HRはじめるわよ」

由宇（神威）は教室の外で耳をすませていた。

「皆さんにお知らせがあります。天野神威君が先週限りで転校することになりました」

教室の中から、

「ええ……！？」

という声が聞こえてきた。葵と陸の驚く顔がドアの隙間から見えて、申し訳ないような気がした。

先生が由宇が話しておいた内容を皆に伝えると、ついにその時がきた。

「はい、では今の話しかもわかるように今日は転校生が来ていま

す。さあ、入って」

由宇は覚悟を決めてドアを開けた。顔を伏せて皆の前に立つ。

「うわあ、スゲー」

「綺麗な髪」

「あれは染めてるのかなあ」

という声の中、由宇はゆっくりと顔を上げ、真紅と蒼い瞳で皆を見ると、口を開いて透き通るような声で話す。

「天野由宇です。皆さん、これからよろしくお願いします」

その日の昼休み、由宇は教室で弁当を広げていた。「ねえ、由宇さん？ちよつといいかしら？」顔を上げると葵と陸が立っていた。

（葵、それに陸。たぶん神威のことについてよね）

「はい、何でしょう？ えっと、葵さんと陸君ですよね？」

あくまで知り合い程度の態度をとる。

「ええ、よくわかったわね？」

「ええ、神威から話は聞いていましたから」

由宇は二人に嘘をついていることに罪悪感を感じながらもそれを我慢した。「そう、ねえ神威は何で私達には何の連絡もしてくれなかったのかなあ」

葵は俯いたまま呟くように言った。

「」

由宇は何もかける言葉が思い浮かばなかった。ただ何故か葵の頭を撫でた。

「　　なんでかな、由宇さんに撫でてもらうと落ち着く」

「　　由宇でいいよ」

「　　うん、ありがとう由宇」

葵は落ち着いたようで自分の席に戻って行った。

「　　すまないな」

「え？」

突然陸が話しかけてきたので驚いた。

「あいつなりに気持ちを整理しようとしてるんだろうがな。いきなり三年間仲良くしてたやつがいなくなっただ。ショックが大きかったんだろう」

「あなたも寂しい？」

由宇は陸を見つめたまま尋ねた。

「ああ、そうだな、だけど」

そう言うとき由宇の方を向いて不思議そうにした。

「なんとなくだが、君は神威と同じ雰囲気があるな」

「え！？」

突然の言葉に由宇は驚いた。

「最初はその目のせいかと思ったけど、やっぱり親戚だからなのかな、似てるんだよ、葵を慰める時の雰囲気だね」正直焦った。まさかこんな形で自分の事を悟られるなんて。

「私は、何だかそうしなきゃいけないような気がしたの」

「そうだな、なあ、天野さん」

「由宇でいいよ」

私は笑顔で言った。

「そ、そうか、じゃあ由宇、葵のことは任せていいか？」

少し照れたように陸は目を泳がせた。

「うん、任せて、陸」

私は笑顔でそう言うとき席を立った。

第4話 長い一日1（後書き）

うーん、だんだん神威としての感じが消えてきましたね（汗）由宇として頑張っているためそこはご了承くださいませ！
では次回をお楽しみに！

第5話 長い一日2（前書き）

こんにちは（。 。 ）ノ

さあ新キャラも出たのでまずはプロフィールを

そらのあおい

空野葵 17歳

誕生日 1月20日

身長152cm

肩まで伸びた黒髪と整った顔立ちが印象的、性格はおとなしいが怒ると怖い。

やまだりく

山田陸

18歳

誕生日 6月1日

身長170cm

がっしりした体格で髪は黒髪で少しくせ毛のある髪型、周りをよく見ており、なかなか鋭いところがある。

こんなところですよ。では、本編をどうぞ〜

第5話 長い一日2

時間は流れ、放課後。由宇は葵に、

「ねえ、時間はあるかな？」

と聞いた。

「え？ うん、大丈夫だけど」

まだ少し沈んでいる様子で葵が答えた。

今二人は学校の屋上に続く階段にきていた。

「神威から聞いたんだ。ゆつくりできて気持ち落ち着けるのにぴったりの場所」

「もしかして旧校舎の屋上？」

この翔星高校（せうせいこうこう）は新校舎と旧校舎があり旧校舎は現在部活動の部室として使われている。旧校舎の屋上は立入禁止となっているが鍵はかかっていない。しかし意外に鍵が開いていることはだれも知らずたまたまそれに気がついた神威はこの場所を気にいつていた。

「うん、普段は誰も来ないからね。休んだり、考え事するのにいいらしいよ」

二人は屋上に続くドアを開けた。今日は天気もよく綺麗な青空が見えた。屋上には入口に背を向けるようにベンチが一つ置いてあり。日差しから守るための小さな屋根がついていた。

「座ろう？」

由宇はそう言っていると葵を見た。

「うん」

葵は少し戸惑いながらも頷いた。

ベンチに座ったはいいが何から話そうか由宇は悩んでいた。
(うーん、どうしよう　なんて言ったらいいのか考えてなかった
なあ)

ふと視線を感じて隣を見ると葵がこっちを見ていた。

「どうしたの？」

由宇は微笑みながら聞いた。

「え？　いや　その　綺麗な髪だなあって思ってた」

そう言っていると葵も少し微笑んだ。しかし何か違和感のある笑い方だった。

「葵　神威がいなくなったから寂しい？」

由宇は微笑んだまま尋ねた。途端に顔から笑みが消えた。

「　うん、ずっと一緒のクラスで一番仲がよかったからね」

由宇は真剣な顔を見ると、

「たぶん神威も同じだよ」

と言った。

「え？」

葵は顔をあげて由宇の方を見た。

「いきなりだったんだもん、誰でも混乱するよ。友達に会えなくなるのは辛いけど　でも神威なら次に会う時に不安にさせないようにいつまでも落ち込まないようにすると思う。だから　葵も元気出して？　次に会えた時にいっぱい文句言って困らせてあげればいいわよ」
そう微笑むと葵の頭を撫でた。

「　うん、そうだよ　ありがとう由宇。なんかすつきりした」

そう言っていると葵は由宇に満面の笑顔を向けた。これなら大丈夫だろう。

「ねえ、由宇？」

「ん？　何？」

「一緒に帰らない？」

「うん、もちろんOKだよ」

二人はお互いに笑顔を浮かべると屋上を後にした。

私は陸と葵と一緒に歩きながら心の中でやれやれといった感じで前を歩く二人を見ていた。下校時間ということもあり周りには私達と同じように下校中の人達がちらほら見える。

『さつきはお疲れ様』

神子が私に話しかけてきた。

『葵のこと？』

私は頭のなかで答えた。『ええ、あれだけ沈んでたのにもう元気になったんだから。私にはあんな気のきいた言葉は出てこないわ』

『そうかな、ただ思ったことを口にしたただけなんだけどな』

私は少し笑みを浮かべた。

『そう、なら尚更凄いわね』

神子の声はどこか楽しそうだった。

「あ！！」

すると葵が突然驚いたような声を出して前方の歩道橋を指差した。すると歩道橋から小学生くらいの男の子が身を乗り出して落ちそうになっていた。母親は知り合いらしい人物と話しているらしく気付いていない。

「おいおい、あれやばいんじゃない」

陸がそう言った瞬間私は走り出していた。

「え？」

葵が驚いたように目を点にしていた。

私と歩道橋までは約30m、すると男の子はついに体の重心が偏り本格的に落ちる態勢になっていた。

（間に合え！！）

そこからはまるでスローモーションのようだった。母親がようやく気がついて男の子を掴もうとするが間に合わず、男の子は頭から落

下し始めた。私は車道に出ると走ってくる車を次々と避けながらぎりぎりでも男の子を抱き抱えたと素早く歩道に飛び込んだ。まるで親猫が子猫を守るための動きだった。

「はぁ はぁ 大丈夫？」

肩で息をしながら男の子に話しかけると、

「うん ぐすつ ありがとう お姉ちゃん」

と涙目ながらもお礼を言ってきた。すると母親が走ってきた。

「和也！！大丈夫！？怪我はない！？」

そう言うとも母親は私に何度もお礼を言っていると帰っていった。

しばらくして葵と陸が駆け寄ってきた。

「由宇！！大丈夫！？」

「まったく、無茶しやがって」

私は笑顔で二人に大丈夫だと言うと立ち上がった。

「でも凄かったね。由宇って凄く足が速いのね！！しかもあの動き！！まるで猫みたいだったよ！！」

と葵が興奮気味に私の手を握りながらキラキラと目を輝かせている。

「あはは」

私は苦笑いしつつさっきの体の反応に若干の戸惑いを感じていた。なぜあんな動きができたのだろうか。

葵と陸と別れて家に帰ると、自分の部屋に入り部屋着に着替えてベツトに腰掛けた。

『ねえ神子、さっき何だか猫みたいな動きができたんだけどさ、あれも一体化によるものなの？』

神子に確認のために話しかけた。

『ええ、そうよ。おそらく私の猫としての力ね。たぶん普通の人間にはできないこともできるわよ？たぶん勘も鋭くなっただろうし、高い所にも簡単に飛び乗れるでしょうね』

私は素直に驚くと同時に不安がよぎった。もし私の考えが正しいなら

「ただいま」

ちょうど由香が帰ってきた。なぜか急いだように階段を上がってくる。私が不思議に思っていると部屋のドアが開いて由香が入ってきた。

「ねえねえ、神子ちゃんいる？いいもの見つけてきたよ！！」そう言う手を持っていたものを目の前に差し出した。

「」

なぜだろう、それから目を離せない。妹が持ってきたもの、それはおそらく今の私にとって一番に興味を惹かれるもの。そう、それは“ねこじやし”だった。

「あれ？お姉ちゃん？どうしたの？」

妹が不思議そうに聞いてきたが今の私にはその質問すら届いていなかった。ぴょんと耳と尻尾が現れると同時に私はねこじやらしに飛びついていった。

「ええ！？お姉ちゃん！？」

妹の驚いた声がしたが関係なかった。私は我を忘れ普通の猫と同じようにひたすらねこじやらしで遊び続けた。そしてそのまま私の長い一日は終わったのだった。

第5話 長い一日2（後書き）

次からは笑いをたくさん取り入れていきたいと思います。

また、ご意見ご感想、リクエストでもいいのでどんどん教えてください！
さい！お待ちしております！
では次回をお楽しみに！

第6話 転校生は人気者！？（前書き）

こんにちは（。。（）ノ

そろそろ一話ごとの内容を長くしようかなと思っています。そのため更新のスピードが落ちるかもしれませんが、頑張りたいです！

第6話 転校生は人気者！？

窓からの日差しに思わず目を細めて私は窓の外を見ていた。外は綺麗な青空が広がっていてチュンチュンと雀も鳴いていた。

「雀かあ」

私の目は雀をじっと見たまま怪しい光を宿していた。

「お姉ちゃん！！ねえ！！お姉ちゃんってば！！」

由香の声で我にかえり振り向くと、由香は何やら不機嫌そうに腰に手を当てて私を見ていた。

「さつきからずつと呼んでるのに何にも反応しないんだから！！ご飯冷めちゃうよ！！」

それだけ言つとさつきと部屋から出ていった。

私は制服を来てリビングに入り椅子に座るとため息をついた。

『ねえ、由宇？まさかと思うけどさつき雀を見て捕まえたのか思っただんじやないのかしら？』

そう言われてみるとそうかもしれない。

『って、やばいじゃん！！余計に猫に近づいた気がする』
はつきりいつてこれは大変な事だ。もしも学校で猫みたいなのをした日には全校生徒から大注目だろう。

その後朝食をすませるとまだ30分ほど時間があまっていたため、

由宇はテレビをつけニュースを見ていた。

「ねえ、お姉ちゃん？」

由香が話しかけてきたので首だけで振り向くと

由香はまたねこじやらしをふりふりと揺らしていた。

「あつ ああ」

由宇は無意識に体ごと由香の方を向くと飛び掛かる態勢になる。

「お姉ちゃん！！我慢よ！！これは慣れなきゃいつか大変な目にあ

「うわよー！」

そう言う由香は半分おもしろそうに見えた。

「　　ああ　も　もう無理　　ああ　」

由宇は目をとろんとさせて体をうずうず　させている。耳はぺたんと垂れて尻尾はせわしなく動いている。

「　　じゃあ今日はここまでね　」

と言うと由香はねこじやらしを隠した。

「　　あっー！！　」

由宇は正気に戻ると、今自分は何をしていたんだろうかと恥ずかしくて少し顔を赤らめた。

学校にいつものとおり登校すると、玄関前の掲示板に凄い人ばかりが見えた。

『あら？何かしらね？』

神子が興味があるのか『行ってみましょうよ』と言うので私は仕方なく近くに行こうとすると、突然腕を引っ張られた。

「こっちに來てー！！」

この声は葵？きちんと葵であることを確認すると質問をする。

「葵　どうしたの？」

すると葵は急に振り返り困った顔をした。

「それがさ　昨日の事故の現場に写真部の人がいたみたいだね。学校中に由宇のうった写真が記事にされて張り出されてるのよ」

「ええ！？」

耳を疑った。まさか昨日のことがここまで大きく広まっているとは「ほら、これよ」

と一枚の紙を差し出した。それは校内新聞で、見出しには『美少女転校生男の子の命を救う！！』と大々的に写真付きで載っていた。

「　　」

私は開いた口が塞がらずにいた。

「さらに由宇は可愛くて綺麗だからね。今回の事件でファンクラブまでできたみたいよ？」

「ファンクラブ!？」

更なる追い打ちを受けて私はもはや言葉も出なかった。時間もないのでコッソリと玄関を通り抜けて教室に入ると予想どおりあつという間に囲まれてしまった。

「天野さん!! 凄いじゃん!!」

「カッコイイ!!」

「俺と付き合ってくれ!!」

等等など、最後のはいささか引いてしまったがこれでめでたく私の学校での知名度は最大になってしまった。

それからが大変だった。休み時間になるたびに私はファンクラブの人達に追いかけ回された。必死に逃げ回っていたがこれでは拉致があかないので昼休みに体育館で集会を開く事になった。

「それでは天野由宇ファンクラブのための交流会を開会します!!」
司会は友人代表で葵に頼んだが　なぜだかいつもとキャラが違うような　気のせいだろうか

「では!! 本日の主役の登場です!!」

その言葉を聞いて私は洪々とステージ袖から出てきた。体育館には入りきらないぐらいの人がいて、私は一瞬驚いたが、

「えっと、天野由宇です!! 今日短いですが皆さんとの交流を含めてこの集会を開かせていただきました。最初にお願いがあります。私はファンクラブを作るのは構いませんが休み時間に教室まで押しかけてくるのはちょっと　私は普通に生活したいので。たまにこ

のような集会を開くのでそれで勘弁してください」

ファンクラブの人達はまあそれならと納得してくれた。

「じゃあ次に質問コーナーに移ります!!」

葵がそう言った瞬間半分ぐらいの人が手を挙げた。

「彼氏はいますか？」

「えっと 今はいません」

男子が何人かガッツポーズをとっている。いつか告白されそうで恐いな

「その髪は地毛ですか？」

まあ白髪に染める人はいるが地毛の人はまずいないだろうし

「はい、地毛ですよ」

「その目も本物なんですか？」

「ええ、本物です」

等と質問は時間ぎりぎりまで続いた。

放課後、葵に屋上で休むと言って教室を出ると、旧校舎に入り階段を昇って屋上のドアを開けた。この時、神力で鍵をかけておけばよかったと後で後悔した。

ベンチに腰掛けて朝からの出来事を思い出していると盛大にため息がでた。

『あら、お疲れ様、大変だったわね』

神子がどこか楽しそうに言った。

『はあ、こんなに疲れたの生まれて初めてだよ ふうああ』

朝から忙しかったことに加えて最近精神的に疲れる事ばかりだった

め、ベンチに寝転ぶと屋根を見上げながら私はゆっくりと意識を手放した。

教室で葵は自分の荷物を整理すると、由宇を探して旧校舎に向かっていた。

（由宇ってなかなか可愛いところがあっていじめたくなるのよねえ）

階段を上がりドアを開けるとベンチに由宇が横になっているのが見えた。

（あら？寝てるのかな？　まあ今日は忙しかったし　せめて寝顔だけでも）

そう思つて顔を覗き込んだ葵は固まった。

「え？」

思わず声がでた。由宇の頭には普通の人間にはないものがあつた。

「み　耳？」

葵が最初に口にしたのは“何で？”といった言葉ではなく、

「　か　可愛い」

という言葉だつた。由宇の顔を見ると、どうやらぐっすり寝ているようでそう簡単に起きないように思った葵は、恐る恐る耳を触つてみた。

（ほ　本物だ！！）

感触が本物であると確信した葵は更に耳を触りだした。

「ん、うん」

触るたびに由宇がくすぐったそうに身をよじるため葵はそれが面白くて不意に手に力を入れてしまった。

「痛っ!!」

由宇は痛みに驚いて飛び起きるように頭を上げると覗き込んでいた葵と盛大に“ゴンッ”と頭をぶつけてしまった。

「~~~~!!」

二人とも声には出さないが痛みに顔を歪めてうずくまった。

「え？葵？」

由宇は驚いて葵を見た。葵はまだ額を押さえて涙目になっている。

「神子　もしかして　見られた？」

由宇は青ざめながら神子に話しかけた。

「ええ、ばっちり見られたわね」

「どうしよう」

由宇は未だにうずくまっている葵を見ながら途方に暮れるのだった。

第6話 転校生は人気者！？（後書き）

最近疲れがたまってきました（汗）

でも投稿はできるだけしていきたいので応援よろしくお願いします。
では、次回をお楽しみに！

第7話 秘密（前書き）

こんにちは（。°。°）ノ
今回は少し短めです。近々また新キャラを出すかもしれないのでお楽しみに〜

第7話 秘密

由宇は神力を使い屋上の入口に鍵をかけると、ベンチに座っている葵の隣に並んで座った。

「えっと 何から話せばいいかなあ」

由宇は困ったように肩を竦める。それにつられるように由宇の頭にある耳もぺたんと力無く垂れた。

「あの 由宇、その耳は？」

葵が恐る恐る聞いてきたので由宇は諦めたように笑うと、

「実はね、私は猫神っていう神様なんだよね」

と言った。由宇は事前にもし正体がばれたら自分は“猫神”であると言っことにしていたのだ。あくまで“神威”であることは黙っておくことにした。

「か 神様？」

葵は目を丸くして私を見てきた。葵には悪いけど自分が神威であることは話せない。余計な心配をかけたくないから

「正確には私の中に猫神が入っているっていうのが正しいかな 神子？」

『何かしら？由宇？』

そう言うと神子が私の体から姿を現す。真っ白で綺麗な体に真紅と蒼の瞳、そして二本ある細くて綺麗な尻尾。何度見ても目を奪われそうになる。

葵は神子を見てさらに驚いているようだ。

『はじめまして、葵さん。私は神子^{みこ}よ あなたのことは由宇の中から見えたわ。よろしくね』

「はい！！こちらこそ！！」

葵は深々とお辞儀をした。その後“神力”等のことをひとつり話した。

「じゃあ やっぱりその耳は」

「そう、本物よ」

そう言うと、由宇は 耳と尻尾を隠した。

「まだ信じられない 目の前に本物の神様がいるなんて」

由宇は少し困ったように笑った。

「葵、このことは秘密だからね？余計な心配かけたくないから」

葵は深く頷いた。

「わかった。誰にも言わない。約束するわ！！」

「うん、ありがとう」

その後、二人で帰っていると不意に葵が口を開いた。

「陸には言わないの？一応一番仲がいいのに」

「うーん、ばれたらちゃんと話すけど、ばれないうちは黙っておきましょうか。できるだけ周りには知られたくないから」

「わかった、じゃあ黙っておくわね」

自分の秘密をこうして話せるのがこうも楽だとは思わなかった。今まで神子にしか相談できなかった事が葵にも話せることになったのだ。不安が軽くなったようだ

これからの生活にが変わらず平和であることを願いながら由宇は葵と夕暮れの帰り道を帰っていった。

第7話 秘密（後書き）

白夜「どうも、白夜です！！いやぁだいぶ落ち着いて書けるようになったきました」

由宇「本当よね、昔は誤字脱字ばかりで人に見せれるような作品じゃなかったからね」

白夜「由宇、いきなりそれは酷いな　泣きそうだぞ」

由宇「だって本当のことじゃないの」

白夜「うっ　返す言葉がない　そうさ　どうせ　うわああああん」

由宇「えっと　作者が泣き出してしまったので私がかわりに　次回をお楽しみに」　次

第8話 由宇頑張る！（前書き）

こんにちは（。°。°）ノ

ついに新キャラ登場します！由宇の頑張りにご期待ください！！

第8話 由宇頑張る！

梅雨もあけた青空の下、由宇は白髪のパニーテールを揺らしながらいつものように学校に登校していた。

「由宇！おはよう！」

私の肩に葵が手をのせながら元気のいい声で挨拶してきた。

「おはよう、葵。何だか楽しそうね？」

葵の顔はいつもよりどこかにやけているようだった。葵は思っていることが意外と顔に出るのだ。

「実はね 今日転校生が来るらしいよ！！」

私は珍しいなと思いながらも自分も中途半端な時期に転校してきたことになっていたことを思い出して苦笑いした。

「由宇みたいに仲良くなればいいなあ」

と葵は笑顔で言った。確かに仲良くなればそれにこしたことはないが

朝のHRが始まる前の時間、私は葵と陸と一緒に転校生がどんな人

物かを想像していた。

「意外と強気な感じの女の子とか？」

と葵が最初に意見をだした。すると陸が

「由宇みたいにまた髪の色が珍しい人とか」

いやいや、そんなに珍しい人がたくさんいても何だか複雑な気持ちになるだけだし
と心の中ではできるだけ普通の人を期待していたがこの期待はあっさり外れることになる。

ガラッ

という音と同時に担任の田中が入ってきた。

「はいはい、席について〜HR始めるわよ〜」

とりあえず葵も陸も自分の席に戻った。

「まずは転校生を紹介しましょう！入っていいわよ〜」

転校生はゆっくりと教壇の前に立った。皆から驚きの声が出る。白を強調した制服とよく似合うような白い肌、それと反対にさらさらで見る者を魅力するような腰まで伸びた黒髪の美少女だった、そして

「！！！」

私は驚きに目を見開いていた。その瞳は自分と反対、つまり左が蒼で右が真紅の色をしていたのだ。

くろがみすばる
「黒神 昴　よろしく」

そう言っていると昴は私の方を見ると、少し驚いた顔をした。

「じゃあ黒神の席は窓際の一番後ろね」

こうして謎の転校生を迎えてのまた新しい生活がはじまった。

休み時間昴は私を除くクラスの皆から質問攻めにあっていた。

「どこから来たの？」

「その目綺麗だね」

「俺と付き合ってくれ！」

おい、最後のやつ私の時も言ってきたでしょ。どんだけ軽い性格してるのよ。

等と思いながらその様子を見ていたが、昴はどこか面倒な表情を浮かべると質問が途切れた時に教室を出ていった。

「あまり他人を寄せつけない感じだね。由宇と似たような目をしてるから由宇なら何か話してくれるんじゃないかな」

いつの間にか隣にいた葵が私に声をかけてきた。

「そうだね　私も声かけてみようかな　何かしらの反応はある

かもしれないし」

こういうタイプの人はそのうち孤独になって虐めの対象になる。誰かが最後まで守らなければならぬのだ。

それから一週間が過ぎた。私の予想どおりで私以外は誰も話しかけなくなり、影でこそこそと悪口を言う人が増えた。

「黒神さん、お弁当食べない？」

私はそれでも毎日昴に声をかけ続けていた。

「私に構わないで」

昴はそう言うつと窓の外に視線をそらした。

私は仕方なく自分の席に戻ると葵に声をかけられた。

「まだ心を開いてくれないね」

「うん、どうしたらいいかなあ」

私は葵を見ながらそう尋ねた。

「うーん、でも由宇ならうまくいくような気がする」

「え？」

意外な言葉を言われて私は驚いた。

「だって黒神さん由宇を見る目が他の人とは違うもん」

葵はそう言つと笑顔で「頑張つてね」と言つて席に戻つていった。

「他の人とは違う目かあ」

私は昴の方に目を向けると相変わらず外を眺めたままだった。

「よし、頑張りますか!」

と私は小さく呟いた。

その日の放課後、私は帰りながら明日は昴にどう声をかけようかを悩んでいた。髪型を変えてみるとか良いかも、とたまたま髪を結んでいたゴム紐をはずした時、いつだったか男の子を助けた歩道橋の階段の上に昴と数人の女子を見つけた。私は嫌な予感がした。

「ねえ黒神さん? あなた最近私達を無視しすぎじゃない?」

「」

やはり昴をよく思っていない女子達だ。明かに敵意をむきだしにしている女子に囲まれている昴は睨むような目で周りを見ている。

「私に構うな」

昼休みに私に言った言葉と同じだがあきらかに言葉の重みが違った。周りの女子はその言葉が頭にきたのか激怒したように

「生意気ね、ちよつと自分の立場をわからせてあげないとね!

「！」

そう言うのと喋っていた女子は昴を階段へと突き飛ばした。

「！！！」

私は反射的に走り出すと階段を駆け上がり昴を後ろから抱き抱えた、しかし勢いがついていたため支えきれず、かばうように階段から落ちた。長い白髪が前方にながれて昴の顔にかかる。昴は驚いたようにぼつりと

「お母さん」

消えるほど小さかったが確かにそう聞こえた。私は疑問に思う前に地面に頭を打ちつけ、そのまま意識を失った。意識を失う瞬間昴の泣いている顔が見えた気がした。

第8話 由宇頑張る！（後書き）

白夜「ふいゝ終わったあゝお疲れ様〜」

由宇「全く、私は階段から落ちたのよ？そんな気の抜けた感じに言われると頭にくるけど」

白夜「まあまあ、いい感じのキャラなんだからさ。そんなこと言わないで、ね？」

由宇「まあいいけど」

神威「っていうか俺は最近名前が出てきてないぞ。もしかして俺は出番もうないのか？」

白夜「うお！神威！びっくりするじゃないか！心配しなくても

大丈夫だよ そのうち出すから」

神威「何か納得いかねえ」

白夜「では次回をお楽しみに〜」

第9話 黒い神（前書き）

こんにちは（。°。°）ノ

新キャラのプロフィールです！

くろがみすばる
黒神昂

5月25日生まれ

年齢 18歳

身長 155cm

趣味 歌を歌うこと

特技 気配を消すこと

腰まである綺麗な黒神が特徴。目は由宇と反対で左が蒼で右が真紅。あまり人と仲良くしようとしませんが実は淋しがり屋。

では本文をどうぞ！

第9話 黒い神

「んっ あれ？　ここは？」

私はどうやら気を失っていたらしい。辺りを見渡すと、そこは必要最低限の物しか置いていない　ようなキレイに片付いた部屋だった。

『神子、私どれぐらい寝てた？』

私は神子に今までの経緯を聞いた。

『三時間くらいかしら。ちなみにここは黒神昴の住んでいる部屋よ』

私は昴を助けようとしたことを思い出して慌ててベットから飛び出した。

「そうだった　黒神さんは無事だったの？」

そう神子に尋ねた時、ドアが開き昴が入ってきた。

「起きたのね」

そう言う私の前に立ってじっと見つめてきた。これほどの美少女に見られると何だか照れてしまう。

「あのー」

「なぜ私を助けたの？」

私の言葉を遮るように昴は質問してきた。

「え？」

私は一瞬面食らったように間抜けな返事をしてしまった。

「あれくらい自分でどうにかできた。なのにどうして私を助けようとしたの？」

昂は少し威嚇するような目で私を見ながら言った。

「うーん、何でって言われてもねえ　私はただ危ないと思ったからそうしただけだし」

私は素直にそう言った。危ないと思ったから助けようとした。別に悪いことはしていないが

「ただそれだけか？」

昂は呆れたような顔をしていた。

「うん、それだけ」

私は自然に笑顔になった。昂は私の顔を少しじつと見つめると顔を綻ばせて

「全く、お人よしにもほどがあるな。でも私はおかげで助かった。ありがとう」

私は昂がお礼を言ったことに少し驚いたが、だいぶ心を開いてくれたことの方が嬉しかった。

「ねえ、黒神さん」

「昴でいいぞ」

「じゃあ昴、階段から落ちる時に「お母さん」って言ってたけど？」

昴は少し俯くと、

「私の母親は階段から落ちた私を庇って死んだんだ。 ちょうどお前が私を助けたみたいにしてな」

「そうだったの ごめんね」

私は慌てて謝った。

「いいんだ、それにお前は 由宇は母に雰囲気似ている。 何だか落ち着くんだ」

私は名前を呼ばれたことに気が付いた。これはお互いに仲良くしようということにとらえていいのだろう。葵が言っていた他の人と違う目で見られていたのは私が母親に似ていたからだったのか。

「よろしくね、昴」

昴は少し頬を赤くしながら小さく

「 ああ」

と言った。

『はいはい！仲良くなったところで話題を変えてもいいかしら？』

いきなり元気のいい声と同時に昴の体から黒い猫が飛び出してきた。

「やっぱり、昴も神様と契約してたんだね」

私は薄々わかっていたので得に驚かなかった。

『始めまして！私は 月^{ゆえ}っていうの！よろしくね！』

そう言うとも月はその場でくるりと一回転した。かなり元気者なようだ。見た目は黒猫だが瞳は真紅と蒼、そして尻尾がとてもふさふさしていて思わず触りたくなる

「月さんね。よろしく。私は天野由宇よ。本当の名前は天野神威っていうんだけどね」

私が自己紹介をすると神子が私の中から出てきた。

『月、久しぶりね』

神子はそう言うとも月の正面に座った。

『姉さん！久しぶり！』

「姉さん！？」

私は思わず声を出して驚いた。

『ええ、私達姉妹なのよ』

神子はふふつと笑うと昴を見た。

『ちゃんと昴さんにお礼を言いなさいよ？倒れたあなたの正体がばれないように“神力”でああなたの耳と尻尾を隠してくれたんだから』
私はハツとして昴を見ると、

「ありがとう、昴」

と笑顔で言った。しかし、昴は顔を真っ赤にして俯いている

「？昴？」

私が不思議に思っていると昴はようやく口を開いた。

「ゆ、由宇、本名が“神威”ってことは」

昴おそるおそる私を見た。

「あ、そうか。私は今女だけど元々男なんだ。秘密にしててね」

私はそう言つと笑顔を昴に向けた。昴はさらに顔を真っ赤にして

「わ、私は男に抱きしめられたのか」

そう言つてオロオロしだした。その姿は普段の様子とのギャップから見ていて可愛らしかった。

『まあまあ！今は女なんだからいいじゃない！』

月がそう言つと

「よ、よくない!!」

と昴はさらに混乱したように目をキョロキョロと動かした。耳や尻尾が出てしまっているのが本当にまいつているようだ。その後、昴が落ち着いてから話を再開させた。

「さっきは取り乱してすまない」

といつものクールな昴に戻ると私を見てから何か考えたようなそぶりをみせると

「私達はまるで鏡だな」

と言った。私は昴と近くにあつた鏡で自分を見た。

「本当だ　何だか“光”と“影”みたいだね」

と私は言った。

「光と影は隣り合わせだ。光のない所には影はできない」

そう言つと昴は私を見た。

「これからよろしく」

そう言つと昴は手を出してきた。私は笑顔でその手を強く握り返した。

この日、私にとって掛け替えのない親友が一人増えた。

第9話 黒い神（後書き）

白夜「はいっお疲れ様」

月「やっとでられたわー！！皆これからよろしくね！！」

白夜「月の名前は月と書いて“ゆえ”と読みます。これは中国での読み方らしいのですが人から聞いたただけなので正直不安ですが名前じたいは気に入っています」

月「姉さんともどもこれからよろしくね」

白夜「では、次回をお楽しみに」

第10話 覚醒（前書き）

こんにちは（。。（）/
最近暑くなってきましたね。
それでも頑張ってます。

第10話 覚醒

私は天野由宇、昴と打ち解けて3日がたち、今日は土曜日というこ
とで私は家でゆつくりと自由な時間を満喫していた。

『明日の天気もいいみたいね』

床に広がっている新聞の天気欄を見ながら神子が言った。

新聞を読む猫、普通にはありえない光景だろう。でもそれがまた可
愛く見えるけど

『明日は満月ね』

神子はそう呟いた。満月を見るのは嫌いじゃない。むしろ綺麗でい
つまでも見ていたくなるのよね

「綺麗な満月みれるかなあ」

その言葉に神子は少し複雑な表情をしていた。何かあったのかな？

それから家の掃除や宿題を済ませるだけで一日が過ぎた。夕飯と
風呂を済ませて部屋に戻ると神子が出てきて私と向かい合う形で座
った。

『ちょっと話があるの。座って』

何だろう、改まって
私は不思議に思いながらもその場に座つた。

『明日が満月なのは朝言っただけ
実は明日は私の成人の儀式があるのよ』

「成人の儀式？」

私は疑問と同時に神子はまだ成人じゃなかったんだ
と少し驚いていた。失礼かな？

『そう、私は大丈夫だけどあなたに何か起こるかもしれないから心配で』

珍しく考えるように俯いた神子を見ると何だか私の方が悪い気がして慌てて私は口を開いた。

「私は大丈夫だよ！そんなに心配しなくても」

『由宇　ありがとう』

はつきりいつてこの時は深く考えてなかったけど次の日、私はとてもない体験をすることに

次の日、私は朝から体調を崩していた。由香に理由を話すと「できるだけサポートするから」と笑顔で言ってくれたのが嬉しかった。その後昴にも来てもらい事情を話すと

『あら！お姉ちゃん今日が成人の儀式なんだね！楽しみだなあ』

と月^{ゆえ}が言った。

「ねえ月？成人の儀式をすると何か変わるの？」

私は1番聞きたかったことを聞いてみた。

『ええ！凄いわよ！たぶんお姉ちゃんは今この姿より3倍は綺麗になるわよ』

と満面の笑みで言った。3倍綺麗というのがよくわからないけど

夕方まではそこまでなかった体の異変も次第に酷くなり始めて私は歩くことさえままならなくなっていた。

「　　凄^ひいふらふらする」

昴や由香に手伝ってもらい何とかなっているが正直かなり辛い。さつきから頭痛もする。

『　　そろそろね』

そう言うと神子が出てきた。神子の体は金色に光っていた。その神秘的な姿から改めて本当に神様なんだなと感じた。その時

「　　痛！？」

急に頭痛が酷くなり私はその場につずくまいった。

「大丈夫か？」

昂がしゃがんで私の肩に手を置いた。

私は返事をしたかったけれどどころじゃなかった。

やがて神子の体が白い光に包まれた。私は眩しさに目を閉じる。しばらくそのままだったがやがて光が消えたのを感じると私は目を開けた。

「
」

私は驚いた。そこにいたのはさつきとはまるで別人のような姿になった神子だった。体は一回り大きくなり目の色はそのままだがまるで宝石のように輝いていた。毛並みは更により尻尾はふわふわになっていた。耳には綺麗な緑色の耳飾りが付いていて大人になったイメージと神様らしい雰囲気をもたせる。

『 終わったわ 』

声は以前よりも透き通るような感じだった。

『 わあ お姉ちゃん綺麗になったね 』

月がそう言つと神子は照れたように笑った。

『 ふふ、ありがとう月。あなたもあと2、3年すれば成人の儀式だからすぐに綺麗になれるわよ 』

私はその光景を微笑みながら見ていたといつの間にか体中の不調が消えていた。

「 あれ？痛みが消えた 」

私はそう言つと立ち上がった。

「ああ、よかった。このまま頭痛が続いたらどうしようかとあれ？」

その情けないような声を出した瞬間、私は前に倒れながら意識を失った。

次の日の朝、目を開けるとそこはいつもの自分の部屋だった。

「あれ？私どうなったの？」

不意にそう呟いて体を起こすと

『神子？起きてる？』

と頭の中で呼びかけた。

『あら、起きたのね』

そう言つて神子は姿を現した。その姿は気を失う前に見た成人の姿になっていた。

「ふふ、綺麗になったね神子」

私はわざと大袈裟に言つた。

『ありがとう。あなたも綺麗になつたわね』

え？今何と言つたの？“あなた”も？

神子は前足で鏡を指した。私はまだ疑問に思いながら鏡の前に立つとそのまま固まつた。

「え？」

鏡の中にいるのは確かに自分だったけど　まず身長が伸びている。おそらく10cm位伸びたようだ。そして顔つきが大人びた雰囲気になっていた。瞳の色は神子と同じように輝きを増しており尻尾はふわふわに、耳には緑色の耳飾りがついていた。

「え？ま、まさか」

私はゆっくりと神子へと振り返る。

『ええ、私のせいね　あなたの姿は私の姿を反映してるから』

「ちなみに昴と由香は？」

この姿を見られたならかなり恥ずかしいんだけど

『あの二人ならあなたをベットに運んだ後すぐに部屋から出たからみられてないわよ？』

「そう、でもそれはそれで後で質問にあいそうね」

神子はそんな私を見て笑うと私の前に何かを置いた。それは緑色の綺麗な玉の装飾のついた髪飾りだった。

『それを髪に付けておいてね』

「へえ、綺麗ね。でも何で？」

『成人になったおかげで“神力”も強くなったから今までどうりに使ったら力が強すぎて逆に危ないのよ。だから制限をつけるの。それが今渡した髪飾りよ』

何だか自分がどんどん人間から掛け離れていくような気がしてきたけど

「わかった。気をつけるわね」

ふと時計をみるとそろそろ学校の時間だった。さて、何も起こらなければいいけど 心配だなあ。

第10話 覚醒（後書き）

ふう、最近暑いので疲れが溜まりやすいです。体調を崩さないように気をつけます。
では次回をお楽しみに！

第10・5話 番外編 もしも○○だったら (前書き)

こんにちは(。(。)(ノ

今回はちょっとふざけてみました！

第10・5話 番外編 もしも〇〇だったら

神子『ふふ、皆さんこんにち。今回は番外編ということで普段と違う様子を楽しんでくださいね』

由宇「久しぶりに神威も出るよ！」

神威「よう、皆俺のこと忘れてないよな？」

昴「そろそろ本題にはいりましょう」

由宇「了解！では、どうぞ！」

（番外編、もしも〇〇だったら）

（もしも神子が普通の猫だったら）

神威はこの猫を連れて帰ることにした。

完

由宇「いやいや！私出番ないじゃん！」

昴「私もだ」

くもしも神威の性別が変わらなかつたら

神威は鏡を見て固まった。頭には三角の耳、そして尻尾まであった。

神威「気持ち悪い」

神子「そうですね」

くもしも由宇が内気な性格だつたら

昴「あれくらい自分でどうにかできた。なぜ助けたんだ」

由宇「ええ！？あのえつと　その　ご、ごめんなさい！」

神子「そこは謝つたらいけない場面でしょ」

くもしも神子がさだつたら

由宇「何で私を女にしたの？」

神子「ふふ、だってその方が面白いじゃないの」

由宇「（駄目だこいつ！早く何とかしないと！）」

くもしも由香が兄嫌いだったたら

由香「やったー！！お兄ちゃん何かうざかったから、お姉ちゃんがほしかったのよね！！」

由宇「ねえ、泣いてもいいかしら？」

神子『ええ、いいわよ』

「もしも昴が心配性な性格だったら」

昴「私に構うな」

由宇は仕方ないので自分の席に戻った。

昴「（どうしよう！言い過ぎたかな。泣かなきゃいいけども
しかしたらもう話しかけてくれないかも）」

月『もはや別人ね』

「もしも由香が冷静で冷酷だったら」

由香「誰ですか？」

由香「あ、天野神威です」

由香「もしも警察ですか？知らない人が家に」

由宇「いやいや！ちょっと待って！！話し聞いてよ！」

由香「うるさい」

由宇「ええ！？」

由宇「はい！いかがでしたか？なかなか普段からは考えられない姿が見れて面白かったでしょ？」

月「ねえ、私の出番少くない？」

神威「我慢しろよ。葵と陸なんて出番すらなかったんだぞ？」

昴「次回はきっと出られるわよ」

月「え？次回あるの！？」

昴「たぶん」

月「」

由宇「では、今回はこれで終了です！」

全員「『ありがとうございました！』」

第10・5話 番外編 もしも〇〇だったら（後書き）

白夜「はは、なかなか面白かったじゃないか」

葵「私達出番がなかったんだけど」

陸「俺は本編でも出番少ないぞ？」

白夜「うゝん、なかなかいいネタが浮かばなくて」

葵「
」

白夜「あれ？葵さん？」

葵「
（黒いオーラ）」

白夜「ひっ！！す、すまん！！次回は必ず出すから！！」

葵「
うふふふ」

白夜「ぎゃあああああああ！！」

陸「
酷いな」

葵「
ふふ、次回もお楽しみに」

第11話 “神威”（前書き）

こんにちは（。°。°）／

最近の疲れが溜まり、夜はベットに倒れてそのまま爆睡してしまうのでなかなか先に進みません。でも頑張りますよ〜

第11話 “神威”

「お姉ちゃん？」

由香が目を丸くして私を見ていた。まあそう言いたいのはわかる。昨日まで自分と同じ位の身長だった姉がいきなり10cmも身長が伸びていたのだから。

「やっと男だったころの身長に近づいたなあ」

と呟いたが結局まだあと10cm足りないので近づいたと言えるのだろうか。

「何だか今までよりも大人になった感じだね」

由香は状況を説明するとあっさり納得してくれたけど葵には何と云えばいいんだろう いや、違うなクラスの皆に何と云えば おそらく質問攻めにあうこと間違いし

「どうしよう」

私はそう呟きながら朝食を食べ、ついに登校時間になった。私は“神力”でサイズを合わせた制服に着替えて嫌々ながら家を出発した。

家を出てから数分たってから早速昴と対面した。実は昴のマンションは意外と近い位置にあるのだ。

「由宇!？」

昴は予想以上の驚き顔だった。
私は事情を説明すると言、

「なるほど」

と呟いた。昴は同じ神との契約者であるから話が伝わりやすくて助かった。

「由宇?遅刻するぞ?」

「へ?」

話に夢中になっていた私は時間を気にしていなかったが昴が腕時計を指差したので、左手の腕時計を見ると後5分までに教室に入らなければならぬ時間にまでなっていた。

「ええ!?!もうこんな時間!?!せめて心の準備だけでも」

「急いで」

「ああっ!もう!」

結局心の準備もできないまま私は教室に行くことになってしまった。

「うっ」

教室の前で私はまだ躊躇っていた。だってそうでしょ？休みがあけた月曜日にクラスメートの身長が10cmも伸びていたら驚くに決まっている。なんて言えば

ガラッ

って、おおい！！昂！？何も言わずにさっさと開けちゃったよ！！

「お、おはよう」

何とかそれだけ言えた。クラスの皆がいつせいにこっちを見ている。私一人なら何とかごまかすこともできたが今は横に昂がいるのだ。あきらかに昂よりも私の方がでかい。つまりこれはもはや言い逃れのできる状態ではない。

「えっと」

「「「キャーーーー！！！！」」」

私が口を開いた瞬間クラスの女子がいつせいに私の周りに集まってきた。

「由宇、どうしたの！？」

「身長伸びたね！」

「カツコイイ!!」

「お姉様って呼んでいい?」

私が口を開いた瞬間クラスの女子に囲まれてしまった。しかもかなり好評なようだ。私はとりあえず安心したがそれからが大変だった。予想通り質問攻めにあってなんとかはぐらかしていると

「皆さん、席についてください。連絡があります」

爽やかで不思議と通る声が教室に響いた。皆が教卓の方を見る。そこにはその視線を受けながら微笑みを浮かべている男子が一人。

「緊急の連絡です。全員教室にいますか?」

彼の名前は巴村光みむらひかるこのクラスの風紀委員である。制服をしつかり着こなし、少し茶髪の混じった色の髪は短すぎず、長すぎずの丁度いいながさだ。顔はなかなかのイケメンで爽やかな微笑みを浮かべている。誰にも敬語ではなす姿から密かに人気のある人物だ。とにかく、彼のおかげで私は助かった。私は心の中で礼を言つと周りを見渡して違和感に気がついた。

「葵がない」

私が光に葵がないことを報告すると、光から微笑みが消え、真剣な表情になった。

「わかりました。今から重大な話があります。皆さんよく聞いてください」

光が真剣な顔をしているためか教室はすぐに静かになった。

「実は、この近所に逃亡中の殺人犯が逃げ込んだらしいのです」

教室からざわざわと声が漏れ始めた。

何だろう、嫌な予感がする。

「空野さんが来ていないとのことですが誰か連絡をしてもらいませんか？」

私はすぐに携帯を取り出して光に知らせると光の許可をもらい、葵に電話をかけた。

ブルルル、ブルルル、ガチャ

『由宇』

葵はちゃんと電話に出たが 何かおかしい 声が震えているみたいだった。

「葵？今どこにいるの？」

『由宇！外よ！』

突然神子が声を出したので私は慌てて外を見た。そこには

『由宇、助けて』

確かに葵は校庭にいた。ただし、その背後には見知らぬ男がいて手には何か光る物が握られている。

『由宇』

その言葉を最後に電話は切れた。

「神子、あの男が持つてる物って」

私が小声で呟くと

『ええ、たぶん間違いないわね。長さからして短剣ぐらいかしら。人間なら間違いなく貫けるわ』

私はその言葉を聞いた瞬間走り出した。

「天野さん！？」

光が慌てて呼び止めたが私は止まらなかった。

私は校庭に出るとさっきの人影がいた場所に急いだ。

「確かこの辺りだったはず」

窓から見たのは確かにここのはずだけど

「由宇！」

葵の声にハッとして辺りを見渡すと1m位の段差の上に葵はいた。

「葵！大丈夫！？怪我はない！？」

葵は頷くと涙目で私を見下ろしている。

「おやおや、随分と珍しい髪と目だなあ」

葵の背後から男の声が聞こえた。葵が肩をビクツとさせる。

葵の背後に立つた男は顔達は普通で一見優しそうな印象を受けるが手に持っている短剣がその印象を一気に塗り替える。この男は逃亡中の殺人犯で間違いない。

「あなたは誰！？何故葵にこんな事をするの！？」

「何故って言われてもなあ。警察から逃げてる時にたまたまこの子が歩いていたら人質にただけさ」

歪んだ笑みを浮かべる男に私は怒りを隠せなかった。何故よりもよって葵なんだろう。

「葵を離さない！」

私は怒りに声を震わせながらも男に叫んだ。

「はあ 馬鹿だなあ、そう言われて離すやつがどこにいるんだい？」

確かにそうだ、そんなことで離すようなやつはいないだろう。私はどうすればいいか必死に考えていた。

「ああそうだ、警察は呼ぶなよ？せつかく振り切ったんだからな。もしも隠れて連絡でもしたらこの子が死ぬだけだ」

「！」

私は“神力”を使ってどうにかできないかを考えた。すると神子が話しかけてきた。

『まって、由宇。あなたはまだ神力の使い方に慣れていないし、昨日力が強くなったばかりなのよ？無理に使って葵さんが怪我をしたら大変な事になるわ』

（じゃあどうすればいいのよ！）と心の中で叫んだがもちろん状況は変わらない。

その時、背後に気配を感じて振り返ると光が校舎の影に隠れて携帯でどこかに連絡をしていた。考えなくてもわかる。おそらく警察だ。

「さてどうする？可愛いお嬢さん？俺をこのまま逃がしてくれるなら俺は何もしないさ。まあ、この子はしばらく借りるけどね」その時光が走って来た。

「今警察に連絡しました。大人しく空野さんを離しなさい」

やはりさっきの電話は警察だったのね。しかし、光はさっきの私達の警察に連絡をするなという会話を聞いていないはず。警察がきたら諦めると思っているのだろうか。でもそうだと葵が危険な目に

「あらら、呼んじやったのか。駄目じゃないか勝手なことをしたら」

男は笑うと葵の背中を急に押した。

「きゃっ—！」

と葵が声を上げた瞬間、葵の脇腹を短剣が貫いた。

「え？」

葵が訳がわからないような顔をした瞬間男は短剣を引き抜いた。真っ赤な血が葵の制服をどんどん赤黒く染めていく。

私と光は目の前の光景に愕然として声も出せずに固まった。

「あ　かはっ　由宇」

葵は私の名前を言うと同時にその場に俯せに倒れた。

「葵ー！ー！」

私は叫びながら葵に駆け寄った。抱き抱えてすぐに男から距離をとる。

「ほら、だから言ったじゃないか。まったく、しょうがないなあ。どうせ捕まるならこの学校の生徒をあと何人が殺してから捕まろうかな」

男は平然と言うと血がついた短剣を光に向けた。

「次は君かな？」

「くっ」

光は悔しそうに顔を歪めている。私はどうしたらいいのかわからずにパニックになっていた。このままじゃ葵がもたない。光も危ない。どうすればいいのかわからない。

『手伝ってやろうか?』

この声は誰? 神子じゃない。

『二人を守りたいなら、力の使い方を教えてやろうか?』

私は頷いた。二人を守りたかったから。この声が誰かなんて関係ない。

『決まりだな』

次の瞬間私は真っ白な空間にいた。

「え?」

私は驚いて周りを見渡した。何もないただの真っ白な空間に一人で私は立っていた。

「ここは? 葵と光は?」

二人の姿はなかった。もちろん、あの男も。

「よう、こうやって顔を合わせるのは始めてだな」

「!」

後ろから声がしたので慌てて振り返るとそこには一人の男子生徒が立っていた。しかもその顔に見覚えがあった。

「はじめましてだな、もう一人の俺」

その男子生徒、もう一人の私、神威は笑顔で私を見つめていた。

「え？ 何で？ 何で私がいるの？」

何故男の自分が目の前にいるのかわからなかった。

「実はな、俺が神子と契約した時に神子も気がついてないみたいだが魂が二つに別れてたんだ。一つは俺として、もう一つは由宇として、一つの体に二つの魂が宿ってることになるな」

私は信じられなかった。自分の魂がいつの間にか二つに別れてたことに、そしてそれに今まで気がつかなかったことに。

「それで、さっきの力の使い方を教えるっていうのは？」

私は葵達のことか心配になってきたのでもう一人の私に尋ねた。

「まあ慌てるな。この空間は現実では一瞬でしかないから安心しろ。それに俺とお前はもはや別人だ。これからは名前で呼び合うようにするぞ？」

「う、うん」

「よし、まずは“神力”についてだが、由宇が表で頑張っている間に俺は裏で密かに“神力”の特訓をしていた。だから俺と記憶を共有すれば“神力”についてある程度わかるようになるし、戦うことだってできるだろう。ここまではいいか？」

「ええ、大丈夫よ」

「よし、ただし問題がある。記憶を共有すると一時的に二人の精神が混ざり合うから体や精神に変化が起こるかもしれない。それでもいいか？」

私の答えは決まっている。

「もちろん。二人を救えるなら」

神威は笑顔で私を見た。

「ああ、お前ならそう言うと思ったよ。さすがは俺だな」

神威はそう言うと言を消し、それと同時にこの真っ白な空間も消え始めた。

第11話 “神威”（後書き）

白夜「はい、お疲れ様でした。新しいキャラが出たのでプロフィール載せます」

みむらひかる
巴村光

18歳

誕生日 6月6日

由宇達のクラスの風紀委員。誰に対しても敬語で離すため皆に慕われている。頭もよく勘も鋭い。

白夜「はい、こんなところです」

光「僕は白夜さんのお友達のリクエストから生まれました。彼にもお礼を言わなければなりませんねありがとうございます」

白夜「では次回をお楽しみに」

第12話 “目覚め” (前書き)

こんにちは(。(。)(ノ

最近なかなか書き出せなくて少しペースが落ちてますが頑張ります。

第12話 “目覚め”

ゆっくりと目を開く。目の前には血を流して倒れている葵がいた。傷にそつと手をかぶせて集中する。自分から少しずつ力を流すと傷口の出血は止まった。しかし傷は治らない。すぐに手当が必要だ。立ち上がり振り返るとそこには一人の男子生徒、巴村光がいて向こうからは短剣を片手に歩いてくる男が見えた。

「まずは君からだな、まあ運がなかったと思って諦めなよ」

男は冷たい笑顔でそう言つと短剣を深く握りしめ、光に向かって駆け出した。

「！」

体が咄嗟に動いて光と男の間に入ると全力で男を蹴り飛ばした。

「なっ!？」

光は驚いた顔をした。女子高生が大人の男を蹴り飛ばしたのだから無理もない。男は5mほど吹き飛ぶと地面をしばらく転がって止まった。

「これ以上“俺”の友達に手を出すな」

由宇はゆっくり目を閉じて再び開く。その目は両目が真っ赤に輝いていた。まるで瞳の中で炎が燃えているようだった。由宇はゆっくりと緑の髪飾りを外した。これは“神力”を無理に使わないようにする、いわば制御装置だ。

「　　いてて、やってくれたね。しかし驚いたよ。まさか女子に蹴られるとはね」

由宇は静かに男を見つめる。

「やっぱり最初は君かな？」

男は由宇を見ると短剣を構えて走り出した。

「　　フウウウ」

由宇はゆっくりと息を吐くと“神力”を右手の先に集中させて鋭く尖ったイメージを作る。

「死ね！」

男が短剣を振り下ろすと同時に由宇は左下から右上へ斜めに　腕を振った。

「　　??」

男は驚いていた。短剣は目の前の女子高生を確かに切り裂くはずだった。しかし手応えがない。ふと視界の端に光る物体が地面に刺さるのが見えた。

「　　な!？」

それは短剣の真ん中から剣先にかけての部分だった。手に持っている短剣はきれいに真ん中から切断されていたのだ。

「な、何なんだ、お前は！」

男は目の前の少女に思わず問いたです。少女は真っ赤な瞳で男を睨みながら一言、

「神」

と言うとありつたけの力をこめた拳を男の顔面に叩きこんだ。男はそのまま6mほど離れた所にあるコンクリートの壁まで飛んでいき、激突するとその場に倒れた。

「」

由宇は自分の手を見つめて小さく、

「ありがとう、神威」

と呟き、急いで葵に駆け寄った。止血はしているが放置しておくわけにもいかない。

「巴村くん、救急車よんで。あと保健室に葵を連れて行くから先に行って先生に連絡しておいて」

「え？あ、はい！わかりました」

光は由宇の声に我に返ったように返事をして走り出した。

由宇は葵を抱き抱えて保健室に向かった。丁度背後からパトカーのサイレンが聞こえてきた。

それから3日がたった。あれから学校は一週間休校になり、私は毎日葵のお見舞いのために病院に来ていた。

「ねえ、お姉ちゃん？葵さんの意識はまだ戻ってないの？」

由香が私を見上げながら言った。

実はまだ葵の意識は戻っていない。だから私は毎日病院に足を運び葵の様子を見ているのだ。

病室に入ると巴村光が椅子に座っていた。

「おはようございます」

光は微笑みながら挨拶をしてきた。

「おはよう、巴村君もお見舞い？」

「ええ、彼女が怪我をしたのは僕が原因ですから」

光は自分のせいで葵が怪我をした事を気にしているようだ。

「そんなに気にしないで。私がもっと早く対処できたらよかったんだから」

あの時、私が神威の力を借りなくても対処できたらそれが一番よかったのだろう。

「天野さん、あの時は一体何をしたんですか？いつもと口調や目の色も違っていたし、何より短剣を素手で切断するなど人間技ではありません」

聞かれると思っていた。そして私は光には私の事を話そうと決めていたのだ。ただし

「もう少し待って、もう一人話したい相手がいるの」

私が丁度そう言った瞬間ドアが開き、陸と昴が入ってきた。陸は寝ている葵に一瞬目をやると私を見た。

「話って何なんだ？」

私は由香と昴に視線を送ると二人は無言で頷いた。

「何から話せばいいかな　まずは私の正体かな」

陸も光も私をじっと見ている。私は決意したように一度大きく息を吸うと、

「私は　一般的に“神様”と呼ばれている存在と契約しているの」

「」

「神、ですか」

二人ともまだ信じられないという顔だった。無理もないだろう。

「まあ信じられないのも無理はないけどね。　神子、お願い」

『わかったわ』

返事と同時に神子が私の中から姿を現した。白いなめらかな毛並みに二本のふわふわとした尻尾、由宇と同じ色の瞳、そして耳についた緑の耳飾り、その姿はいつ見ても綺麗だと思う。

『はじめまして、陸君に光君。私は神子、由宇のパートナーよ、よろしくね』

そう言うത്笑顔で二人を見つめる。

「 なっ!?! 」

「猫が喋った!?! 」

二人ともこれには驚いただろう。

「ちなみに葵はこの事を知っているわ。あとは妹の由香と昴もね」

二人は由香と昴の方を見る。由香と昴は頷いて肯定する。

「ああ、そうだ。昴も私と同じ神様との契約者なのよ? 」

さらに二人は驚いて昴を見た。私が視線を送ると昴は小さく

「 月 」

と呟いた。すると、

『はいはい 呼んだかな? 』

という声と同時に月が姿を現した。

『二人ともはじめまして 私は神子お姉ちゃんの妹で月ですよしくね!』

月はその場でくるりと宙返りをした。黒いサラサラとした毛並みに柔らかそうな尻尾がフリフリとゆれている。

「 あ、ああ、よろしく」

「 よ、よろしくお願いします」

二人は目の前ね出来事に驚きを隠せないようだった。

「さて、じゃあ葵を起こそうかな」

私は葵の隣に立って葵の顔を覗き込んだ。

「 葵を起こす?」

「 どうするのですか?」

二人は不思議そうな顔をしていた。私は二人に視線を戻すと再び話し始めた。

「私は神子と契約してから“神力”という力が使えるの。巴村君は見たことあるでしょ?」

光は納得したように頷いた。

「陸は知らないかもしれないから“百聞は一見にしかず”ってこと

で、今から見せてあげるね」

そう言うつと緑の髪飾りを外し目を閉じるて集中する。

『神威？力を借りるよ』

心の中で神威に呼び掛ける。

『わかつてる。いくぞ』

ゆつくりと目を開くと両目が深紅に輝いた。光以外は初めて見るためか驚いた表情だ。

「今から葵を起こすために少し葵の精神に潜ってくるから昂は俺に何かあったら頼むね」

昂は少し驚きながらも頷いた。それを確認すると俺は葵の額に手を乗せて目を閉じる。そして俺の視界は真っ白になった。

辺りを見渡しても真っ白な空間があるだけで他には何も無い。神威と向き合った時を思い出したら何となく笑みがこぼれた。

「さて、葵を起こさなきゃな」

俺は目をこらして周りを見渡すと遠くに葵が浮かんでいるのが見えた。

「発見！」

近くに行くとすやすやと寝息を立てて葵は寝ていた。

「おい葵？起きろ」

そう言つて顔をぺちぺちと叩くが葵は起きない。

「ふふ」

俺は悪戯っぽく笑つと葵の額にデコピンをした。バシツという音が響いた瞬間、

「いたっ！！」

と言つて葵が飛び起きた。葵は驚いた顔で辺りをキョロキョロと見渡している。何だかその光景が面白くて俺は思わず笑ってしまった。

「あれ？由宇じゃない。それにここどこ？」

葵は俺の存在に気がつくと特に慌てた様子もなく話しかけてきた。

「ここはあなたの心の中だよ。俺はただなかなか葵が起きないから起こしに来ただけ」

葵は首を傾げた。

「起こしに来た？ ああ、力を使ったのね？でも何だか雰囲気が違うけど？」

俺は今までのことを話した。勿論神威のことは隠して。

「なるほどね。そんなことになってたんだ」

葵は俯いて申し訳なさそうに呟いた。

「気にしないで、それより皆が待つてるからそろそろ行きましょ？」

葵が頷くとそれに反応するかのように真っ白な空間は消え始めた。

「終わったよ」

私は髪飾りを着けながら言った。

「んっ うーん」

葵はゆっくりと目を開けて周りを見渡した。そして一言、

「ただいま」

と呟いた。私は笑顔で返事をした。

「おかえり」

第12話 “目覚め”（後書き）

白夜「お疲れ様でした」

由宇「ああ、疲れた」

光「そうですね」

白夜「最近疲れが溜まってなかなか進まなくて困ったもんだよ」

由宇「それは仕方ないでしょ」

光「それくらい自分で何とかしてください」

白夜「酷い！何で誰も慰めてくれないの？」

光「甘えないでください」

白夜「ひ、酷い」

光「では、皆さん次回をお楽しみに」

白夜「ああ！俺の台詞取るなよ！」

第13話 由宇&昴の暴走（前書き）

こんにちは（。°。°）ノ

この前初めて感想をいただきました！本当にありがとうございます！
す！嬉しかったです！

これからもご意見、ご感想お待ちしております！作者である私への質問でもいいですよ！

今回の話ははちよつとふざけてみました。では本編へどうぞ

第13話 由宇&昴の暴走

色々と忙しかったあの事件（私個人的には思い出したくないが）から一週間がたち、学校も再開されていつものどりの授業が開始される。そんな中で私はため息をつきながら窓の外を眺めていた。

「 由宇」

私はビクリと肩を震わせて声の主を見た。声の主 つまり昴なのだが最近私が窓の外ばかりを見ているので心配しているようだ。

「 大丈夫だよ、私は平気だから」

私は昴に笑いかけるとわざと髪をかきあげる。

もうすぐ夏休みだからということでは由宇達のクラスはいつもより騒がしく、さらに夏休み中にクラス全員で海に行こうとまで言い出す者までいた。

「 はあ、何処からそんな元気が出てくるのかしら 」

由宇はぼつりと呟いた。基本的に由宇は“神威”であった時から夏が苦手なのだ。もともと暑がりであり、さらに昔海で溺れてからというもののまるで夏は自分の天敵だといわんばかりの勢いである。

「 由宇、次体育だよ？ 」

必要最低限な音量と台詞で昴が私にそつと告げる。

そつ、昼休みを終えた次の5時間目は体育、季節からも想像できるだろうが内容は水泳である。

「そっか、じゃあ私達はいつもどおり見学だね」

私達は水泳の時間はいつも見学なのだ。理由は簡単。なぜなら自分でも忘れかけていたが私達は少し猫としての習性がある。早い話水が怖いのだ。

「
」

昴が若干申し訳なさそうに私を見ている。それもそうだろう、私は一回目のプールの授業に昴に殺されかけているのだから

『二週間前』

そう、あの葵が刺される前の週のことだった。今日から水泳の授業が始まるということで皆もワクワクしているようなテンションだが私と昴はどうしても気分がのらなかった。その理由は二人とも夏という季節が嫌いだからなのだが授業ならば仕方ない。プールサイドに集合しいよいよ今から入ろうといった雰囲気となったその時

「
!？」

私はプールの水面に足を片方入れようと　した瞬間に固まっていた。

なぜだろう、水泳そのものは嫌いじゃない、なのに体がこれ以上先に進むのを拒んでいた。

「あれ？　何で？」

その時体がカタカタと震えていることに気がついた。水に入るのを体が全力で拒否する。

「由宇？」

遅れて来た昴が心配そうに声をかけてきた。

「ニヤア！？」

思わず変な声を上げてしまった。

「？　早くしないと」

昴はあろうことか私を軽くトンと押す。

「へ？」

私はプールの水面に向かってダイブしていた。周りの景色がスロ―になる。

「ニヤアアアア！！！！？？」

私はプールに落ちると体験したことのない恐怖に襲われた。そして足がつくはずなのに溺れたような錯覚に襲われ混乱した私は頭の中が真っ白になっていた。

「え？」

昴がキョトンとした顔になったと思ったらずぐにハツとなり急いで助けようとプールに入ろうとするが昴もまた体が固まったように動かなかった。

「？」

私はこの時昴の顔が真っ青になっているのを見た気がしたがそれどころではなかった。私に気がついた先生によって何とかプールを脱出した私は全力でプールから離れていた。

それから私は保健室に運ばれてしばらく震えながらぶつぶつと何かを繰り返して呟いていたらしいがよく覚えていない。

現在

あれからというもののプールの時間が嫌いになり、先生には水恐怖症だという嘘（あながち嘘ではないが）をいつておいたのでプールの授業は全て見学となったのだ。さらに、あの時の可愛い叫びはクラスの全員が聞いていたためしばらく女子からはからかわれ続けた。

（我ながら不覚だったわ　でも、怖いものは怖いよねえ）

私は学校が終わったなら葵に愚痴を聞いてもらおうと心の中で決めた。

（早く放課後にならないかなあ　）

放課後、昴と病院　に來た私は葵のいる病室に入ろうとすると中から由香の声がした。

「　　由香？」

昴が少し嬉しそうな顔をした。由香は昴にだいぶ懷いていて「お姉ちゃんが増えたみたい」と言っていた。昴も由香に本当の妹みたいに接しているので由香からすれば微笑ましいことであった。

私はドアを開けて中に入ると二人が何か企んだような顔で私と昴を見ていた。

「いらつしゃい由宇！由香ちゃんから色々話を聞いてたのよ　」

「　何の話？由香、変なこと葵に吹き込んだんじゃないわよね？」

私が由香の方を見ると由香は笑顔で何かを取り出した。

「私はただお姉ちゃんが大好きな物を葵さんに教えたただだよ」

私は紙袋から出てきた物を見た。 見てしまった。 そうそれ

は “ねこじやし” だった。」

私はそれを見た瞬間手に持っていた鞆を床に落とした。

「 ああ だ、駄目 それだけは 」

由宇はとろんとした目で、しかも頬を少し赤くしながら少しずつだが前に歩き出している。

それを見ている葵は思わず一言、

「 可愛い〜 」

と呟いた。 由宇はふりふり揺れるねこじやらしをじっと眺めていたが。突然、

「 も もうだめ 」

と呟いた瞬間、耳と尻尾がピヨンと現れて勢いよく由香に向かって飛び掛かった。 由香はそれをさっと避けるとまるで闘牛のマントのようにねこじやらしを揺らした。

「ニャア！ニャア！」

由宇はもはや完全な猫といってもいいぐらいねこじやらしに夢中になっていた。

「はあ」

葵が由香と由宇が部屋の隅で戦っている（というか由宇が遊ばれているだけなのだ）のを眺めていると、昴は呆れた様な顔をしてため息をついて月に話かけていた。

「由宇はもう少し自分を抑える訓練が必要」

『あはは でも見ていて飽きないじゃない お姉ちゃんは苦笑いだけど』

結局そのまましばらく遊ばれた由宇は帰り道で顔を真っ赤にして俯いたままだった。

それから一週間後、由宇が力を使ってサポートしたこともあって無事に葵は退院した。そして葵の家でお祝いパーティーを開くことになった。

「みんな、わざわざパーティーを開いてくれてありがとう！凄く嬉しいよ！」

葵は部屋を見渡す。今部屋には葵、陸、由宇、昴、光、由香の六人が集まっている。

「無事に退院できてよかったね」

由宇が笑顔で葵を見ると葵は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「そ、そうだ！私、お見舞いに来てくれたみんなにお礼を渡したいの」

葵は紙袋を一人ずつ配った。由宇と昴の袋だけ中に二つの物が入っているようだった。

「そんなに気をつけてもらわなくてもよかったのに」

由宇は何だか申し訳なさそうな顔をしていた。昴も頷いている。

「いいのよ。それよりも由宇と昴は今開けてみて」

由宇と昴が袋を開けると中には一冊のアルバムと小さい箱が入っていた。

「あ、アルバムから見てね」

由宇がページを開くとそこには由宇として葵に会ってからの写真がおさめられていた。自然と笑顔になるような写真ばかりだ。

「葵、ありがとう」

由宇は笑顔で葵にお礼を言うと葵も笑顔だった。

「葵、この小さい箱は？」

由宇が小さい箱を手にとると葵がニヤリと笑った。

「ふふ、いいものだよ。私が出してあげるから由宇と昴は目を閉じて?」

由宇と昴はお互いを一度見合つと目を閉じた。葵が箱から木の枝のような物を出すと二人の鼻のそばに近づけた。そう、それは“またたび” 由宇はすぐに顔が赤くなりぽけっとした顔になった。目を開けた由宇は若干涙目で瞳が潤んでいる。

「あれ?何だろ、何だかフワフワする」

由宇は完全に酔っ払っているようで足元もふらふらしている。

「やっぱり、可愛いわね」

葵は満足そうな笑顔作って由香を見ると由香は親指を立ててよくやった、と目で語っていた。

由宇はふらふらした足どりで昴に近づくと

「昴、何だかいい気分だよ。昴?」

昴の様子がおかしいのに気がついた。俯いたまま動かない。由宇は屈んで下から昴を見上げる。

「昴?どうしたの?」

今度は由宇が固まった。他の皆もどうしたのかと心配になっていると昴が顔を上げた。

その時の昴は今まで見たこともないくらいの笑顔だった。

皆が驚きで固まっている。普段全く笑わない昴が極上のスマイルを浮かべている。

昴は再び視線を下に下ろすと由宇を見つめる。そして突然信じられないことを言った。

「由宇 上目遣いとはな 私を誘っているのか？」

昴はしゃがむと由宇と同じ視線になった。由宇は笑顔の昴に見とれてしまったのかぼかんとしている。

「ふふ 可愛いじゃないか」

突然昴は由宇の肩を掴んだ。

「へ？」

由宇が酔って赤い顔のまま昴を見つめていると

「昴？どうした んっ!？」

昴は由宇の唇に自分の唇を重ねた。

「~~~~!!??」

周りの皆は呆気にとられたように固まった。昴は由宇を立たせると

「葵 隣の部屋を借りるぞ？」

と言った。葵は慌てて止めに入る。

「ま 待つて！それは駄目だよ！ それよりも昴どうしたの！？まさか酔っ払ってるんじゃない」

「誰にも邪魔はさせない」

そう言った昴は由宇をお姫様抱っこした。長い黒髪の少女が自分より高い身長の少女をお姫様抱っこしている様子は何とも奇妙だった。

「さあ、行くわよ？由宇」

「待つて！それ以上は駄目だってば！由宇も何とか言つてよ！」

葵は急いで由宇に昴を説得するように進めようとする。しかし、由宇は

「ほえっ」

完全に昴を見てとろんとした目をしている。さらにはとんでもない爆弾発言をした。

「昴 好きに して いいよ？優しくしてね？」

と言った。それを聞いた葵は顔を真っ赤にして啞然とした表情で固まってしまった。

結局陸と光が何とか二人を止めてことなきをえたのだった。

次の日、二人から昨夜のことは覚えていないと聞いた葵はもうこの二人には絶対に酒やまたたびを禁止することを心に誓ったのだった。

第13話 由宇&昴の暴走（後書き）

白夜「ヤッホー、皆元気かい？白夜だよ！」

由宇「うるさい！二日酔いで頭痛いから静かにして！」

昴「」

白夜「ご、ごめんなさい」

光「あなたも災難ですね」

白夜「そうなんだよ光」助けてくれ」

光「お断りします」

白夜「即答！？あんたは鬼ですか！？」

光「うるさいですよ。静かにしてください」

白夜「何で俺ってこんなに扱いが酷いの？作者なのに」

光「作者だからこそです」

白夜「うわあああああああん」

光「では、次回をお楽しみに」

第14話 分裂（前書き）

こんにちは（。。（）／

すいません書いたのが夜中と朝早くだったので少しぐだぐだです
（汗）

第14話 分裂

清々しいほどの土曜日の朝、由宇はいつもの起床時間を過ぎても起きていなかった。

『由宇？朝よ？』

神子が由宇を起こしにかかるが由宇は呻き声をあげるだけだった。

「うっ　頭痛い」

由宇の顔は赤く、明かに風邪を引いているのがわかった。

『昨日暑いからって下着姿で寝るからよ』

珍しく神子が呆れた様に話しかけていた。

「うっ　ごめんなさい」

由宇は何も言えずにただ落ち込むばかりだった。

『由宇、大丈夫か？』

今度は神威が話しかけてきた。もう一人の自分として心配してくれているのだらう、と由宇は感じてできるだけ明るく言葉を返した。

「大丈夫、すぐによくなるよ。心配してくれてありがとう」

神威はそうか、と言ってそれ以上何も言わなかった。

今日是由香が家にいないので結果的に由宇以外は家に誰もいない
と言っている。

神子はほとんど表に姿を現さないのが普段から一緒にいるという
実感が無い。

神威にいたっては自分自身である。最近自分と会話をするという
奇妙な経験をしているが姿を見せられないことからやはり実感がな
い。

「はあ」

私は風邪をひいてベットのなかで酷い頭痛と倦怠感に苛まれてい
る。

「そうだ、昴なら」

そう思って携帯を取り出して昴にメールを送ろうとする。

『ちょっと風邪引いて調子が悪いから』

と、ここまで打ってるから手が止まった。

（風邪引いてさびしいから来てなんて 恥ずかしくて言えな
い！）

携帯をベットの脇に置くと深くため息を吐いた。

寂しい

何でだろう、一人でいるのは不安で仕方ない。

何故？

自分の手が震えているのに気付いた。

怖い

『由宇？どうかしたの？』

神子が不安そうに聞いてきた。

「大丈夫、何でもないよ」

由宇はそう言つとベットから起き上がりふらふらとドアに手をかける。

『由宇？どこにいくの？』

神子が心配そうに尋ねてきた。

「大丈夫、ちょっと水が欲しいだけ」

大丈夫と言いつつも由宇の足元はおぼつかない。さらに顔は先程よりも赤くなっている。

「はあ はあ」

辛そうな顔を浮かべている由宇は階段を降りようとしてふらついた。

「あつ！」

ふらついた由宇はそのまま階段へと倒れこんでいた。

『由宇！！』

しまった！　と思つたが遅かつた。由宇の体はそのまま階段を転がり落ち　なかつた。

「あれ？」

足は床を離れているのにいつまでも落ちる感じがしない。まるで空中にいるような感覚だつたがそれが誰かに正面から抱き抱えられていることに気がついた。

ゆっくりと目を開けて見ると、目の前にはよく知つた顔があつた。以前は毎日かがみで見ていた顔、そう、自分自身である“神威”が目の前にいた。

「え？」

由宇はその光景に目を丸くして口をぱくぱくさせている。

「まったく、何やってんだ、由宇」

神威が由宇をお姫様抱っこしたまま階段を下りて床に座らせる。

「怪我とかないか？」

突然のことに私は目を丸くしたまま固まっていた。

「由宇？」

神威が少ししゃがんで私の顔をまっすぐ見る。

「え？あつ、大丈夫だよ」

私は慌ててそう言ったが正直何が起きているかさっぱりわからない。

「あの、本当に神威なの？」

私はそう尋ねた。同じ人間がこの世に二人いるということが信じられない。そんな顔だった。

「ああ、俺は正真正銘天野神威だ。」

由宇は目の前が真っ暗になる感覚とともに意識を失った。

由宇が気を失ってしまったので二階の部屋に戻ってベッドに寝かせた。

「やっぱりいきなりすぎたかな」

俺はそう呟くと由宇の頬を撫でた。
改めて由宇を見ても本当に自分が女性になった姿であ

るとは思えなかった。

「せっかくちゃんと向かい合う事ができたんだ。色々と話がしたいな」

独り言を呟きながら時計に目をやるともうすぐ昼になるところだ。

「昼飯は俺が作るかな」

微笑みながら俺は立ち上がると神子に由宇を頼むと言って家をでた。

- - -
- - -
- - -

私は今商店街に来ている。 昼ご飯の材料を買いにきたのだ。

「今日は天気もいいし、洗濯物もすぐに乾くかしら」

葵はそう呟きながら一人商店街をあるく。 天気もよく散歩するのにも絶好の気温だ。

「~~~~~」

葵は鼻歌を歌いながら商店街を歩き回り、そろそろ帰ろうかと思っていたその時、前方から一人の少年が歩いてきた。

「え？」

その少年は葵の親友であり、綺麗な黒髪と宝石のような左右で色の違う瞳をしている少年。

「神威!？」

神威は葵の声に気付いてこちらを見た。間違いない。少し髪が伸びて艶が増していたが宝石のような瞳を葵に向けて微笑んでいる。

「葵、久しぶりだな」

葵は駆け出すと思いつき神威に抱き着いた。神威は一瞬驚いたがすぐに笑顔になると葵の頭を撫でた。

葵はそれからしばらく神威に顔を埋めたまま泣き続けた。

第14話 分裂（後書き）

白夜「ね、眠い」

由宇「あんたっていつも眠そうよね」

白夜「む？そんなに普段の私は眠そうなのか？」

神威「ああ、そうだな。ちゃんと寝ているのか？」

白夜「大丈夫だよ。ちゃんと5、6時間は寝れるように気をつけているから」

由宇「そう？ならいいんだけど」

白夜「そういえば再び感想を送って下さった晴彦さんありがとうございます。」

「これからも精進したいと思いますのでよろしく願います」

第15話 涙（前書き）

こんにちは。。。（ノ白夜です。今回はシリアスな場面です。
書いてて自分が泣きそうになりました。
（…ぐすん）

第15話 涙

「…………ん」

由宇は瞳をゆっくり開く。見慣れた天井が目映る。首を横に向けてると神子がすぐ横で眠っていた。

「…………」

由宇はゆっくりと体を起こす。だいぶ調子が良くなってきた。神子を起こさないようにベットから出て階段を下り、洗面台で顔を洗う。

（…まさか自分が二人になるなんてね）

そう考えた時、由宇の頭の中にある考えが浮かんだ。

（もし、神子が試験を終えて帰った時、私はどうなるんだろう）
元々由宇という人間は存在しない人物であり、神威が神子の力で女性になった姿だ。

しかし、神威は言った。

『俺とお前はもはや別人だ』

私は存在しない者、そして神子によって生まれた。ならば神子がいなくなれば…

「…………私は消えるかもしれない」

呟いた由宇の言葉は震えていた。神威と別れた今、由宇という存在はよりどころを失っていた。

「嫌だ……私は……消えたく……ない」

自然と涙が流れた。止めようとしたが止まらなかった。

「私は……どうなるの……」

由宇は一人その場に座り込んで震えた。
その様子を入口から神子が悲しそうな顔で静かに見守っていた。

商店街から離れた所にある公園で神威と葵はベンチに座っていた。

「……さつきはごめんなさい」

葵は顔を赤くしながら神威に謝ってきた。

「いや……気にするなよ。元々連絡もしないでいなくなった俺がいけないんだからさ」

神威は葵に笑顔を向ける。葵はそれを見てさらに顔を赤くして俯

いた。

「おっと、そうだった。俺昼飯作らなきゃいけないんだ。だからまたな」

神威が立ち上がると葵は神威の服を掴んだ。

「また…明日会えるよね？」

葵の顔は赤く、目も潤んでいた。神威は葵の頭に手を置くと微笑んだ。

「ああ…また明日会おうな。そうだ、家に来るか？由宇も喜ぶだろうからな」

「本当！？」

葵の顔が笑顔になる。そして明日家に葵を呼ぶ約束をした神威は家に帰るために歩きだした。

（私は…どうしたらいいんだろう）

部屋に戻った由宇はベットに座りそればかり考えていた。

『由宇?』

ビクツと由宇の肩がはねる。ゆっくりと横に首を向けると神子が座っていた。

『由宇…ごめんなさい、私のせいで辛い思いをさせたわね』

神子は俯きながら由宇の隣に歩み寄る。

「じゃあ…やっぱり…私は」

神子はゆっくり頷いた。

『…ごめんなさい』

由宇は涙を堪えながら再び口を開いた。

「神子…あとどのくらい…時間はあるの?」

神子は俯いたまま静かに口を開いた。

『もう…あまり時間はないわ…おそらく長くても…半年くらいかしら』

「そんな…何年間か一緒にいなきゃいけないんじゃないの?」

神子は首を横に振ってベットから飛び降りる。

『私は…もう成人だから…試験の日数が大きく減らされたの』

由宇は声が出せずに俯きながら必死に涙を堪えた。堪えなければこれから皆の前に出られないような気がした。

『…由宇』

急に誰かに抱きしめられた。驚いて顔を上げると、自分に似ているがもつと大人の雰囲気をする女性がいた。真っ白なワンピースを着て、髪は長い白髪、瞳は自分と同じ紅と蒼。驚くのは一瞬だった。すぐに由宇には誰だかわかった。

「…神子」

『ごめんなさい、いつもの姿じゃこうしてあげられないから…』

「…ありがとう」

『…由宇、泣いていいのよ？我慢しないでいいから』

「…うつ…うつ…うあああああああああああ！！」

その言葉を聞いた瞬間、由宇は神子に抱き着いて泣き出した。神子は由宇が泣き疲れて眠るまでずっと抱きしめ続けた。

神威が家についたのは12時を少し過ぎたころだった。
玄関を開けて中に入ると買ってきた食材をリビングに一旦置いてから二階に上がり由宇の部屋のドアをノックする。

『どうぞ』

中から聞こえたのは神子の声だった。

中に入ると由宇は静かな寝息を立てて寝ていた。ベッドの横には猫の姿をした神子がいた。

『由宇は…気づいたわ…いつか自分が消えることに…』

神威は由宇を見る。熱はないが顔が少し赤い。おそらく泣いたのだろう。

「…そうか、いつかはわかることだったんだ。仕方ないさ」

神威は自分が由宇から分離した時からこうなることがわかってい

た。
由宇は神子が神威の体を変化させたと思っていた。しかし、実際は神威の体を元にして新しい体を作り、神威の記憶と魂を半分に分け与えたのだ。

魂を半分にしたせいで元に戻るまで神威は眠った状態であり完全に回復した神威はこうして分離して元の生活に戻れたのだ。

「…そう、言うなれば俺と由宇は限りなく近い別人みたいなものだ」

そして由宇は神子に貰った神力を使って存在している。神子との契約がおわれば力も消える。つまり由宇自身が存在できなくなるこ

とを意味している。

「…由宇」

神威と神子はただ眠っている由宇を見守るしかできないことに悔しさを覚えた。

外はいつの間にか曇り空になり雨が降り出していた。

第15話 涙（後書き）

今回はちょっと先のことを見越して書いたのですぐに終わるわけではありません。私自身が、

「……いやいや、まだ早いだろ」

とつつこんだくらいです。まだまだ頑張りますので応援よろしく
お願いします。

第16話 決意（前書き）

こんにちは（。。。） /
白夜です！

更新遅れてすみません！大学のテストが近いため、なかなか思うように執筆できないのです。

テストが終わったらまたいつものペースに戻したいです！

第16話 決意

- 真っ暗だ -

- 何もない暗闇 -

- いつか私も、この闇に飲まれて消えてしまふのかな… -

闇に一筋の光が射す。

- あれは……？ -

その光の中には葵が立っていた。そしていつもの笑顔を私に向けている。

『由宇』

葵が私を呼んでいる。
すると葵の横に別の光が現れた。その中から声がする。

『…由宇』

黒髪をなびかせた鋭い目をした少女：昂がいた。恥ずかしそうに私を見ている。

また別の光。中には陸がいた。

『由宇！』

力強い陸の声。

『由宇さん』

陸の横から光がいつもの真面目な顔で現れる。
そしてまた新しい光が二つ現れた。

『由宇』

『由宇さん』

神子と月だ。神子は微笑んで、月は笑っている。
そして、最後に他の光より一回り大きな光が現れる。

- あ -

光から少年が歩いて来る。少年は由宇の前まで来ると立ち止まった。少し長めの黒髪が揺れる。

『由宇』

少年、神威は手を差し出してくる。私は迷った。いつかはこの手を離さなければなくなる。その時、私は堪えられるのか？

『由宇、大丈夫だ。俺達はいつでもそばにいる』

神威が笑う。気づけば周りには皆が集まっていた。

『私は由宇ともっと一緒に思い出を作りたい!』

葵が手を出してくる。頬を雫が流れる。

・そうだ、いつか消えてしまうなら少しでも思い出を作ろう。いつまでも覚えてもらえるように・

二人の手をとる。暗闇が晴れて行く。私の意識はまるで導かれるようにその場から現実に戻された。

神威はリビングで朝食の準備を終えて、今から由宇を起こしに行くところだった。

(由宇なら大丈夫だよな…きっと)

階段を上がり由宇の部屋の前に立つ。神威は深呼吸をするとドアをノックした。

『どつぞ』

中から声がしたのでドアをゆっくりと開く。

「由宇、だいじょ……………！」

神威は思わず声をかけるのを止めてしまった。由宇は起きてるいた。窓辺に立ち、神威を見つめている。朝日を受けて白い髪が金色に光って見える。そして、その宝石の様な瞳には強い決意をした様子が見える。

「…おはよう」

由宇は微笑みを浮かべながら神威に挨拶をした。

「…ああ、おはよう」

神威も由宇に微笑みながら挨拶をした。

「大丈夫か？」

神威は由宇に確認もこめて尋ねる。

「うん、もう悲しまないよ。人間いつかはなくなるんだしね。私はそれが少し早いだけ。それなら…私は普通の人よりも沢山の思い出を作るだけだよ」

由宇は力強く頷いてそう言った。

「そうか、それなら俺は何も心配しなくていいな」

神威はもう一度笑うと、由宇に朝食ができてると伝えて部屋を出た。

「うん、もう泣かない!」

由宇は神威がいなくなってからそう呟いた。

それからしばらくしてから葵と陸と昴が来た。

「神威!」

「神威さん!」

陸と光が神威を見て驚く。

「ふむ」

昴は神威を見て難しい顔をしている。

「陸、光、久しぶりだな。昴は実際に顔を合わせるのは初めてだな」

神威については神子と月を通じて事情を伝えてある。

「……」

昴は由宇のそばに寄ると腕に抱き着いた。

「ええっ！？す、昴！？」

由宇は顔を赤くしながら慌て始めた。それでも昴は離そうとしない。

「ああ！昴だけずるい！」

そう言つと葵が反対の手に抱き着いてきた。

「ええっ！？葵も！？」

更に顔を赤くした由宇はまるで妹に遊ぼつとせがまれるお姉さんみたいだった。

「まあ、俺に慣れるまでは仕方ないか」

神威は肩を竦めて陸と光を見る。

「しかし神威、何だか前より大人っぽくなつたな」

「…は？」

陸の言葉に首を傾げる。

「そうですね。確かに以前よりも見た目ですが精神的にも大人に

なられたように見えます」

光までもがそう言うので神威は更に首を傾げた。

「具体的にどんなところが？」

そう尋ねる神威に陸は笑いながら答えた。

「由宇や昴を見る目がまるで気がきく兄貴みたいに見えた」

神威は顔をしかめた。

「俺はあいつらと同じ年なんだがな」

ため息を吐きながら神威は由宇を見る。由宇はまだ昴と葵によってあたふたしている。その光景に自然と頬が緩む。

「やっぱり兄貴よりも父親みたいだな」

と呟いた陸の頭をとりあえず叩いておいた。

夕方になりこの集まりもそろそろお開きになりそうな雰囲気にな

った頃、

「ねえ、最後に乾杯しない？」

と葵が言ってきた。そしてその手には沢山の飲み物が入った袋が握られている。

「おい！葵！この前何があったか忘れたのか？」

陸が葵に小声で囁いた。この前の事とは勿論由宇と昴が酔っ払って暴走した時のことだ。

「大丈夫だよ お酒は神子さんの分しか入ってないから」

皆それぞれ袋の中からジュースを取っていく。神子だけお酒である印しがついている。

『一応私は成人だからね』

と言うと人間の姿になる。皆驚いたが神子が神様であることを思い出し、納得していた。

『お姉ちゃん、素敵です！』

月だけは神子の横ではしゃいでいるが……

「それじゃあ！乾杯〜！！」

皆が一斉に蓋を開けてジュースを飲んだ。

『…………あら？』

袋を覗いて神子が首を傾げた。

「どうかしたんですか？神子さん？」

神子の様子に気がついた光が尋ねる。

『おかしいわね。私は二つお酒を頼んだのだけれど……』

ビニール袋にはジュースだけで酒はもうなかった。

「あれ？おかしいなあ、ちゃんと確認しました…よ……」

皆が一斉に顔を合わせた。……そう、一人を除いて。

「…………ま、まさか」

葵が恐る恐るその人物へと視線を送ると…

「…………はれ？…みんな、どうしたの？」

と、赤くなつた顔で喋る少女は呂律がまわっていない。
もうお気づきだろうが飲んだのは由宇である。

「…………あちゃ」

陸が頭に手を当ててうなだれた。

「陸…？大丈夫？」

そう言つと由宇は陸を下から覗き込む。そうなれば自然に上目遣いになるため陸は顔を赤くしながら慌てて後ろに下がった。

「だ、大丈夫だ！」

と言つたものの顔は赤くなっている。そんな陸から視線を外すと、由宇は突然髪を結んでいた緑の珠のついたゴムを外した。

「…何だか邪魔」

すると耳と尻尾が現れた。どうやら神力を全て解いたらしい。由宇はふらふらしながら潤んだ目を葵に向ける。

（な、ななな、何？あの可愛い動きは！？いえ、駄目よ私！早く何とかしないと！）

葵はそう考えながらもばつちり由宇から目を離さないためあまり説得力がない。

（……あんな由宇は初めて見る）

昴は驚きと困惑の入り混じった表情をしている。実際は昴がこの状態の由宇を見るのは二度目なのだが本人は覚えていない。

そして由宇は神威を見つけるとふらふらと近づいてきた。

「……………」

神威はどうしたものかという表情である。

「……あゝ、その、由宇？大丈夫……」

「……えい！」

神威が由宇に話し掛けた途端に由宇は神威を押し倒した。

「……なっ！？」

「……ええっ！？」

「……！！！」

「……は！？」

『あらあら』

『……おおっ！！』

上から順に光、葵、昴、陸、神子、月の順である。皆が由宇の突然の行動に驚きの声を上げた。

しかし、一番驚いているのは神威である。

「……お、おい、ゆ、由宇？」

神威が恐る恐る由宇を見ると顔を赤くして潤んだ目で神威を見ている。

「………！？」

神威はその由宇の姿に一瞬ドキリとしたがすぐに正氣に戻ると、由宇の体を離そうとするが、

「なっ！？体が動かない！？」

神威は視線だけで他のメンバーを見るがどうやら葵達も同じようで困った顔をしている。どうやら由宇が神力で動きを封じたようだ。

「…神威」

由宇が神威の名前を呼んだ。ゆっくりと目を閉じると、少しずつ顔を近付けてくる。

(…え？おい、まさか！？)

「私、神威のことが……」

少しずつ近くなる唇、あと10cm、9、8、7、6、5、4、
3………

「……ゆ、由宇」

神威と由宇の唇が触れる……………と思った瞬間、由宇は神威の左側にバタリと倒れた。

「……………は？」

神威は間抜けな声を出してしまった。慌てて隣の由宇を見ると、

「……………すう…すう」

静かな寝息が聞こえる。どうやら寝てしまったようである。

「……………はぁ」

神威は盛大にため息を吐いた。葵達はぼかんとした表情だったが、すぐに笑い出した。

結局、今回も由宇に振り回されたこのメンバーはたとえどんなことがあっても由宇を酒に近付けていけないことを再認識したのだった。

第16話 決意（後書き）

白夜「うが〜！何で世の中にはテストというものがあるんだああ！〜！」

由宇「…何をいまさら」

白夜「だって、テストが近いから私も思うように小説が書けないんだもん！」

由宇「はいはい、いきなり子供口調にならないでね、気持ち悪いわよ？」

白夜「むっ、私はただ純粹に毎日をエンジョイしたいだけなのだからぁ…」

由宇「世の中そんなに甘くないわよ」

白夜「……はい」

由宇「ほら、勉強しなさい」

白夜「…ちっ、仕方ないなぁ。

そんなわけではらく更新ができないかもしれません」

由宇「本当にごめんなさい。なるべく早く次の話を準備しますのでお楽しみに」

お知らせ、質問をしよう(前書き)

お知らせです。

お知らせ、質問をしよう

白夜「第一回！キャラクター質問コーナー！！」

由宇「はい？」

神威「いきなりなんだ？」

白夜「えゝ実は最近お気に入り登録の数がいぶ増えていることに気がついたのです！」

由宇「はあ、それで？」

白夜「そこまでしてもらったのに登場人物のプロフィールがいまいちちゃんと紹介しきれていないのです！」

神威「確かにそうだな」

白夜「そこで！キャラクターの意外な一面を見たい人、またはまたはお気に入りキャラクターについてもっと知りたい人のために質問を受け付けることにしました！」

由宇「…なるほど」

神威「まあ、悪くはないが」

白夜「というわけで、キャラクター達や私にでも構いません。質問してみたいことがあれば感想として私に送ってください。ある程度たまったら本人達に答えてもらいます。それではお待ちしております

す
!

お知らせ、質問をしよう(後書き)

キャラクター達への質問、応援メッセージでもいいのでよろしく
お願いします。

第17話 遺跡に行こう！（前書き）

こんにちは（。 。 ） /
白夜です！

テストも近くなり更新が遅れがちです。8月のあたままでテスト期間なので息抜き程度しか書けません。はやくテスト終わらないかなあゝ

第17話 遺跡に行こう！

「うわあ」

「こりゃまた見事なもんだなあ」

ここはとある山の中、私達は今何かの文明があつたと思われる遺跡に来ていた。

「ねえ、これはどう見ても弥生時代くらいの遺跡じゃない？」

私の言葉に黒髪の少年…神威が頷く。何で私達がこんな所に来ているかというところ……

〽一週間前〽

「ねえ、由宇聞いた？何か最近この街の近くの山の中で大昔の遺跡が見つかったらしいよ！」

私が窓辺でぼんやりと外を眺めていると葵がそんなことを言ってきた。

「……遺跡？」

ああ、そういえば朝のニュースでそんなことを言ってた。

「それでね、その遺跡の中にとっても珍しい宝石があったんだって！」

「宝石？」

おかしい、よく日本の古い遺跡から勾玉や鏡が出てくることはしよつちゅうだが宝石とはなんだろうか？

「なんでも周りの山の土に含まれる成分と遺跡を組み立てる柱なんかに使われた石の成分が長い年月をかけて混ざり合ってたんだよ！」

なるほど、それは確かに凄いがなぜ葵のテンションがこんなにも高いのだろうか。

「それでね……その……あの……」

今度はなぜかもじもじした。はたから見ればとても可愛らしいしぐさだ。実際、周りの男子は葵を見ながら頬が緩みまくっている。

「その……私テレビでその宝石見たんだけどね……とっても綺麗なの……」

「へえー、それで？……まさか」

葵は恥ずかしそうに頷いた。

「私、ほしくなっちゃって……一緒に取りに行くの手伝ってくれない？」

私の予想は的中した。しかしあの葵が自分がほしいからという理由だけでそんなことを言うだろうか。それに……

「……その遺跡って入れるの？何の許可もなく近づくことはできないんじゃないの？」

私が思ったことを言うと、葵は片手にピースサインをつくって私の前に突き出した。

「大丈夫！遺跡の中に入るわけじゃないわよ！」

「じゃあどうするの？」

「実はね、遺跡の成分が溶けだしてるみたいで、離れた場所でも採掘できるらしいよ！」

葵があまりにも満面の笑顔で言うので私は少し戸惑っていた。

「は、はあ、そうなんだ」

葵は私の目の前まで体を乗り出して目をきらきらさせたまま続ける。

「私ね、あの宝石でアクセサリーを作りたいの！」

「アクセサリー？」

「そう！私の…大切な人のためにね」

先程とは変わって真剣な目をしている。これは断るわけにもいかないわね。

「そんな真剣にお願いされたら断れないわね……」

「え！？…じゃあ」

葵が私に笑顔を向けた。

「ええ、いいわよ。私もなんだかんだで興味あるしね」

「ありがとう！由宇！」

葵はよほど嬉しかったのか私に抱き着いてきた。

「きゃっ！ちよつと葵〜大袈裟よ〜」

そうは言っても実はそこまで嫌ではないのよね…

「じゃあ、男手が必要だから神威と陸と光も誘いましょう！昴にも知らせないかね！」

「うん！」

こうして私達は遺跡に出発することになったのです。

第17話 遺跡に行こう！（後書き）

白夜「はい！どうも白夜です」

由宇「今回はえらく短いわね」

白夜「むう、しかたがないのです。テストもあるし、なかなか時間が取れないのです」

由宇「まあ、しかたがないか」

白夜「さてさて、そんなわけで質問コーナーももっておりますが、さすがにまだあまりきてませんでしたね」。

ふふふ、なら今ここで由宇の恥ずかしい秘密でもばらしてしまいいましようか？」

由宇「な、ななな、なんですって！」

白夜「ふふふ、知りたい方には私がこっそり教えてあげますよ」

由宇「たあっ！」

ゴシャ！

白夜「ぎゃあああああああ！！」

由宇「はあ、はあ、それでは次回をお楽しみに！」

第18話 儂い笑顔（前書き）

こんにちは、白夜です！

テストが半分ほど終わりましたので普通に投稿を再開しました。

第18話 儂い笑顔

「あつ！由宇！見て！あつたよ！」

私の腕を引きながら葵は岩がむきだしになっている場所を指差した。

私達が今いる場所は遺跡の少し下の山道だ。

「綺麗な赤だよ」

葵は岩の間から赤い宝石のような石を掴みだした。

「結構大きいですね」

私の後ろにいた光がしげしげとその石を眺める。

今葵が掘り出したのは直径が10cmくらいの赤い石である。

「ああ！あそこにも！！」

葵は新しい石を見つけてはしゃいでいる。

「葵のあんなに嬉しそうな顔見たの久しぶりじゃないか？」

私の横に並んで神威が微笑んだ。

「俺もそう思う。最近色々あったからな」

そう言いながら陸も神威の後に続いて葵の方に歩きだした。

『皆楽しそうね』

私の肩に神子が姿を現した。

「…そうだね」

私も自然と笑顔になった。

葵の方を見ると昴が葵に別の色の石を渡していた。顔こそ普段ど
うりだが、昴も楽しいらしい。

結局見つかった石は、赤、青、黄色、黒、水色、緑、オレンジの
7つだった。

「いっぱい見つかったね」

葵は近くにあった湧き水が湧いている場所で泥を落としながら呟
いた。

「うーん、時間もいいしお昼にしようよ」

私が言つと皆頷いた。

それぞれ自分の弁当を取り出して食べ始める。

「ねえ、みんな」

葵が皆に視線を向けた。

全員葵の方を向くと葵は話し出した。

「今から一時間だけ時間をちょうだい？」

葵は顔の前に手の平を合わせてお願いしていた。

「僕達はかまいませんが、何をするのですか？」

「…ちよつとやりたいことがあるの。一時間でいいから時間をちょうだい」

あまりに必死な葵を見て皆慌てて取り繕った。

結局、暇な一時間を皆それぞれ別行動として、後でまた葵の場所に集合することになった。

神威、陸、光は遺跡を見にいくと言って山を登り始めた。昴は葵の手伝いらしく、葵と一緒に作業を始めた。

私はやることがないので近くの岩場の上に登り、風景を眺めた。

「……………」

自分の街を山の上から眺める。いつもと違った風景。

「……………」

自分の家の辺りを眺める。次に学校を探し、葵の家、葵が入院していた病院を探した。

『由宇、どうしたの?』

私の横に神子が座っていた。私もその場に座る。

「…………街を見てたの」

私は視線は真っ直ぐなまま答えた。

『…………そう』

神子は優しくそう言うと、人の姿に変身した。

由宇よりも年上な大人の魅力を持つ女性。長い白髪に優しい瞳。色は由宇と同じで、白い肌とそれに合わせたような真っ白なワンピース。耳には緑の耳飾りをつけた神子の姿。

『由宇は何を考えていたの?』

神子がこつちを向きながら微笑んだ。

今の私達を見たら普通の人には姉妹に見えるだろう。

「……ここから見える景色を忘れないようにって」

私はもう一度街を眺める。

「私が生まれた街を忘れたくないの……私が消えた後もこの景色が変わらないようにって思いをこめてね……」

神子が由宇の頭をゆつくりと撫でる。由宇は目を伏せて神子に寄り掛かった。

「……神子ってお母さんみたいだね」

神子は微笑むと撫でていた手を肩に回して抱きしめる。

『私は由宇のことが大好きよ。だから、あんまり無理しないでね?』

由宇はゆつくりと頷いた。

二人はしばらくそのまま街を一緒に眺めた。

「できた!」

葵は満面の笑顔でそう言うと、横に座っていた昴が微笑んだ。

「…葵は凄いな」

昴はそう言うと葵が握っている物を見た。

「私、由宇にだけ先に渡してくるね！」

葵は立ち上がると走り出した。

私は背後から葵の気配を感じて振り返った。

「由宇」！

葵は笑顔で私の所まで走ってきた。

「葵？まだ少し時間には早いんじゃない？」

私は首を傾げながら尋ねた。

「うん、そうなんだけど…由宇には早めに渡したくて」

葵は由宇の手を掴むとそつと指にそれをはめた。

「…これって」

私の右手の薬指には丸くカットされた綺麗な赤い石がついた指輪があった。

「私からのプレゼントよ」

そつ言つと葵はにつこりと笑った。

「…ありがとう！」

私は笑顔で葵にお礼を言った。また私の宝物が増えた。

笑顔の二人を離れた場所から見ていた神子は猫に戻っていた。

『……由宇』

由宇に聞こえないくらいに小さく呟く。

由宇の笑った顔は綺麗だった。誰でも思わず見とれてしまうほどに。

しかし神子は気付いた。由宇の笑顔がどことなく儚いように感じてしまうのだ。

『…ごめんなさい』

神子は小さくそう呟いた。

第18話 儂い笑顔（後書き）

テストって神経使うから嫌いなんです、それに反してやってやる！って思う自分もいるのです。なんでしょうね、この矛盾（^
^ ; ）

番外編1 まさかの遭遇（前書き）

白夜「はい！皆さんこんにちは、白夜です！」

神威「神威です」

由宇「由宇です」

白「えー、実は今回は番外編としてクロさんの“un?happy life”とのクロスが実現しました！」

神「クロさん本当にありがとうございます！」

由「まさか本当に実現するなんてね…やってみるものね…」

白「そういうわけで楽しくやっていきましょう！」

番外編1 まさかの遭遇

爽やかな朝を迎えて由宇はゆっくりと目を開ける。

「……ん…朝か…」

欠伸をしながら階段を下りて洗面台に向かうと神威がいた。

「…ん？…ああ、由宇おはよう」

「おはよう、神威」

今日は土曜日であり学校は休み、更に月曜日が祝日なので三連休なのだ。全国の学生が幸せな三日間をおくるだろう。

「そつえば、由宇は今日何をするんだ？」

神威が顔を洗いながら由宇に尋ねる。

「う…ん…そうね、そろそろ食材補充しないといけないわね」

「じゃあ、商店街まで買い物だな」

二人は今後の予定を確認しながらリビングに入っていた。

…二時間後、とある場所にて。

- 優斗Side -

「はあ……はあ……ぜえ……ぜえ……」

街のある一角を少女が走っていた。真っ白な髪と真っ白な肌をしてくりくりとした目をした見た目は小学生くらいの少女だ。

季節に合わないニット帽をかぶり、半袖のシャツを着てジーンズをはいている。

オレは大島優斗^{おおしまゆうと}

現在ひたすら全力疾走中である。なぜかって？…わかった、説明しよう。だがその前に一つ言わせてくれ……

「なんでこうなったあああああああ……！」

優斗の後ろを何人もの集団が追いかけていた。

- 回想 -

「えっと……ここは……どこだ？」

オレは首を傾げながら隣にいる舞を見上げた。
現在オレ達はどこの街の駅の出入口で立ち止まっていた。

オレが話しかけたのはは音無舞、おとなしまいオレの幼なじみだ。

「わからないわね……姫ちゃんわかる？」

今、姫ちゃんと呼ばれたのが姫神麻衣、ひめがみまいオレと舞の友達だ。

「……えっと……たぶん……電車を乗り間違えたんじゃない？」

オレ達三人はしばらくその場に立ち尽くした。

オレ達はいつかのように学園を抜け出して隣街に行こうと電車に
乗り見事に三人とも居眠りをしてしまい、気がついたら知らない駅
だったのだ。

（彼等の詳しいプロフィールはクロさんが執筆されている小説“un? happy life”をご覧ください）

「あれ？今なんか聞こえたような……」

「優斗！何してんの？置いていくわよ！」

オレは慌てて歩き出していた二人を追いかけた。

その後、駅の掲示板でオレ達の街を探した。

「…………あの」

姫神が恐る恐る掲示板の時刻表を指差した。

「……………」

「……………」

「……………」

オレ達三人は声がでなかった……だって、次の電車は二日後、つまり月曜日だったから……

「…………えっと、これからどうする？」

オレ達は駅前のベンチに座り、今後のことを話し合うことにした。

「そうね、電車がないんだったらバスで帰れないかしら？」

舞の横で姫神がバスのパンフレットに目を通していた。

「…………だめです……そっちの方角に行く……バスは……ないです……」

「……じゃあタクシーで……」

「……たぶん金が足りないな」

オレの言葉がとどめになったのか舞はがっくり俯いた。
オレはニット帽をとって頭をかきながら言った。

「仕方ないさ、二日はどこか安いビジネスホテルみたいな所にも泊まって……………」

そこまで言った瞬間オレの背中をゾクリとした感覚が通り抜けた。

「……………あつ！…優斗さん！……………帽子とつたら駄目です！」

気がついた姫神が慌てて注意してくれたが遅かった。

「……………」

ええ、そりゃもう沢山の人に見られてましたよ、はい。

「……………い、いやだあああああああああ！！」

「……………きゃあああああああああああ……………」

「……………うおおおおおおおおおおお……………」

オレはニット帽をかぶり直して全力で駆け出した。

- 回想終了 -

- 優斗 Side -

「はあ……はあ……なんとか……まいた……かな……」

オレが今いるのはどこかの公園の隅にある林だった。

「はあ……疲れた」

舞と姫神に連絡しなければ……と携帯を開くと……電池切れだった……

「おいおい……オレ完璧に迷子じゃないか……」

そもそもなんで違う街まで来て追いかけまわせなければならんのか……ゴッドよ、オレが何かあなたにしましたか？

途方に暮れていると公園のベンチに誰か座っているのが見えた。恐る恐る覗いてみる……いや、別に怪しい意味じゃないからな？

「~~~~~」

そこにいたのは鼻歌を歌いながら猫達と戯れている少女だった。それだけならまだ普通だ。しかしオレは驚いた。

その少女はオレと同じ真っ白な髪をポニーテールにしていた。半袖のシャツから見える腕は細く雪のように白い。

スタイルも姫神と同じくらいにいい。何より瞳が印象的だ。左目が真紅、右目が蒼のオッドアイだった。

彼女の周りには沢山の猫が集まっていた。オレはなぜかフラフラと足が勝手に動き、その少女に近づいた。

- 由宇Side -

買い物の帰り道に私は公園のベンチで一休みしていた。

『今日はいい天気ね』

神子の言葉に私は頷く

「そうね、帰ったら洗濯物を干さなきゃ…神威か由香がやってくれてればいいけど」

私は空を眺めながら自然と鼻歌を歌っていた。

気がつくくと周りに野良猫が沢山集まっていた。神子の気配にうれたのだろうか。

すると公園の隅から少女が歩いてきた。小学生くらいの可愛い少女だ。

「……………」

少女はずっと私を見つめたまま何も言わなかった。

「…………私に何か用かしら？」

あまりにもその顔が可愛かったので、私は声をかけた。

「……………へ？あれ？オレ…何してたんだ？」

ハッとしてキョロキョロしているしぐさまで可愛くて私は思わず笑ってしまった。

それに気づいた少女は顔を赤くした。

真っ白な髪が風に揺れる。

…白い髪か…

私は小声で神子に話しかけた。

「この子、契約者じゃないわよね？」

『ええ、違うわ。この子からは何も感じない……………ただ』

「……………ただ？」

『普通の人間とも少し違うわね……………』

私は少し考えると少女に話しかけた。

- 優斗 Side -

オレと話していた少女は少し考えるようなしぐさをしたり小声でぶつぶつと何か呟いた。

しかし普通は変に思う行動も何だか綺麗に見えてしまうから不思議だ…… なんてだろう？

「ねえ…… あなたの名前は」

名前をきかれた、オレは思わず普通に答えてしまった。

「大島優斗です…… あっ」

ヤバい！普通に言っちゃった！ヤバすぎる！Y a ・ B a ・ i ！うん、落ち着こうかオレ！

「大島優斗…… 男の子みたいな名前だね…… まあいいか、私は天野由宇よ、よろしくね」

あれ？なんかすんなり納得してくれましたよ？…… 一応助かったのか？

しかし由宇さん、その笑顔は殺人的に強力です、はい。

「それで？あなたはここで何をしてるの？」

オレは一応今日のいきさつを話した。勿論ちゃんとオレのことは

隠してますよ？

「成る程ね……」

そう言つと由宇さんはしばらく黙つて考えるとにつこり笑つた。

「じゃあ、家にこない？ 携帯の充電もできるし、よければ家に泊まってもいいわよ？」

わゝお、なんて優しい方なんだろうね。この人は…でも泊まるのは流石にオレの正体がばれる可能性が……

「それに、あなた……人に言えない秘密があるでしょ？」

……はい？ 今なんといいました？ この人

「やっぱりね…安心しなさい、私は誰にも言わないわよ」

オレは雷にうたれたようにその場で固まつた。

オレの正体を知っている？ なぜ？ Why？

「うゝん、とりあえず私の家に行かない？ そこで話すから」

由宇さんはそう言つて手を差し延べてきた。オレはその手をとつた。不思議と恐怖や拒絶は抱かなかった。

番外編1 まさかの遭遇（後書き）

白夜「まずは最初の話が終わりました」

由宇「優斗君って実際見ると本当に可愛いわよ？」

白「なに！そうなのか？私は実際には見れないからな…羨ましい」

由「クロさんにイラスト描いてもらったら？」

白「さすがにそこまでは失礼だろう…私も由宇達のイラストは描いてますが、残念ながら載せかたがわからないのです」

由「誰か教えてくださると助かります」

白「では、次回をお楽しみに」

番外編 2 さあ、仲良くしよう（前書き）

白夜「いけない…なんかキャラが多くなって一人一人のイメージが不安定になってきた…」

由宇「大丈夫？私変なこと言わないわよね…？」

神威「ちなみに登場人物が多いから番外編では台詞の前に名前をつけます」

白夜「では、本編いってみよう！」

番外編2 さあ、仲良くしよう

- 優斗Side -

オレは今、由宇さんの家に行くために彼女の横に並んで歩いている。

由宇「さてと、一応推測だけどあなたはたぶん元々男の子じゃなかった？」

優斗「!!」

オレは驚いて思わず立ち止まった。
振り返りながら由宇さんはにっこり微笑む。

由宇「やっぱりね、男の子みたいな喋り方だし、何よりあなたの精神がそうだったからね」

精神？魂のことかな？オレはまだ再起動しない頭で精一杯考えた。

由宇「……………」

由宇さんがオレをじっと見つめている。美人に見つめられるのは…
…何だか恥ずかしいのだが…

由宇「成る程ね……あなた、猫と一体化してるのね」

- 由宇 Side -

由宇「成る程ね……あなた、猫と一体化してるのね」

私がそう言っていると彼は目を丸くして驚いた。

優斗「な、なんでそれを…」

由宇「私も普通の人間じゃないからね」

私は再び歩き出した。時々振り返ってみるとちゃんとついてきてくれた。

それからしばらくして私達は家につくと、リビングのソファアに向かい合う形で座った。

由宇「まずは、あなたのお友達を呼ばなくちゃね」

優斗「でも携帯はまだ充電が不十分だし…」

由宇「ここは私に任せなさい」

優斗「？」

可愛く首を傾げる彼が可愛くて思わず頭を撫でたくなる。おっと、まずはお友達を呼ばないと。

私は髪どめを外し神力を解放する。そして街中を覗いて二人を探す。

由宇「見つけた！」

この家からあんまり遠くない。私は二人に話しかけた。

由宇「あなた達、優斗君のお友達ね？」

舞「……え？なにこれ！あんだ誰よ！」

姫神「……………！」

一人はかなり気が強い子みたいね。もう一人は落ち着いた感じね、おとなしそう。

由宇「今から場所を送るから二人とも家に来なさい。優斗君もいるから」

そう言うつと私は二人に街の地図のイメージを送った。私の家には印しがつけてあるからわかるだろう。

由宇「さてと、二人が来るまでお話ししましょうか」

私は優斗君に微笑んだ。

- 優斗Side -

由宇さんはポニーテールにしていた髪を降ろすと目を閉じて何やら呟いた。どうやら舞達と話しているようだけど…どうやってるんだろうか…超能力か？

由宇「さてと、二人が来るまでお話ししましょうか」

よし、まずはこの人が一体何者なのか質問しよう…

優斗「あなたは一体何者ですか？」

オレは単刀直入に質問した。すると彼女は笑顔でこう答えた。

由宇「立場がちょっと違うけど私もあなたと同じく、猫と一体化してるの」

…はい？

イマナントオッシャイマシタか？

優斗「…えっと？それって…？」

由宇「こういうことよ」

由宇さんの頭に三角の白い猫耳が、さらにしっぽも現れた。

優斗「…え？…あれ！？」

オレは必死に状況を整理しようとしたが頭がうまく働かない。だってそりゃそうでしょ。目の前にいる美人の頭に自分と同じ猫耳って…可愛いけど…じゃなくて！

優斗「えっと？なんであなたに猫耳が？今までなかったのに…ナンデデス力？」

由宇「えっと…頭から煙が出てるけど大丈夫？…耳は普段隠してるから周りの人にはわからないようにしてるの」

なんですと！そんな方法があるのか！ぜひ教えてほしいものです！そうすればうちの学校の変態達も少しはおとなしく…

ピンポン

由宇「あら、来たみたいね」

オレと由宇さんは二人で玄関に向かうと扉を開けた。

そこには予想どおり舞と姫神がいた。

由宇「いらっしやい、舞さんと姫神さんね？」

舞「……………」

姫神「…………えっと…………はい」

あれ？珍しく舞が静かだ。普段ならもっとう……

舞「この…馬鹿あああああああああー!!」

優斗「ミギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

やっぱり……舞の不意打ちともいえるアッパーをくらい、オレは意識を手放した。

- 由宇Side -

私はなんとなくこの展開を予想してはいたけど……実際に見ると
凄い迫力ね…

舞「私がどれだけ苦労したと思ってんのよ!あんたの荷物私が持ってきたのよ?この馬鹿!」

優斗「……きゅ」

優斗君は目を回して倒れており舞さんがそこに馬乗りになって更に追い撃ちをしようとしている。

由宇「……ハッ、止めなきゃ！やめて舞さん！優斗君のライフは0よ！」

私が止めに入りやっとな舞さんは落ち着きを取り戻した。

気絶した優斗君をソファーに寝かせて私は舞さんと姫神さんに今までの説明をした。

舞「…成る程、じゃあ、あなたも耳と尻尾があるの？」

由宇「ええ、ほら」

私が耳と尻尾を見せると二人とも顔を真っ赤にした。舞さんにしたっては鼻を押さえている。

舞「……ぐっ、なんて破壊力！優斗とはまた違う魅力が…」

姫神「……………（カッコイイ）／／／／」

私は苦笑いを浮かべながら月曜日まで家に三人を泊めることにした。

舞「……よろしく願います！お姉様！」

由宇「…お、お姉様はちよつと…」

姫神「……よろしく……お願いします」

- 優斗Side -

何だかいい匂いがしてオレは目を開ける。おそらく食事の準備で
もしてるのだろう

すると目の前に由宇さんに少し似た顔の少女がいた。

由香「あ、起きた？」

優斗「あれ？……誰ですか？」

少女は黒髪をポニーテールにまとめて少し細い瞳を輝かせながら
オレを見ている。

由香「私は天野由香、由宇お姉ちゃんの妹だよ」

ほう、由宇さんには妹がいたのか…あれ？なんでそんなに好奇心
旺盛な瞳でこっちを見てるんですか？

由香「ねえねえ、その耳触らせて！お姉ちゃんよりも柔らかそう……じゅるり」

嫌な予感がする。最後のは聞き間違いないですよ？オレのセンサーが警報を鳴らしてますよ！？

優斗「えっと……それは勘弁して……」

由香「いいじゃない……ちよつとくらい……うふふふ」

優斗「い、いやああああああああああ……！」

オレの叫びを聞いた由宇さんが部屋に来なければオレは大切な何かを無くしていたかもしれない……

その後、リビングで夕食を食べながら改めて自己紹介をした。

優斗「改めて、オレは大島優斗、ある悪魔……げふん！……先生の実験に巻き込まれてこうなっんだ」

>ある先生とは橘光先生のことだ！彼女のことはun?happy
life本編を読むく

舞「私は音無舞、優斗とは幼なじみよ。よろしく」

姫神「……えっと……姫神麻衣です……舞ちゃんと優斗さんの友達

です…」

由宇「じゃあ私と由香は知ってるから残りの二人を紹介するわ。まずは神威ね」

神威「ああ、俺は天野神威、由宇とは…まあ、双子みたいな関係だ。よろしくな」

神威さんはなんとつかまさにイケメンと言っていいような顔をしている。由宇さんと同じ目の色が更に魅力を引き立てている。

優斗「そういえば、あと一人は？」

由宇「いるわよ、神子？」

由宇さんの横に真っ白な猫が現れた。オレ達は思わず呆然とした。

神子『はじめまして。私は神子、猫神よ。今は由宇と一緒に暮らしてるの。よろしくね』

オレはもはや何が起きても絶対驚かなくなる自信がついた気がする……ついに神様と出会うとは…

舞「……………か」

全員「……………か？」

舞「可愛い〜！」

神子『きゃあ!?!』

舞は神子さんに飛びついた…って何してんだあああ！！一応神様だぞ！！

舞「何これ！！お持ち帰りしたい」

神子『ちよつと』由宇『助けて！！』

舞はひたすら頬を擦り付けながら真っ白な猫神の体を堪能している…

由宇「…神子のこんな姿初めて見たわ」

天野一家は啞然としてその様子を見てばかりだった。

優斗「おい、舞！そろそろ放して……」

舞「うっさい！」

優斗「…すいません」

鬼の顔が見えるオーラで睨まれてオレはそれ以上何も言えませんでした……そこ！笑わない！

こうして何とか一日目が終了したのだった……やれやれ。

番外編 2 さあ、仲良くしよう（後書き）

白夜「やつちやつた……ついに神子までも……」

由宇「…私なんてあの有名な台詞を言っちゃたわよ？」

神威「白夜のテンションがはやくも狂いだしたな」

白夜「やばい、楽しい…楽しい！今なら何でも出来そうな気がする！！」

由宇「あゝあ、ついに壊れたわね」

神威「大丈夫なのか？優斗達が次回どんな目にあうかしんぱいだ……」

「白夜 あはははははははははは！！！」

番外編3 また会う日まで…（前書き）

白夜「はい、今回で番外編は終了です」

神威「クロさん、クロスオーバーさせていただいて本当に感謝しております」

由宇「また機会があればやりましょうね」

番外編3 また会う日まで…

- 優斗Side -

カーテンから入りこむ朝日をあびてオレは目を覚ました。

優斗「ふあ〜」……」

欠伸をしてから布団を出る。今オレがいるのは天野家の客室だ。カーテンを開けると綺麗な青空が見える。

優斗「うん、今日もいい天気だ！」

オレは背伸びをしてまだ寝ている舞と姫神を起こさないように部屋を出た。

リビングに行くとき既に由宇さんと由香が朝食の準備をしていた。

由宇「あら、おはよう優斗君」

優斗「おはようございます、由宇さん」

由宇さんと挨拶を交わし、洗面台で顔を洗う。部屋で着替えると再びリビングに戻る。

由香「あ、優斗さん！もう少し待っててね」

由香が笑顔でそう言ってきた。何だか申し訳ない気持ちでオレは顔の前で両手を振った。

優斗「いやいや、とんでもないです。泊めてもらっただけですから……」

由宇「優斗君は優しいのね……」

オレは恥ずかしくなって視線をそらしながら頬をかいだ。

神子『あなたは何か周りを引き付けるような雰囲気があるわね……』

いつの間にか由宇さんの横に神子さんがいた。神様にそう言ってもらえるのは嬉しいが……周りを引き付ける、か……その力が不幸にも変態どもを呼び込む方向に向いているのではないかと、オレは素直に喜べないのだった。

由宇「優斗君、二人を起こしてきてくれない？朝ご飯にしましょう」

優斗「わかりました」

オレはそう言って客室に戻ると、まずは姫神を起こしにかかった。

優斗「姫神……朝だぞ、起きてくれ」

オレは軽く姫神の肩を揺すった。

姫神「……ん………優斗さん………？」

ゆっくりと目を開けた姫神はまだ眠そうに目を擦っている。そう

いえば姫神は朝が弱かったんだっただか…？

優斗「よし、あとは舞だな！……舞ゝ起きろゝ！」

同じように肩を揺すって起こそうとするが……

舞「……うゝん………すーすー」

起きないな。それならと頬をつつきながら少し大きめに声を出した。

優斗「舞！起きろー！朝だぞー！」

だがそれは間違いだった、今思えばなぜ考えなかったのか……誰しも安眠を邪魔されたら不機嫌になるものだ、特に舞を不機嫌にさせたらどうなるかオレが一番知っていたはずなのに……

舞「……うゝん………うるさああい！！！」

パン！！

優斗「ぐはあ！！！」

姫神曰くそれはもう見事な平手打ちだったらしい……

- 由宇 Side -

舞ちゃんの叫びと見事なまでの平手打ちの音が家の中に響いた。
同時に少しだけ開いたドアから優斗君が吹っ飛んできた。

優斗「……そこ……まで……しなく……て……も……」

赤くなった頬を押さえながら彼は呟いた。

私の隣で神子がビクツと体を震わせたのが見えた。

神子『……どうもあの子は苦手だわ』

そんな神子に私は苦笑いを浮かべるしかなかった。

舞「……まったく、人の安眠を邪魔して……あ、おはようございます！お姉様」

今だに舞ちゃんは私をお姉様と呼びたがる。私としてはかなり恥ずかしいのだが……

由宇「おはよう、舞ちゃん。朝から元気があるわね」

私が笑顔で言うと舞ちゃんはそれなりに嬉しそうだった。

姫神「……あ、おはようございます」

遅れて姫ちゃんも入ってきた。昨日よりはだいぶ私達に対してね態度が友好的になっている。

由宇「おはよう、姫ちゃん。よく眠れた？」

私がそう言つと確かに頷いた。それはよかつたと安心していると床に倒れていた優斗君も起き上がり、神威も起きてきたので皆で朝食を食べることにした。

さて、今日は何をしようか……

- 優斗 Side -

料理とは不思議なもので、自分が毎日作つたものと少しでも違つと違和感を覚えるものだ……だが、今日の朝食はとてもおいしかった。なんというか暖かいのだ。最後にこんな家族みたいな雰囲気です食事をしたのはいつだったか……なんだか良いことありそうだ。

由香「あれ？優斗さんの携帯鳴ってるよ？」

優斗「…え？」

オレはテレビの台に乗せられた自分の携帯をみる。確かに光っている…そして…見てしまった…今最も話したくない人の名前が表示されているのを

- 橘先生 -

ガタンッ！

オレは椅子ごと倒れる程の衝撃を受けたような錯覚に襲われながらも急いで電話に出る。

優斗「もしもし…」

橘『…おそいわよ』

相変わらずひどいな……いや、もう慣れましたけどね……

橘『まあいいわ。それより今すぐに科学室に……』

優斗「あの……」

橘『何？口答えする気なの？』

優斗「そうじゃなくて……」

オレは今の状況を話した。

橘『…ふーん、成る程ね。それにしてもあんた達何考えてんのよ。また学校抜け出して』

優斗「それは作者の陰謀：げふん、げふん……すいません」
橘「さつさと電車乗って帰ってきなさい。今すぐに」

優斗「でも、電車が二日に一本しかないんですよ」

橘「はあ？あんたちゃんと時刻表見たの？今日も一本あるじゃないの」

はい？今日も電車がある？

優斗「本当ですか！先生！」

橘「私を誰だと思ってるの？午後3時ジャストのがあるらしいからそれに乗って帰ってきなさい……じゃないと とうなつても知らないわよ？」

不吉な言葉を残し電話はきれた。

その後皆に状況を話して今日は駅周辺で買い物をする事にした。

午前中は主にゲームセンターで時間を潰して、午後から服を買いに行くことになった。

- 由宇 Side -

昼食を食べた後、私達は服を買うために駅前の大通りに来ている。

早速舞ちゃんが優斗君を捕まえてマニアックな服がある店に引張っていったけど……

優斗「いやだあああああああ!!」

どうやら今回も弄られているようだ、優斗君頑張つて!

神威と由香は別に欲しい物があるらしくて先程別れたばかりだ。

由宇「ねえ、姫ちゃん。あの二人はいつもあんなかんじなの?」

私は店から出てきた舞ちゃんと優斗君を見ながら尋ねる。

姫神「……はい、そうですね……」

姫ちゃんも何と言えいいのか……というかんじで二人を見ている。

由宇「仲がいいのね……羨ましいわ」

私と姫ちゃんは自然に笑いあつた。

舞「ただいま!……ってどうしたの?二人とも、にやにやして」

由宇「何でもないわ……ね?姫ちゃん」

姫神「…はい」

私達が笑うと二人は首を傾げていた。

由宇「さて、次はどこに……」

女性「きゃあああああ！！泥棒！！誰かその人捕まえて！！」

少し離れた場所で若い女性が叫んでいた。その横をサングラスをして帽子を深く被った男がバックを片手にこちらに走ってくる。

私はすぐに駆け出した。

- 優斗Side -

女性の叫び声が聞こえた瞬間に由宇さんが駆け出した。長い白髪
のポニーテールを揺らしながら姿勢を低くして男に近づいていく。

由宇「やあっ！！」

掛け声と同時に男の足元を払いのけた。男は見事にバランスを崩して倒れ……なかった！

なんと、運よく綺麗に体が回転して流れるように立ち上がると再び走りだした…オレ達の方に。

男「どけ！ガキども！」

ブチッ

ああ、言ってしまった。禁断の言葉を…今一番言ってはならないことを…

舞「…誰が」

ガシッ

あれれ？舞さん？なんでオレを掴むのかな？

舞「ガキだあああああ！！ふざけんなよこらあああああああ！！！！」

優斗「にやあああああああ！？」

舞は叫ぶと同時に男に向かってオレをぶん投げた。

まるで剛速球のように打ち出されたオレはバックを持っていた左手に激突した。痛かったが咄嗟に爪で手を引っかいて痛がっている隙にバックを奪い取った。

そして素早く男から離れると舞と由宇さんが同時に男に駆け出し
て…

舞「うりゃあああああああ!!」

由宇「はあああああああ!!」

舞の回し蹴りと由宇さんの肘打ちが見事に男に炸裂し、男はその
場に崩れ落ちた……死んだんじゃないか？あれは…

周囲から拍手が湧き起こる。

オレ達は女性に何度もお礼を言われてその場を後にした。

それから丁度時間もなくなりオレ達は駅のホームに集まっていた。

優斗「色々とお世話になりました」

舞「最後まで迷惑かけてすいません…」

姫神「……ありがとう……ございました」

オレ達三人はそれぞれ頭を下げながらお礼を言った。

由宇「いいのよ、なんだか楽しかったしね」

由香「また遊びに来て下さいね!」

神威「いつでも歓迎するぞ」

神子『また会いましょう』

それぞれの別れの言葉を聞き、オレ達は電車に乗り込んだ。

- 由宇Side -

電車がゆっくり動き出す。私達は窓から見える彼等に見えなくなるまで手を振った。

由宇「また、会う日まで……」

私はそう呟いた。すると神子がとんでもないことを言った。

神子『でもあの電車って一つさきの街までの直通だから途中で止まらないのよねえ』

三人「……え?」「」

- 優斗 Side -

三人「……」

あれあれ？おかしいな……あの別れ方でこんなオチですか？……う
ふふ、おかしいな目からしよっぱい水が……

舞&優斗「ここはどこだあああああああー！」

姫神「……」

結局オレ達が帰り着いたのは夜遅くになってからだった。

- 完 -

番外編3 また会う日まで…（後書き）

白夜「いやゝなんかここまでコメディーみたいな感じで書いたの久しぶりだなあ…」

由宇「本編は絶賛シリアスモード中だからね」

神威「そろそろコメディーをいれていいんじゃないか？」

白夜「そうします。クロさん！今回はキャラの提供ありがとうございました。またいつかやりましょうね！」

第19話 本は凶器にもなる・昴の苦悩(?) (前書き)

気がついたらPVが55・000を越えてました! 皆さんありがとう
とございます!

今回は光と昴のお話です。

第19話 本は凶器にもなる・昴の苦悩(?)

朝の通学路を由宇と神威は歩いていった。由宇の指には赤い石のはまった指輪が光っている。

数日前に葵から渡された大切な指輪だ。由宇だけではなく他の皆にも作ってある。神威が青、陸がオレンジ、光は黄色、葵が水色、昴が黒、神子と月が緑である。神子と月は指輪をはめれないから耳飾りだ。

「……ふふ」

由宇は学校以外の場所なら必ずこの指輪をはめている。それだけ嬉しかったということだ。

「葵は器用だな。昴に石をカットしてもらう以外は全部自分でやったらしいからな」

そう、葵はとても手先が器用なのだ。中学校では美術の時間に女神の彫刻を作ったこともあるらしい。

「人間誰でも特技を持ってるものだよ」

由宇が指輪を見つめて呟く。

「そつだな。おっと、そろそろ校門近いし外しとけよ」

「うん」

由宇は指輪を指から抜きとり鞆の中にあるケースにしまった。

「あれ、光がいるよ？」

校門には風紀委員である光が何やらぶ厚い本を片手に立っている。同じように書類をめくりながら他の風紀委員も生徒一人一人を呼びとめて何やらチェックしている。

「おはよう、光。今日は何してるの？」

由宇が朝の挨拶をかねて光に話しかけた。

「おはようございます。由宇さん神威君、実は今年から服装検査が行われるようになったんです」

「へえ、だから風紀委員が校門にいたのか……」

アクセサリーをつけていたり、髪を染めたりしている生徒は風紀委員によりチェックされて改善されないなら生徒指導室行きになるそうだ。

「あなた達は問題ありませんね、流星です」

由宇はあはは、と小さく笑うと光が持っているぶ厚い本が目にとまった。

「光、その本は何？」

光はにっこりして本を持ち上げて一言

「護身用です」

と言った。

「……はい？」

「………？」

由宇と神威が首を傾げていると丁度男子生徒が他の風紀委員に文句を言い出した。

「別にいいだろ！これくらい！ちょっと色抜いたくらいでぐちぐち言いやがって！」

どうやら髪の色のこと風紀委員に捕まったらしい。だいぶ頭にきているのか今にも殴りかかりそうな勢いである。

「やれやれ、仕方ないですね」

それを見た光がため息をつきながら男子生徒に近づいていく。

「そのあなた」

「…あ？何だよ！」

光が男子生徒に話しかけるとあきらかに不機嫌そうに振り向いた。

「あなたが髪の色を変えたのは事実ですよ？なら立派な校則違反

です。素直にチェックを受けてください」

光の言葉についに男子生徒はキレた。

「うるせーんだよ！」

男子生徒は光に殴りかかったが、光は片足を軸に体を捻ってそれを避けるとそのまま本の角で男子生徒の横顔をぶん殴った。男子生徒はそのまま顔を押さえてうずくまってしまった。

「…やれやれ、校内暴力も追加ですね」

光は本で肩を叩きながら由宇達の方に戻ってきた。

「…光、今のは正当防衛になるのか？」

神威の言葉に光は微笑みながら頷く。

「ええ、むしろ校則違反者には手加減無しで頼むと校長から言われています」

校長も容赦がないものである。ちなみに光の持っていた本の表紙には『翔星高校校則一覧』と書かれていた。

「ストレス発散にもなりますよ？」

「…光、一応本の角も凶器になるから注意してね？」

「あはは、勿論ですよ」

始めて光を恐ろしく感じた二人であった。

さて、場所が変わりここは校舎裏、そこに立つのは小柄だが妙に大人っぽい少女。黒いロングヘアと宝石のような瞳が特徴の昴である。

『これで何度目かね』

「……………はあ」

月の眩きに昴はため息をはく。皆さんもおわかりだろう。校舎裏や体育館裏に女子が呼び出される理由……

昴はポケットから小さな手紙を取り出す。水色の小さな封筒に一言、

『朝のHR前に校舎裏に来てください』

と書かれていた。朝早いため離れた位置にある体育館裏ではなかったが、大体の予想がつく。
『今日はどんな男かしらね』

相変わらずテンションが無駄に高い月に何も言わずにいと、

「あの、お待たせしました」

昴は声が聞こえた方を見て眉をひそめる。今まで男子に告白されることはあつたが、そこにいたのは…

「私、泉美里いずみさとつていいいます。黒神先輩！わ、私と付き合ってください！」

セミロングくらいの黒髪をなびかせた女子だった。

『あらあら』

「……………」

何やらニヤニヤしていそうな月の声を聞きながら昴は額に手を当てて困惑していた。まさか女子に告白されるとは思っていなかったからだ。

「あの〜、黒神先輩？」

昴を先輩と言うからには後輩にあたるのだろうか、昴にはあいにく百合属性はない……………はずである。

「……………君は私が女だということを前提に話しているのだな？」

「は、はい！勿論です！」

昴の性格からして、さっさと終わらせたいのだからなにせ相手が女

子だ。男子なら簡単に一言で終わらせるのはどうだろうか。

「……君と私は初対面ではないのか？」

その言葉を聞いた瞬間美里は瞳を潤ませ始めた。その姿を現すなら小動物だろうか…身長も昴より低くさらに目もパツチリとしているためか小学生みたいだ。いわゆるロリっ子である。

「……………」

『（なにあの小動物！抱きしめたい）』

月は人の姿になれば真っ先に抱きしめていたと心で思った。昴は美里の反応に戸惑っている。

「実は私、背も小さいし、小学生みたいだから皆に虐められてたんです…」

美里は俯いて小さく震えているのがわかる。

「黒神先輩は覚えてないかもしれないけど、一度委員会の仕事でからかわれている私を助けてくれました」

委員会と聞いて昴は虐められている美里の姿を思い出した。

「……ああ、あの時か」

それは由宇と神威が分裂したころだった。委員会の書類を運んでいた時に数名の男女に囲まれて動けないでいた美里を昴が助けたことがあった。

昴は最初小学生が迷い込んで学校の生徒にからまれていると勘違いしたのだ。

「（迷子じゃなかったのか…）」

今の心での発言は相手に対して失礼だが美里には無論聞こえていない。

「あの時から先輩のことが忘れられなくて…だからお願いします！私と付き合ってください！」

凄いい勢いで頭を下げた美里に昴は困惑する。

「（……何だか断りにくい…しかしだからといって了承するのも…）」

今クラスメートが昴を見たらなんと言うだろうか、昴は無意識に顔を赤くしてオロオロしている状態だ。普段とのギャップが半端ではない。

『…昴のキャラを崩壊させるなんて……恐ろしい子!!』

月が啞然としている中で美里が顔を上げた。涙で潤んでいる瞳と赤くなった顔、更に上目遣いとロリっ子という男ならば文句無しであろう攻撃を受けて、流石の昴も怯む。

「……うつ、……付き合うことはできないが……友達なら」

「本当ですか!?!」

「…え、ええ」

『あの昴が押し負けた！？』

そのままH R開始まで時間がないことに気づいて慌てて二人は放課後一緒に帰るという約束をして別れた。

こうして、由宇達のメンバーに一人新しい顔が増えたのだった。

ちなみに昴がH Rに遅刻したのは言うまでもない。

第19話 本は凶器にもなる・昂の苦悩(?) (後書き)

明日から大学の部活の合宿が始まります。生きて帰れるか心配です。

夜になっても生きていたら執筆したいです

(-.-;)

第20話 昴と美里（前書き）

キャラクタープロフィール

いずみみさと
泉美里

17歳

身長145cm

由宇達が通う翔星高校の二年生。明るくて真面目な性格だが見た目が小学生みたいなのでよくからかわれる。委員会の仕事で昴に助けてもらったことがきっかけで昴に好意を抱いている。

本人曰く「愛に性別は関係ない！」とのこと。

第20話 昴と美里

帰りのHRが終わり、由宇は昴の席に近づいた。

「昴、一緒に帰らない？」

基本的に昴は由宇の誘いを断らない。しかし、次の言葉を聞いて由宇は驚愕する。

「……すまない、由宇。今日は別の友達と帰るから一緒には行けない」

そう言うと昴は鞆を手に教室を出た。

「……昴？」

由宇はその様子を啞然とした表情で見送るがすぐに笑顔になった。

「…そっか、昴にもついに春がきたのかぁ」

何やら勘違いをしている由宇だったがその顔はまるで子供の成長を喜ぶ母親のようだった。

- - -
- - -
- - -

学校を出た昴は真っ直ぐ校門へと足を運ぶと柱に背を預けて目を閉じる。風が昴の長い黒髪を撫でる。その光景は目の前を通る生徒が全て見とれるほど美しいものだった。

「…お、お待たせしました！先輩！」

しばらくしてから声をかけられたので昴がゆっくりと目を開けると美里が目の前に立っていた。頬が少し赤く染まっているが昴は気にしないことにした。

「……じゃあ、行くか」

「…は、はい！」

昴と美里は並んで道を歩き出した。

二人とも会話はない。昴はもとも無口であるし、さらには今日の朝に告白してきた後輩と下校するということで彼女なりに緊張しているのだ。

一方で美里は憧れの先輩に告白して恋人にはなれずとも友達として一緒に帰れることが嬉しくて逆に昴の顔を直視できないでいた。

「（今先輩を見たら思わず抱き着くかもしれない／＼／＼）」

と、頭の中で昴と抱き合う自分を想像して一人悶えていた。

「……泉さん」

昴の言葉に我に帰り慌てて顔を上げると昴の顔が至近距離にあり美里は顔が真っ赤になる。

「……どうかしたのか？ 顔が赤いが……」

美里は昴から顔を背けようとするが体がいうことをきかないでいた。

「…だ、ただ大丈夫です……黒神…先輩」

「…そうか」

昴にとっては何気ない行動でも美里にとっては理性が今にも崩れそうになっていた。

「（…先輩の唇）」

目の前にある昴の唇を見ながら頭の中では昴とキスをする自分を想像していた。

「（……はっ！ 駄目よ！ もっと信頼を積み上げなきゃ！）」

美里が心の中でそう思っていると昴が顔を離した。

「……先輩？」

昂は何故か顔が赤くなっていた。実はこの時、月が力を使って昂に美里の考えていることを教えたのだ。

『この子、昂のことが本当に大好きみたいね』

昂は由宇達のように特別な事情で知り合ったわけではなく、普通の友達として知り合った（告白されたのだが）美里のことが嫌いではなかった。いや、むしろ好感を持っている。

「……泉さん」

昂は小さく呟いた。美里は首を傾げて昂を見る。

「……わ、私のことは名前で呼んで構わない」

「……え？」

美里は一瞬言われたことがわからなかった。

「（…これはもしかして…私のことが）」

美里の顔も赤くなる。美里は必死に理性が崩壊しないように我慢しながら口を動かす。

「……いいんですか？」

美里の言葉に昂は頷く。美里は思わず昂の手を掴むと、驚く昂に向かって笑顔を見せた。

「…じゃあ、私のことも名前で呼んでくれませんか？」

「……わかった……み、美里……／＼／＼／」

「ありがとうございます、昂さん！」

二人はまた並んで歩き出した。最初と比べるとだいぶ空気は和んだがまた別の意味で緊張した雰囲気になっていた。

ちょうど水道管の工事が行われている近くで美里は昂に話しかいた。

「…す、昂さん」

昂は美里へと顔を向ける。

「…い、今から家に来ませんか？」

「……え？」

昂は突然の誘いに戸惑う。

『別にいいじゃないの。仲良くなるいい機会じゃない！』

月の言葉に昂は頷く。

「……少しなら」

「本当ですか!？」

美里は満面の笑みを浮かべて昴に近づいた。

・その瞬間

どこからかボンツと鈍い音がした。昴は思わず美里を引っ張って自分の後に移動させる。するといきなり雨が降り出した。

音の正体は近くの水道管が破裂した音だった。物凄い勢いで水が噴き出していた。おそらく工事の人が何か手違いで水道管を傷つけたらしい。昴は近づかなければ特に危険はないと思っていた。

『昴！気をつけて！』

「……！」

月の言葉で昴も気づいた。水道管が破裂したために近くを走っていた車の運転手が驚いてハンドル操作を誤り、昴と美里の方に向かってきていた。

昴は美里を抱き上げると大きく横に飛んだ。さっきまで昴達がいいた場所を車が通りすぎる。地面に転がる前に抱きしめる形に変えて、昴が下で上に美里が乗る形で止まった。

「……怪我はないか？」

昴の問いに美里は頷く。すると今の状態を見て美里は慌てて昴の上からどことずするが

「……っ！」

左足の激しい痛みに思わずうずくまった。どうやら車を避けた時に足を捻ったようだ。

「……これはすぐには動かさない方がいい」

そう言うと昴は美里の背中と両膝の下に手を入れて抱き上げた。いわゆるお姫様抱っこである。

「ひゃあ！？…す、昴さん！？大丈夫ですよ！一人で歩けます！」

美里が顔を真っ赤にして昴を見るが昴はそのまま歩きだした。

「…これは私の責任だから」

結局美里はそのまま家までその状態で運ばれた。その時美里の顔が嬉しさでいっぱいだったのは言うまでもない。

第20話 昴と美里（後書き）

いつも感想を書いてくださる皆さんありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

第20・5話 もしも〇〇だったら2&質問の答え(前書き)

白夜です。皆さんいつも私の小説を読んでいただきありがとうございます。
ざいます。

今回は先日届いた質問の答えを載せていますのでお楽しみに。

あと、以前クロスさせていただいたクロさん！また優斗を少しお
借りしました。すいません(汗)そしてありがとうございます。

第20・5話 もしも〇〇だったら2&質問の答え

白夜「もしも〇〇だったらシリーズパート2〜!」

全員「「いえ〜い!」」

白夜「じゃあさっそくいつてみましょう!」

くもしもこの小説がバトルものだったら

《第12話より》

男「な、何なんだ…お前は!」

由宇「…“神”」

由宇はそう一言呟くと右手の爪で男の首筋から胸元にかけてを切り裂い……

葵「ストップ!」

月「これ以上は危ないわ!」

陸「この小説にはそういう表現の注意はしてないからなあ」

由宇「……ちっ！」

神子『ゆ、由宇？』

由宇「……何でもない」

くもし葵が不器用だったらく

《第18話より》

昂「……葵は凄いな（別の意味で）」

葵「あれくおかしいなあ（汗）」

昂「……今いくつ失敗した？」

葵「……10個」

月「……葵、頑張つて！！」

由宇「……葵はまだかなあ」

神子「……………まだかしらねえ」

《番外編より》

「由香が変態（百合）の部類に入っていたら」

由香「お姉ちゃんの耳より柔らかそう……………じゅるり」

優斗「…え？待った！！何この展開！？」

由香「…うふふふ」

優斗「い、いやあああああああああ！！」

由宇「あれ？ドアに鍵が！？」

由香「うふふふ、ぬかりは無いわよ」

優斗「ええー！！？」

由香「ああ…この白い肌…たまらないわ！」

優斗「誰か助けてくれー！！」

白夜「ああ、色々と大変なことに…」

由宇「また優斗君を巻き込んでしまったわね…」

優斗「……………（呆然）」

白夜「クロさんすいません！」

神子「では次に皆さんから届いた質問に答えましょうか」

・何で神威はそんなにイケメンなんですか。

神威「…なんで、と言われても困るな」

由宇「でも神威はいいところばかり持っていくし…」

神威「そうか？別にそんな風には考えてないんだがな…」

葵「…神威はカツコイイよ！うん！それは変わらない！」

陸「俺らはいいいとこ無いよな…」

光「僕は一度見せ場があつたので別に気にしません」

神威「ああ、本でぶん殴ったやつか」

陸「あれ？今のところいいとこ無いの俺だけ？」

・皆さんの黒歴史を教えてください。

由宇「これは…イタい質問ね…」

神威「黒歴史なんてあるかな…」

由宇「私なんて生まれてからそんなになってないし…」

葵「いや、由宇と昴はあれだよな…」

陸「…あれだな」

光「…あれですね」

神威「…ああ、俺がまだ分裂してないころの…」

由宇「……？」

昴「………？」

《詳しくは第13話を見てみましょう》

葵「神威の黒歴史ならわかるかも」

神威「…何かあったかなあ？」

葵「ほら！高校一年の文化祭で神威女装させられたじゃない！」

神威「…あれか」

陸「ああ、そんなこともあったなあ」

光「僕は見ていなかったのですが、どんな格好をさせられたんです？」

葵「メイドよ！神威は今よりもまだ背が小さかったから結構似合ってたわよね」

神威「………」

光「ちなみに、やはりあの台詞は言っただんですか？」

葵「もちろん！メイドといえば『お帰りなさいませ！ご主人さま！』でしょ！」

神子『それは見たかったわねえ』

月『私も！』

由宇「…神威、その…元気だして？」

神威「…大丈夫だ」

陸「黒歴史かどうかはわからんが葵の恥ずかしい場面なら知ってるぞ？」

葵「……え？」

陸「こいつ修学旅行の二日目の朝に寝ぼけて校長に抱き着いてな、校長はそのまま気絶しちまって大混乱になったことがあったな」

葵「~~~~~／／／／／」

由宇「あ、葵…しっかりして！」

神威「…しかし何と間違えたんだ？」

神子『…あらあら』

月『あははは！』

神威「…な、なんだよその視線は！？」

陸「光は基本しっかりしてるから黒歴史なんてなさそうだな」

光「当然です」

葵「あれ？でも確か光って高校の入試試験の日にコンタクトを落として時間ぎりぎりまで会場が見つからずに迷子になったってきいたよ？」

光「…なっ！誰からそんなことを！？」

神威「…あゝたぶん俺だ。あの日やけにあたふたしてるやつがいたから誰かなって思ってたんだけど…お前だったとはな…」

光「……………」

神威「同じクラスになってから気づいたんだよ……………あれは相当目立ってたな」

光「……一生の不覚です。…なら、今すぐあなた方の記憶を消します」

陸「ちょ！？本を持ってくるな！危ない！！」

光「次は陸君ですね」

葵「陸って確か彼女がいたんだよね？」

由宇「…え！？ほんとに！？」

昴「……とてもそうは見えないが」

陸「どういう意味だよ！」

葵「でも、たしか三日で終わったんだよね？…普通すぎて面白くないって」

月『その彼女さんハ○ヒみたいね』

陸「……忘れようと思ってたのに」

由宇「陸！！しっかりして！？」

由宇「最後は神子と月だけど…」

神子『…あるにはあるわよ?』

月『…うん、まあね』

陸「へ」。何があつたんだ?」

月『まだ天界にいるころにマタタビのお酒を間違えて二人とも飲んでね…大暴れしたことがあつたわ』

神子『その後二人とも怒られたわね…懐かしいわ』

由宇「神子にもそんなことがあつたんだね…私も気をつけないとね!」

昴「……そうだな」

他全員「」「いや、もう遅いから!」「」

由宇「……え?」

昴「………?」

白夜「はい！今回はこれで終わりです！楽しんでいただけたでしょうか？

では、次回をお楽しみに！」

全員「」「」ありがとうございました！」「」「」

特別話 白い訪問者（前書き）

反省も後悔もしておりません！

べ、別にやってみたかったとかじゃないんだからね！

特別話 白い訪問者

土曜日の朝、リビングで由宇はコーヒーを飲みながら新聞を広げていた。彼女の肩には神子が乗っており、一緒に新聞を眺めている。

神子は時々由宇の肩に乗っているが由宇曰く「重さは感じないらしい。」

そんな朝の一時を過ごしていた二人は突然奇妙の感覚に顔を上げた。まるでこの世とは違うものの感覚。

「…神子、これって」

由宇の言葉に神子も頷く。

『…何かしらね』

気配は段々大きくなってくる。

「（…近づいてきてる）」

由宇が思った瞬間。

ピンポーン

玄関の呼び鈴が鳴った。

由宇と神子は顔を合わせて慎重にドアに近づく。そして一応チェインをつけたままドアを開く。そこにいたのは一人の少年だった。

「はじめまして、由宇さん、あと姿は見えないけれど神子さんも……」

少年の言葉に由宇は息をのむ。少年は白髪ショートヘアに黒い瞳、そして真っ白な服を着ていた。身長は167センチくらいで高校生に見える。

「……えつと俺は19歳ですよ？」

「……心を読まないでください」

「由宇さん顔に出てましたよ？」

少年はニツコリ笑う。

「ここで立ち話もなんですから家に入れていただけたら嬉しいのですが……」

由宇はどうしようか迷った。見ず知らずの少年を家に入れてもいいのか迷ったのだ。

『由宇、大丈夫よ』

由宇が悩んでいると神子が語りかけてきた。

『彼から敵意は感じない……どちらかといえば私に近いものを感じる』

わ
『

神子の言葉を聞いて、由宇はチェーンを外し、少年を中に入れた。

リビングでテーブルを挟んで向かい合うように座った由宇と少年はしばらく沈黙したままだったが少年が口を開いた。

「そついえば自己紹介がまだでしたね。俺は白^{はく}といいます」

すると突然神子が姿を現す。由宇は驚くが少年…白は特に驚かない。
い。

『あなたが…白なの？』

神子は驚いた表情をしていた。由宇も滅多に見れない神子の表情に驚く。

「ええ、神子さんだけでなく由宇さんや神威さんにもお会いしたことがあるんですが…わかりませんか？」

『あらあら、そういうことね…でもあなた、そんな姿じゃすぐにはわからないわよ？』

白と神子はクスクスと笑い合うが由宇は頭の上に疑問符が浮かぶばかりだ。

「…えっと、神子の知り合い？」

由宇が神子に尋ねると神子は笑顔で由宇に向き直った。

『ええ、一応ね。まあ、いずれ誰かわかるわよ』

「……………」

由宇はやはり納得がいかないがこれ以上は気にしないことにした。神子の知り合いならもしかしたら神様なのかもしれない。

『…それで？今日は何をしに来たの？』

神子の質問に白は笑顔を向ける。由宇から見ればどこか暖かい笑顔だった。

「いや、皆元気にしているかなと思ってね。実際に見ないとわからないこともあるからね」

白は神子と由宇を交互に見つめる。その顔はどこか愛おしそうで不思議と嫌な感じがしなかった。

「あの、白さんって神子とどういう関係ですか？」

由宇が興味から白にそう尋ねると神子が微笑む。

『私の親つてところかしらね…』

「ええ！？」

神子の言葉に由宇は驚く。

「み、神子のお父さん!？」

神子と白は苦笑いを浮かべる。

『本当の親じゃないわよ?』

「さっきも言いましたけど俺はまだ19歳ですから…一応普通の人間ですしね」

由宇は白の言葉に首を傾げる。普通の人間?神子の知り合いなら神様だと思っていたからだ。

「…その見た目で普通の人間には見えないんじゃない?」

白はそうですね、と笑いながら呟いた。神子も笑っている。

「さて、じゃあそろそろ俺は帰ります。由宇さんと神子さんの元気な姿も見れたし」

そう言っで白は席を立つ。

『あらあら、もうちょっとゆっくりしていけばいいのに。神威や由香だっているのに』

白は笑いながら起こしたら可哀相ですから、と言っで玄関に向かう。

「それでは、俺はこれで…朝早くからすいませんでした」

そう言っ て白は玄関のドアを閉めた。

「ねえ、神子？白さんって結局何者？」

『…ふふ、秘密よ』

- - -
- - -
- - -
- - -

閉じた玄関のドアを振り返り白は目を細める。

「また、会いましょう…由宇」

そう言っ て何もない空間に手を翳すと真っ 白なドアが現れた。そのドアを開けて白は中に入る。ドアが閉まるとすぐにドアは姿を消した。

-
-
-
-
-

白と黒が混ざり合う世界に二人の人物が同時に現れた。

一人は真っ白なショートヘアーので真っ白な服を着た少年。
もう一人は長い黒髪を揺らす真っ黒な服を着た少女だった。

「...やあ夜^よどうだった？」

少年が少女に話し掛ける。

「うん、エルダもリリイも元気そうだったよ。白^{はく}はどうだった？」

「ああ、由宇も神子も元気だったよ」

二人は笑い合つと白が手を前にかざす。すると一本のペンが現れた。
た。

同じように夜が手をかざすと分厚い本が現れた。

白と黒が混ざり合う世界で二人は寄り添いながら呟く。

白「…さて」

夜「…次は」

二人は笑いながら本の空白ページにペンを走らせる。

白&夜「…どんな話を書こうかな？」

特別話 白い訪問者（後書き）

夜の^{よる}話が見たい人は天使として…を見てください。

やっちゃったなあ（汗）

第21話 三人の人気者（前書き）

白「こんにちは、今回は神威のイメージが随分と変わる場面があります」

夜「神威が好きな人ごめんなさい」

第21話 三人の人気者

「…コンサート？」

朝の教室で由宇は首を傾げていた。向かい合う形で葵が座っている。

「うん、コンサート！由宇のファンクラブができてから皆の前でまだ何もしてないでしょ？」

だから今度の日曜日に体育館を使ってコンサートをしようって話になったのよ」

最近は普通に生活していて忘れていたが確かに由宇のファンクラブは存在する。しかも会員は徐々に増えているらしい。

「急にコンサートとか言われても…しかも今日は月曜日だから一週間ないじゃないの」

歌を歌うにしろ曲を決めたりする時間や練習する時間が一週間で足りるとは由宇には思えなかった。

「大丈夫よ、曲は私と陸でいくつか選んだから由宇達には好きなものを選んでもらっただけだよ」

「ふ〜ん……待って、「由宇達」ってどういうこと？」

由宇が首を傾げると葵がクスクスとわらって指を三本立てる。

「今この学校には三つのファンクラブがあるんだよ？」

「え！？そうなの？」

由宇は目を丸くして驚いた。葵は笑顔のまま続ける。

「一つ目は由宇のファンクラブ」

由宇は小さく頷く。よく考えればなんだか恥ずかしい気もするが深く考えないようにした。

「二つ目は昴のファンクラブだよ」

「昴の！？」

由宇は驚いたがよく考えたら昴はファンクラブができてもおかしくないくらいに注目を集めている。本人は気づいていないが実は結構存在感が大きく、他人に好かれやすい。

「そういえばこの前美里ちゃんっていう後輩と友達になったって言うってたわね…昴ならファンクラブくらいできてもおかしくないか…」

由宇は苦笑いをする目で葵に続きを促す。

「三つ目だけど…実は神威なんだ」

「ええ！？」

由宇Side

私は呆氣に取られて完全に固まった。神威にファンクラブ？……いや確かに神威は顔もいいし性格も優しいから（決してナルシストではないよ？）結構他人から好かれる方だがまさかそんなことになっっているとは…

「まあ、なににせよコンサートのことはもう発表しちゃったから今日中に曲を決めて明日から練習ね！」

その後放課後に屋上に集合することに決まり、私は不安を抱えながら授業開始のチャイムを溜息をつきながら聞いていた。

放課後に屋上へ向かうと昴が先にきていた。隣には小学生に間違えるほどに可愛い少女がいた。

「相変わらず早いね…その子が美里ちゃん？」

昴の横にいた美里ちゃんは私を見ると何故か顔を赤くしてじっと見つめてきた。

「…えつと？どうかした？」

「ふえ！？す、すみません！あまりにも綺麗だったので…つい見とれてました！」

美里ちゃんの発言に顔が熱をもっていくのが自分でもわかった。かなり恥ずかしい…

「そ、そんな…私よりも綺麗な人なんて他にもいっぱいいるでしょ？」

「いや、由宇は自分の魅力に気づいてない…」

私の問い掛けに昴が答えた。私の魅力？私にどんな魅力があるというのだろうか…

「…由宇は自然と周りの人を温かい気持ちにさせる」

「あつ…それわかるような気がします。私も昴さんから聞いてましたけど本当に側にいると安心するんです」

そう言われて更に顔が赤くなるのがわかった。……嬉しいけど恥ずかしい。

「あれ？もう来てたの？」

振り返ると葵と陸が立っていた。手には少し大きめの鞆を持っている。

「おや、皆さん早いですね」

葵達のすぐ後から光がやって来た。いつものように制服をきっちり着こなしている。

「あとは神威だけね」

私がそう呟くと昴が私の後ろを指差した。

「…どうしたの？」

「…神威ならあそこにいるぞ？」

昴の指差した先は階段へ続くドアの上だった。梯子を使って覗いてみると貯水タンクを背もたれにして神威が寝ていた。なんとというかとても穏やかな顔をして寝ているので…起こしにくいし…いつまでも見ていたくなるような寝顔だし……

「……はっ！？私何考えてるのよ」

私はふるふると頭を振ってさっきまでの気持ちを振り払う。元自分をを見てドキッとするなんて…私はナルシストじゃないんだから！！

「か、神威…起きて！」

神威の肩を揺ると、大きな欠伸をして彼は目を覚ました。

「…ああ、由宇か。皆来たのか？」

神威の言葉に頷いて答えたが私は神威の顔を直視できないでいた。

その後、葵と陸が選んだ曲を見て、自分が歌う曲を決めることになった。

「あ、これは…」

私が手にした曲は飯田舞の『キミの隣で…』だった。なんとなく歌詞を気にいったのだ。

「私はこれだな」

昂が選んだのは“Melodies Ob Life”これはF
O?の主題歌である。

「…一ついいか?なんで女性歌手の歌が多いんだ?」

神威が少し不満そうに呟く。それを見た葵が笑顔で爆弾発言を言った。

「だって神威には女装してもらってから」

一瞬…世界が止まったように感じた。

「……なんだって?」

神威が若干引きつった顔で葵に振り向く。

「だから、ファンクラブの皆から神威は女装させてっていう意見が多かったのよ。だから神威は女装決定ね」

「……………はあ」

神威の周りだけ空気がどんよりとしている。

「（…たぶん一年生の文化祭のことでも思い出してるんだろうなあ）」

神威の記憶を持っている私は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「じゃあちよつとだけやってみようか！」

葵が突然そう言い出し、神威がビクツと肩を震わせた。葵は今までに見たことないくらいの笑顔だ。

「いや…今しなくても…」

「さあ！いくわよ！」

葵は神威の言葉をスルーすると神威の手を引き屋上から出ていった。

「…神威、頑張って」

私は静かに呟いた。

S i d e O u t

（15分後）

「皆、お待ちせ！」

あれからしばらくして葵が笑顔で屋上に戻ってきた。

「一年生の時より凄いわよ！」

葵はニヤリと笑い入口に合図をする

「さあ、入ってきて！」

すると入口のほうから長身の女子生徒が歩いてきた。顔は俯いているので表情はわからない。しかし、耳が赤くなっているのでおそらく顔は真っ赤に違いない。

「え？空野先輩…この人本当に天野先輩ですか！？」

「そうよ？」

するとその少女は俯いていた顔を上げた。髪は黒のロングヘアで顔は少し化粧をしてあるためか女性らしさが現れており、体のラインは女子と言っても過言ではないくらいに細い。さらに恥ずかしいのか顔は赤く、目は涙で潤んでいる。

「…本当に神威か？そこら辺の女子よりよっぽど女らしいぞ」

陸の言葉に全員が頷く。

「…ほえ／＼／＼／」

美里にいたっては神威に見とれて固まっている。

「これは凄いですね…一年生の時もこんな感じだったんですか？」

光の問い掛けに葵は首を横に振る。

「一年生の時よりさらに綺麗になったわ！…神威、ちょっと写メ撮っていい？」

「いや…それは勘弁してくれ」

神威がそう言った瞬間葵が神威に歩み寄ると黒いオーラを出しながら笑顔を見せる。

「神威…その格好の時は声高くして女言葉にしてってさっき言ったよね？」

神威がビクツと肩を震わせて後ずさる。葵の豹変に周りは呆然とするばかりである。

「…返事は？」

「…は、はい」

神威はもはや泣きそうになっている。今の姿を見て神威だとわかる人はほとんどいないだろう。

「うん、よろしい！」

葵が元の笑顔に戻ると全員が安堵した。

「…それにしても神威はよく高い声をだせるな」

「うん、元々声はそんなに低い方じゃないから少し工夫したらわりと簡単に出せるのよ」

葵が怖いのか女口調で喋る神威はもはや男子とは思えない。

「…神威」

すると昴が神威に近づいてきた。

「どうしたの？」

昴はポケットから髪どめ用のゴムを取り出すと神威に渡した。

「…それで由宇と同じようにポニーテールにしてみてくれないか？」

昴の言葉に首を傾げつつも神威はポニーテールを作る。カツラであるため若干苦戦しつつもなんとか結べた。

「…やはり似てるな」

昴は由宇と神威を見比べながら呟いた。今の神威と由宇は同一人物なだけあってとてもよく似ている。はたから見たら姉妹にしか見えない。

「そ、そう」

少し戸惑いつつも神威は気分を紛らわせるために曲選びに戻る。

「神威、これは？」

由宇が差し出した曲を見て神威は考えると

「うん、これにする。何だかこれならいける気がするから」

神威が歌う曲は“優しくキミは微笑んでいた”、hack /
G・Uの主題歌である。

曲が決まったのでその日は解散となったが神威は家に帰るまでその格好でいると葵に言われ、由宇に慰められながら帰ったのだった。

第21話 三人の人気者（後書き）

白「話の中には出てきた曲を聞きたい人はYouTube等で調べてみてください」

夜「どれも私達のお気に入り曲だよ」

第22話 神子の夜（前書き）

久しぶりの投稿です。

第22話 神子の夜

神子Side

私は現在天野家二階の由宇の部屋にいる。時刻は深夜1時であり由宇達は皆眠っている。

「……………」

私は由宇と一緒にベッドに寝ている。しかし、今日は何故か眠る気分にならなかった。というか私には基本睡眠は必要ない。由宇と一緒に寝ていると温かくて気持ちがいいのだ。

しかし、今日は中々眠れなかったので私は人の姿に変わり、ベランダに出て月を眺めていた。雲一つなく星も綺麗に見える。

「…お姉ちゃん？」

ふと下から声が聞こえたので庭に視線を落とすと月がいた。

「あら、月じゃないの…あなたも眠れないの？」

月は頷くと近くの木を伝って私の隣に来た。

「神威は大丈夫だった？」

月の言葉に思わず笑ってしまった。結局、葵のせいで女装したまま帰った神威を見て由香が

「お姉ちゃんが二人いる!？」

と言つて神威がだいぶ落ち込んでしまったのだ。追い撃ちとばかりに由香に

「凄い!絶対にばれないよ!綺麗だし」

と、言い換えれば女に見えても不思議じゃないと言われてしまい、更に落ち込んでしまったのはつい数時間前のことだ。

「神威には悪いけどやっぱり似合ってたわ」

そのまま二人で笑い合う。

「ねえ、お姉ちゃん。ちょっと散歩しない？」

私は少し考えると頷く。

S i d e O u t

その後、神子は月を肩に乗せて人の姿のまま出かけることにした。服装は上下白い服に白のロングコートという季節に全く合わないが何故か神子が着ていると不思議と違和感がない。

「由宇、ちょっと借りていくわね」

由宇の机の中から使わなくなったヘアゴムを借りて由宇と同じポ

二―テールにする。

「じゃあ、行つてきます」

そう言つて二階から飛び降りると誰もいない道を歩き出した。

「月が綺麗ね……」

「うん……」

真つ白な女性が肩に黒猫を乗せて歩く光景はとても幻想的だった。

ちなみにこの真夜中の散歩が気に入った二人が後にたまたま人に見られて『真夜中に現れる妖精』と呼ばれるのだがそれはまた別の話である。

二人は街の外れにある公園に来ていた。

「……お姉ちゃん」

公園のベンチに座った神子に月が神子に話し掛ける。

「なに？」

「お姉ちゃん、最近元気ないね……」

「……」

神子は視線を外すと月を見上げる。

「私はダメな神様よね…」

「…え？」

神子がふと呟いた一言に月は首を傾げる。

「いくら見習いだからっていつでも悩んでいる女の子一人救えないなんて…」

悔しそうに俯く神子に月が言葉をかけようとする…その瞬間

『なんだなんだあ！？しばらく見ない間にすっかり腑抜けになったもんだね！』

二人が声のした方を見ると一匹の狼が公園に入ってきた。藍色の毛並みと右目の傷が印象的だった。

「…天狼^{てんろう}」

天狼と呼ばれた狼は一瞬光ると神子と同じくらいの女性に姿を変えた。髪は藍色のセミロング。そして黒いロングコートで右目は閉じられている。

「懐かしい気配がしたから来てみたら…あんたらしくないねえ…何があつたんだい？」

切れ長な目を細めて天狼は神子を見る。

「実は…」

神子はこれまでの経緯を天狼に話した。

「へえ…あんたも大変だねえ」

天狼は髪をかきあげながら息を吐く。

「お姉ちゃん…この方は？」

「ああ、月は会ったことないわよね。彼女は天狼。私の幼なじみでライバル…かな？」

「なんで最後が疑問形なんだい？」

月が驚いているところに天狼が言葉を挟む。

「月が知らないのも無理ないわよ。最後に会ったのは400年前だったかしら？」

「あ、私生まれてないね」

神子の呟きに天狼の顔が少し引き攣る。

「いくら神として生きてるからって女性が年齢関係の話をするのはどうかと思うんだけどねえ…」

天狼は再び溜息をはくと、それよりも…と言って神子を見る。

「久しぶりに一戦やるかい？悩んだ時は派手にやるのが一番だよ！」

神子は一瞬ぱかんとした表情をしていたがすぐに苦笑いをして頷く。

「そこないとね!」

「二人とも準備はいい?」

公園の周りに結界をはると二人は向かい合う形で立つ。

「懐かしいねえ…」

「ええ、確か50勝50敗50引き分け…だったかしら?」

月は二人の会話を聞いて苦笑いするが二人は気にせずに姿勢を低くして構える。

「…始め!」

開始の合図と共に二人は同時に駆け出す。神子の体から赤いオーラが吹き出し、天狼からは青いオーラが吹き出る。

神子が左手で目の前を水平に薙ぎ払うと天狼はジャンプしてそれを回避する。地面には巨大な爪の跡がつく。

「…そら!」

天狼の蹴りを右手で受け流す。そして天狼の着地と同時に振り返りながらの回し蹴りを放つ。

「おっと！」

天狼は神子の蹴りを屈んで回避するとそのまま掌底を繰り出す。神子も同時に掌底を放ち、お互いの手の平がぶつかり合う。

「うわっ！？」

「……っ！！」

そして同時に二人共吹き飛んだ。

「ああゝ！また引き分けかい！！」

「…そうだね」

時間は短かったが二人は戦闘態勢を解いた。

「あれ？もう終わるの？」

月が二人を見ながら首を傾げる。

「ああ、昔からの馴染みだからねえ。すぐに自分の力が通じるかわかるのさ」

「これで50勝50敗51引き分けだね…」

二人はお互いに笑い合う。

「神子、あんたが難しい問題を抱えてることはわかる。でもあんたならどうにかできるって私は思うよ」

「…そうかな」

「うん、あんたなら大丈夫さ！私もこの街にしばらくいるからね。相談したいことがあるなら何時でも言いな。話し相手にはなるよ…じゃあね」

そう言って天狼は公園から出て行った。

「私なら大丈夫…か」

神子は天狼の後ろ姿を眺めながら小さく呟いた。

「うん…私が由宇を導かなきゃ…それが私にできることだから」

しっかりと前を見つめる神子の背中を月が照らしていた。

第22話 神子の夜（後書き）

今回は少し戦闘描写を入れましたが。後々また入れていきたいです。

第23話 突撃隣の…（前書き）

神子がよく喋ります

第23話 突撃隣の…

天野家では朝食の準備は主に由香が担当している。理由は神威と由宇が二人とも朝が弱いからである。

いつものように目覚まし時計の音で目が覚めた由香は眠たい目を擦りながら洗面台に向かう。顔を洗いいざ朝食を作ろうとした時、キッチンからいい匂いがただよってくることに気がついた。

「（あれ？誰だろう…お姉ちゃんかな？）」

キッチンに入ると長い白髪が目に入る。

「お姉ちゃん？珍し…い……」

由香は言葉を詰まらせた。キッチンにいるのが猫耳に尻尾で、さらに真っ白な着物を着た白髪の美人だったからである。

「…おはよう」

「…え？お姉ちゃん？」

由香は目を擦って見間違いないかを確認める。

「残念、ハズレよ」

「…まさか神子さん！？」

神子は頷くとニッコリと微笑んだ。

「ど、どうしたの？朝ご飯は私が作るし…それにその格好も」

神子は苦笑いしながら気まずそうに視線をそらした。

「着物を着たのはそんな気分だから。料理をしていたのは…」

神子がそこまで言った瞬間

「神子…！朝飯食べさせておくれ…！」

リビングに藍色の髪をしたスタイルのいい女性が“窓”から入ってきた。

「…彼女が来るからよ」

神子は溜息をはき、由香は突然の来訪者に啞然としていた。

「…これは…」

「凄い…」

「どれだけ食べるのよ…」

上から神威、由宇、由香である。現在テーブルの上には大量の料

理が並び、その八割を藍色の髪をした女性：天狼が食べていた。

「うん！やっぱり神子を作る料理は美味しいねえ〜！」

「天狼：いい加減自分で料理くらいしなさい」

「ああ〜、無理だね！面倒だし！」

「…はあ」

天野家に突然、しかも窓から入ってくるという奇怪な登場をした女性が神子の幼なじみだと聞いた時、三人が同時に

『いや、嘘でしょ』

と思つたほどに自由な人物である。

しかし、自由で行動的な天狼としっかり者で天狼に注意をする穏健な神子。はたから見ればこれほどお互いをカバーしあえる組み合わせはない。

「だいたい、あなたは……」

「あつはつはつ！」

由宇達三人は普段の生活とは掛け離れた家のテンションに完全に置いていかれていた。

「えっと…神子さん？よく天狼さんが来るのがわかりましたね」

何とか場の空気を変えようと由香が神子に話し掛ける。

「ええ、当然よ。彼女、私の所に毎日ご飯ねだりに来てたのよ」

「あはは、だって神子の料理は美味いんだから仕方ないさ！」

「昨日の夜に久しぶりに再会したのよ。それで彼女のことだから朝からご飯ねだりに来ると思ってね。準備したら…結果はこの通りよ」

ここまでできたら最早呆れるどころか感嘆してしまう。

「久しぶりの再会って…どのくらい会ってなかったの？」

今度は由宇が質問をした。

「たしか…400年くらいだったかねえ？」

「…そうね」

「よ、400年…」

「まあ、神様だからな。だいぶ昔から生きてるんだろう」

絶句している由宇と由香に神威が声をかける。

「え、えっと…ちなみにその間は何を食べていたんですか？」

「もっぱら姿を消してその辺の食卓からちよいちよいとね」

『（あんた神様だろ！そんなことしていいのか！？）』

三人は同時に心の中でつつこんだ。

「三人とも…彼女に常識は通用しないわよ？勝手に、しかも窓から入ってくる時点で気づくべきよ」

流石というべきか神子はいつもの通りにしているあたり流石は幼なじみというべきだろう。

三人は同時に溜息をはくと天狼を見る。

「いやだねえ…そんなに見つめないでくれよあ」

「いや、そうじゃなくて…他にもあるんでしょ？」

由宇の問い掛けに天狼は目を見開き、神子はクスクス笑っていた。

「やれやれ、流石は神子のパートナーだ。鋭いね」

天狼は苦笑いした後、手を合わせて頼み込むように頭を下げた。

「泊まる所がないんだよ。だからしばらく泊めてくれないかい？」

「…やっぱり」

神子は額を押さえて溜息をはき、他の三人は苦笑いをしていた。

「まあ、神子の知り合いなら大丈夫でしょ」

「うん、私もいいと思うよ！」

「俺もかまわない」

「あんた達…ありがとう！」

天狼は笑いながら由宇に抱き着いてきた。

「まあ、何にしても問題が一つ…」

神子の言葉に天狼以外が頷く。天狼は首を傾げる。

「なんだい？問題って？」

そして天狼以外が同時に口を開いた。

『食費がかなり増える！』

天野家に新しい神様がやって来た。

第23話 突撃隣の…（後書き）

次回、また新キャラがでるかも…

第24話 図書館にて…（前書き）

あれ？色々大変なことに…（汗）

第24話 図書館にて…

騒がしい朝食を終えて由宇達は学校へと向かっていた。

「今日が火曜日…今日を入れたらあと六日で本番かぁ」

由宇はコンサートへの日数を数えて溜息をはいた。

「まぁ…頑張るしかないさ」

隣を歩く神威が由宇にそう言うが彼もまた不安そうにしている。

「そつか…神威は女装しなきゃいけないんだよね」

神威の肩がピクリと反応する。

「ああ、それが心配なんだ…だから、その話はもうやめようか？」

神威がもの凄い笑顔で由宇を見る。顔は笑っているが目が笑っていない。由宇は額に青筋を浮かべながら頷く。

「（神威の前でこの話はやめよう…）」

あまりにも神威の笑顔が怖かった由宇は話題を変えることにした。

「…っていつか」

由宇は後ろを振り返る。

「何で天狼さんがついてくるの？」

由宇達の後ろを天狼が藍色の髪をなびかせながら歩いてくる。

「いいじゃないか、由宇の通う学校が見たかったんだよ。姿はちゃんと消しておくから安心しな！」

「いや…そうじゃなくて」

「…無駄よ由宇」

神子は納得のいかないという顔をしている由宇を止める。

「…神子？」

「彼女を止めようとしても無駄よ」

「…だって何か理由があるんでしょ？」

「いえ…違うわ」

由宇はさらに首を傾げる。理由もなく私達についてくるわけがないと思っているからだ。

「だって、彼女何も考えてないんだから」

「…はい？」

「彼女は楽しそうだからついて行くだけ。特に意味はないわ」

由宇は額を押さえて溜息をはいた。本当に自由な神様だな、と深く考えるのはやめることにした。

それから普通に授業を受け、現在は放課後。由宇達は図書館にきていた。

何故かというと音楽室で歌の練習をしようとしたのだが今日は別のクラブが使っていたのだ。

そこで予定を変更し、今日は歌詞をしっかり覚えることにしたのだ。音楽プレイヤーで曲を聞きながら歌詞を見て覚える。歌う前に歌詞を覚えることも大切だ。

図書館に入ってからしばらくして光がやって来た。

「…光じゃない、どうしたの？」

由宇が光に声をかけると光はこちらに歩いてきた。

「ああ、由宇さん。ちょっと用事がありました。…歌詞を覚えているんですか？」

「うん。まあね。あ、そうだ！紹介するね！神子の幼なじみの天狼さん。今日から家でしばらく暮らすから」

天狼は光に笑顔で片手をあげて挨拶をした。

「あたしは天狼。よろしく頼むよ！」

「はい、こちらこそよろしく願います」

「そういえば光はなんでここに？」

「いえ、たまたま彼女に用がありました…」

光が視線を向ける先には茶髪をセミロングの長さまで伸ばして眼鏡をかけて本を読んでいる少女がいた。

「明日菜^{あすな}さん、仕事の打ち合わせをしたいのですが…」

光が声をかけると明日菜と呼ばれた少女は顔を上げ

「……わかった」

と、小さく呟いた。

「彼女は佐倉明日菜^{さくらあすな}さん、図書委員長を勤めています」

明日菜は何故か由宇をじっと見つめている。

「あ、あの…何か？」

思わず丁寧^{ていねい}に声をかけてしまった由宇だが次の瞬間、明日菜は衝撃の一言を口にした。

「……貴女の肩にいる猫…興味深い」

「「「!?」」」

由宇達は驚愕したが光だけ落ち着いていた。

「あなた…神子が見えるの？」

明日菜は頷いて天狼を指差した。

「……貴女も見える」

天狼は一瞬驚いたがすぐに明日菜を観察するように視線を鋭くする。

「何であたしが見えたんだい？普通の人間には見えないはずだけどねえ…」

睨む天狼を光が制するように手の平を向ける。

「明日菜さんは靈感が強いんですよ。以前から色々見えていたらしいです」

天狼は光の言葉を聞いても納得できないのか明日菜に静かに横から近づく。そして確認するかのように手を伸ばして顔に触れようとしました。

「……………」

明日菜は辞書くらいの分厚い本を畳むと真上に投げる。そして横からきた天狼の腕を椅子に座ったまま軽くのけ反って回避すると足を引っ掛ける。

「うわっ!？」

足を引っ掛けられたせいでバランスを崩した天狼は明日菜の膝の上に倒れこむ。すると、まるで狙ったかのように真上に投げた本が天狼の頭の上に落ちて“ゴスッ”という音が響いた。

「きゃん!？」

天狼が可愛い悲鳴をあげて痛み、明日菜はその天狼の耳を触りながら

「……興味深い」

と、呟いた。光は拍手をして、由宇達は呆然としていた。神子でさえ顔を引き攣らせている。一応神様である天狼があっけなく弄られている光景はなんとも言い難い虚しさが響いている。

「うゝ神子おゝ」

若干涙目になった天狼がとぼとぼと帰ってきたので神子が猫の姿のまま頭を撫でる。猫に撫でられる美女…なかなかシユールな光景である

ちなみに明日菜はそんな神様二人を見て

「……ユニーク」

と呟いていた。…どここのインターフェイス？

それから数十分、由宇達は静かに歌詞を覚える作業に集中する。
光も仕事を終えた後は本を読んでいた。

すると廊下が騒がしくなってきた。どうやら人が集まってきた
ようだ。

「…何かしら？」

テーブルの上で寝ていた神子がうるさそうに起き上がる。

「様子を見えます」

「……………」

光と明日菜が立ち上がる。光は風紀委員として、明日菜はうるさ
くて本に集中できないからだろう

由宇達が廊下に出ると以前髪の色を注意され光の制裁を受けた生
徒が気の弱そうな生徒の胸倉を掴んでいた。

「おい！ぶつかっておいで謝りもしねーのか！？」

「ぶ、ぶつかったのはそっちからで、僕は何もしてない…」

「なに？てめえなめてんのか！？」

「ひい！？」

なんとも目茶苦茶な事を言うものだと思っていた。当然光が止めに入る。

「校内暴力は禁止です。彼を離しなさい」

光を見た瞬間にその男子生徒は顔を歪める。

「てめえ！この前はよくもやってくれたなあ！」

光はやれやれといった顔で溜息をはく

「今は何にも武器は持ってないだろ！？この前は油断したが今日はそうはいかないぜ！」

大声で叫ぶ男子生徒に光は呆れたように肩を竦める。

「明日菜さん、お願いします」

「……了解」

明日菜は何処から取り出した辞書を光にほうり投げる。

「さて…生徒指導室行きですね」

光が本を手にして一瞬怯むが男子生徒は走り込むと光に殴りかかる。

光は体を捻って避けると本を横に薙ぎ払う。

「二度も同じ手をくらうか！」

男子生徒はしゃがんで本の攻撃を避けるとアッパーを繰り出した。
光はバックステップで離れる。

「おらああああ！」

そのまま再び男子生徒が殴りかかったので神威が助けようとした
瞬間

ヒュン！

まるで手裏剣のように神威の頬を何かがかかる。

「え？」

それは男子生徒の足元に刺さり、男子生徒は思わず足を止める。
床に刺さっていたのは何の変哲もない本の槌だった。

由宇達が振り返ると何かを投げた態勢のままの明日菜がいた。

「え？ええ！？明日菜さん今の何！？」

「…槌を投げただけ」

由宇の質問に平然答えた彼女は光の隣に並ぶ。

「僕は右から…左は任せます」

「……わかった」

明日菜は光の言葉に無表情のまま頷くと同時に走り出す。そして光が本を振り下ろす。男子生徒は驚きながらも咄嗟に左へと回避する。

すると明日菜がジャンプして本を振りかぶり一気に振り下ろした。本は見事に男子生徒の頭を直撃した。ちなみに殴ったのは本の角の部分。非常に危険なので絶対に真似をしないように…

一同啞然。光と明日菜は特に気にした様子も無く駆け付けた風紀委員の生徒に事情を説明した。

「えっと…何からつつこんだらいい？」

「…あたし、あいつらが人間じゃないように思えてきたよ」

由宇は顔を引き攣らせて天狼は呆れていた。

その後、明日菜と光に色々と質問をしたが

「風紀委員ですから」

「…大した事じゃない。私は彼を手伝っただけ」

そう答えるだけであり、神子と天狼曰く特別な力は持っていないとのこと。結局謎を抱えたままその日は終わってしまったのだった。

第24話 図書館にて…（後書き）

明日菜は天がリクエストしたキャラです。モデルは勿論あの対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスです。

10万PV突破記念特別話（前書き）

今回はリクエストにお答えして神子と天狼の出会いの話をしたいと思います。

10万PV突破記念特別話

「ねえ、天狼さんと神子さんって幼なじみなんだよね？」

とある休日の昼頃、リビングで皆がくつろいでいる時に由香が突然口を開いた。

「ええ、私と天狼は幼なじみよ。それがどうかした？」

「うん、二人の幼い頃の話が聞きたくて」

神子はクスクスと笑うと懐かしそうに目を細めた。

「私達が幼い頃ね…聞きたい？」

「うん！」

「あ、じゃあ私も！」

「…俺も興味がある」

由香が座るソファーに神威と由宇も加わる。

「そうね…何から話そうかしら…」

神子は神威達と向かい合うように座ると尻尾をくるりと回し静かに口を開いた。

約1000年前

天界：それは人間の住む世界とは別の世界。近いようで遠い、遠いようで近い。そんな場所にある神が住む世界だ。

その天界の少し外れた場所に私の住家はあった。

「……………」

私は無口で殆ど自分から話をしないタイプだった。だから修業にしても一人でこっそりと、それも静かな場所ですりたかった。

私は親元をすぐに離れて一人で天界の外れた場所にある使われなくなった小屋で生活していた。

天界では神も人の姿で生活している。なんでも人が一番仲のいい種族だから…らしいが私にとってはどうでもいい事だった。

私は瞑想を終えると神力の鍛練を始める。一人暮らしを始めてから私は毎日修業を欠かさなかった。『早く一人前になりたい』とそんな事ばかりを考えていた。といってもこれは建前で実際はただ自分のことを認めてもらいたかっただけ。

今思えばこの頃は私も若かった…と言えば少し違つかしら。一応今も神の中では若い方に入るし。

私の一日は朝早くから始まる。

まずは顔を洗いに近くの川まで行く。運が良ければその川にいる魚をとって朝食に並べたりもする。

家に帰ると着替えて朝食をすませてからすぐに鍛練を開始した。岩の上に座り目を閉じて集中する。体の中にある力の流れを操作して全身に纏う。

力の流れは速い方がいいため、できるだけ速くできるように集中する。

その後は近くの草原で体術の練習。それが一段落したら家に帰り掃除等を済ませる。すると丁度昼ぐらいの時間になるのだ。

昼食後はしばらくのんびりと縁側に腰掛けてお茶を飲みながら暇を潰す。そして夕方頃に神力を使った術の練習をしてから夕飯を食べ、風呂に入り、読書をして寝る。これが私の生活だった。

そう、彼女に会うまでは…

ある日、私は天界の街中に来ていた。街中の様子は昭和の日本を想像してもらおうといい。

その時の私の見た目は人間でいう12歳くらい…といっても普通の人間の数十倍生きているが。

着ているのは白い着物で髪はそのままだと地面につくほど長いめ細くて赤いリボンを使ってツインテールにしていた。

私が街中に行くことは滅多にない。精々食料を調達にくるくらいだ。そして私は滅多に喋らないため街の神達は私のことを「無愛想で可愛くない奴だ」と嫌っていた。

「おや、神子かい。食料の調達かい？」

私が目的の建物に入ると優しい微笑みを浮かべたお婆さんが出てきた。

「ええ、いつもと同じだけちょうだい」

おそらく彼女が私が唯一口を開き気を許せる相手だろう。彼女は作物を司る神で、この天界の神達の中でも最年長の部類に入る。

彼女には名前がない…正確にはたくさんあつてどれを名乗ればいいか迷っているらしい。だから私は勝手に『永花^{えいか}』と呼んでいる。彼女の微笑みが花のようでそれが永遠に続くように、と。

食料が入った籠を背負って帰り道を歩く。神は食事が必ずしも必要ではない。ただ、神力の回復を助けるので私は毎日食事を欠かさずとっていた。

家に帰り着いたのは夕方、辺りは夕日で一面黄昏に染まっていた。私は荷物を置くといつももの鍛練のために草原へと出かけた。

私が草原に着いた時、いつもとは違う光景があった。

黄昏に染まった草原にぽつんと一人の少女が立っていた。夕日に染まってはいるがそれでもはっきりわかる藍色の髪、同じ色の着物、そして髪をとめる髪飾りとその隙間から出ている獣耳。

しかし、なによりも寂しそうに夕日を見上げる顔が美しくて……私はその姿に思わず見とれてしまった。

どれだけそうしていたのか、彼女は私に気がついて振り向いた。

「……誰？」

私はそのこえでハッと我に帰ると慌てていつもの無表情に戻った。

「私は神子。ここ近くに住んでるの。あなたは？」

彼女は先程とは違った明るい笑顔で私を見る。

「私は天狼。よろしく」

これが私と天狼の出会いだった。

私が天狼と出会ってから彼女は毎日同じ時間に来るようになった。

彼女はただ私の鍛練を黙って見ているだけだった。私もそんな彼女に何も言わずただ黙々と鍛練を続けた。

気がつけば天狼と出会ってから数年の月日が流れていた。

そんなある日、ふと彼女が私に話し掛けてきた。

「ねえ、神子はなんでいつも“独り”で鍛練してるの？」

「…え？」

あまりにも突然の言葉に私は呆然とした。

「神子っていつも独りで鍛練してるじゃない。他に友達とかいないの？」

私は何故か胸の奥がズキリと痛んだ気がして思わず顔を背けた。

「わ、私は独りがいいのよ」

「…本当に？」

背後から聞こえる声に私は思わずビクリと肩を震わせた。

「神子って何だかいつも寂しそうにしてるよ？」

「そ、そんなこと……」

そう言われて考えた。私は何故独りなんだっけ？

早く一人前になるため？

独りの方が気が楽だから？

違う……きっと私は怖いんだ。あまり感情を表に出さない私を周囲の神達は嫌っていて、いつも私を避けた。

そういえば友達を作ろうと何度か試してみたこともあった。しかし、上手くいかなくて時には拒絶されることもあった。その時、とても辛くて、悲しくて……

それから私は周りに頼る事を止めた。親のかけてくれる優しい言葉すら私を苦しめる気がして私は一人暮らしを始め、毎日鍛練をして寂しさを紛らわした。いつかのようにまた拒絶されるのではないかと不安で仕方なかった。

「本当は独りは嫌なんですよ？」

「……っ……！」

天狼の言葉に思わず息を呑んだ。

私は思わず逃げ出そうと駆け出した。しかしそんな私の右手を天狼が捕まえる。

「待つて、神子！」

「離して！あなたに何がわかるの！」

振り返って思わず怒鳴った私は再び息を呑んだ。

その時見た天狼の顔がとても寂しそうだっから。

「わかるよ…だって、私も同じだから」

「…え？」

天狼は出会った時と同じように夕日を見つめた。あの時と同じ寂しそうな顔で。

「私も友達がいらないんだ…私は神力を操るのが下手でいつも馬鹿にされてた」

天狼の手は離れていたけど私はじっとその場に立って天狼を見ていた。その横顔は儚くて、今にも消えてしまいそうなくらい美しく…

「だからいつも独りで過ごしてた。そんな時この場所を見つけたの。そしてそこで鍛練してる神子を見て…綺麗だっと思った」

「…え！？」

私は聞き間違いではないかと思いながら天狼を見た。

「そ、そんなわけないでしょ！私が綺麗だなんて…冗談はやめてよ…」

こんな無表情で無口な私が綺麗だなんて冗談だと私は思ったが彼女は首を横に振って私の方に振り向いた。

「私はね…頑張ってる神子に憧れてたんだ。毎日欠かさず鍛練をして、いつも一生懸命で、辛い顔も見せない神子が好きで…だから毎日ここに来てると元気をもらえるの…本当に神子はすごいよ」

この時、私は初めて認めてもらえた。ずっと一人前になって誰かに認めてもらいたくて…それが叶った。

思わず泣きそうになった私は天狼に背を向けて涙を堪えた。

「ねえ、神子…明日から私もここで一緒に鍛練してもいい？」

私は頷いて肯定した。今声を出したら震えて上手く喋れない気がしたから。

「よかった！じゃあもう一つお願いがあるんだけど…」

私が涙を堪えながらゆっくり振り返ると、天狼は何やら顔を赤くしながらもじもじしていた。

「あ、あの…私いつも内緒で神子に会いにきてただけ…今日ばれちゃって…喧嘩して家を飛び出してきたの…だから…その」

私は彼女が言いたいことを理解した。そして同時に可笑しく思わず笑ってしまった。それはもう思いつきり笑った。

「え？み、神子、どうしたの！？」

「あはは、あは、ごめんなさい…あまりにも可笑しくて。親と喧嘩したから泊めてほしいんですよ？」

私がそう言うと天狼は更に顔を赤くした。

「わ、笑わないでよ！私は神子に会いたくてやっただよ？」

私は彼女に背を向けて歩き出した。私のために親と喧嘩したなんて…可笑しくて、呆れて、でも…とても嬉しかった。

「あ、神子！返事聞いてないよ！」

だから私は振り向きながらありったけの笑顔で

「泊まるんでしょ？早く来なさい。置いていくわよ？」

彼女に手を差し出した。

「あ……うん！」

天狼はしっかりと私の手を握り返してくれた。

その後、天狼と夜遅くまでずっと話をした。次の日、目が覚めると何故か天狼に抱き着かれていて全く動けず、私は初めて鍛練をサボった。

それからというもの、天狼は毎日私の作った料理を食べに来た。

夕方の鍛練は二人で一緒にやるようになり、天狼は私と互角に戦えるほどつよくなった。

普段の生活も変わった。天狼は私をよく街に連れ出すようになった。始めは私も戸惑ったが、天狼がそばにいてと思うと自然と笑顔になれた。私達を見て周りが驚いた顔をしていたのはいい思い出だ。

300年たったころ天狼は今まで以上に活発な性格になり、口調も変わった。昔の可愛い天狼も良かったけどこれはこれでいいと思った。

さらに活発になった天狼はよく悪戯をするようになり、それを私が謝るということが日常茶飯事となった。おかげで私達は有名なコンビとして天界中に知れ渡った。

とある食卓の料理を天狼がつまみ食いしたり、酒を飲んだ天狼に絡まれて私も飲まされ、酔った勢いで街中で二人で暴れてこっぴどく叱られたりもした。でも、毎日が楽しくてとても充実していたと私は思う…

「……と、こんなところかな」

一通り話終えた私はゆっくりと背伸びをした。

「神子さんって昔と今じゃ全然違うんだね……」

由香が私を見ながらそう言った。

「そうね、あれから私も随分変わったわ……天狼もいつの間にか口調が変わってたし」

私は人の姿になるとキッチンから饅頭を持ってきてテーブルの誰も座っていないソファアの前に置いた。ついでにお茶も入れる。

「神子さん、それは？」

私は不思議そうな顔の三人にクスリと笑ってみせると時計を見てカウンタをとる。

「3……2……1……」

「おじやまするよー！」

私のカウンタと同時に天狼が開いている窓から中に入ってきた。

「いらっしやい、おやつならそこよ」

「お、さすが神子！私のことよくわかってるねえー！」

私は天狼に振り返りながら笑顔を向ける。この笑顔は彼女のおかげでできるようになったんだと改めて実感した。

だから…私はそつと祈る。

「当たり前よ。私達、親友なんだから」

願わくば、これからもこの関係が続きますように。

10万PV突破記念特別話（後書き）

天狼の性格が違いすぎて書いた自分でもびっくりです（汗）

お知らせ（前書き）

この作品を読んで下さっている心の広い皆様方に心からの感謝を
。

お知らせ

この度、この作品を最初から書き直す事にしました。

私の処女作ということもあり…表現、文章構成等が大変低いレベルになっています。

そこで、グダグダになりつつあるシナリオをもう少しまとめるために、登場人物はそのままにストーリーを変えて書き直したいと思います。

タイトルは『猫パニック〜完全版〜』としたいと思いますので、中身は変わりますが由宇達に再び会いたいと思う方々がいれば、どうぞ読んでみてください。

では、次は新しくなった猫パニックでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8654/>

猫パニック！！

2011年7月22日13時08分発行